

三重県斎宮跡調査事務所年報1985

史 跡 斎 宮 跡

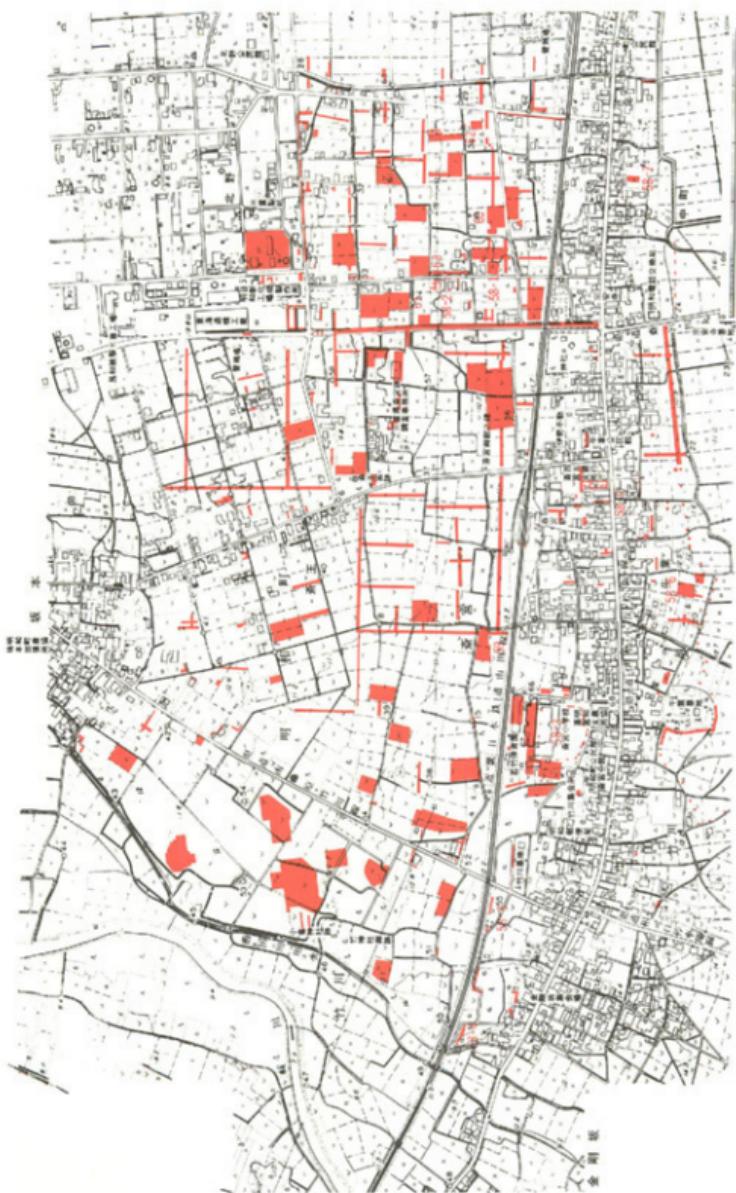
発掘調査概報

昭和61年3月

三重県教育委員会  
三重県斎宮跡調査事務所



第60次調査全景（東から）



# はじめに

さかさまに 行かぬ 月日よ

—源氏物語より—

昭和54年斎宮跡国史跡指定記念講演に講師としてお招きした円地文子先生が『この言葉』を色紙に書かれ、その額が当調査事務所に掲げてあります。私達所員一同は、この言葉を斎宮跡保護保存推進の心の糧といたしております。

わが国古代・中世史の中で特異な位置を占める斎宮跡を調査研究し、ここに現に住む地域住民の生活との調和をはかりながら、いかに保存し、今日的に活用するかは、県政にとっても特に重要な課題の一つであります。

この大きな目標に向かって、これまで文化庁・明和町と協力しながら、県としてはいくつのかの事業を行ってきました。

まずその第1は、昭和54年多数の地権者の同意を得て国史跡の指定を受け、当調査事務所を開設いたしました。そして、発掘調査の推進をはかるとともに展示室を設け、調査の成果を公開し、今では年間一万人以上の見学者を迎えるまでになりました。第2は、昭和57年度斎宮跡のいわばシンボルゾーンである斎王の森周辺を整備し、学びと憩いの場として『史跡公園』を開設しました。第3には、「斎宮跡と町づくり」を中心課題として『斎宮跡整備基本構想（試案）』を作成しました。

このような経過の中で、地元明和町民をはじめ、県内外の多数の有識者から「斎宮へ博物館を」の要望が急速に高まり、その願いが遂に具体化されることになって参りました。

それは、先月三重県文化審議会から「三重県における博物館構想」が答申されたのを受けて、歴史系のテーマ博物館を斎宮跡に建設することが本決りとなったのであります。

ここに、本年度の発掘調査の成果とともに、この喜びをご報告申し上げ、博物館建設推進に銳意ご尽力をいただいた斎宮跡調査指導委員の諸先生をはじめ、文化庁・明和町の関係機関、さらに推進の立役者地元関係各位に感謝の意を表するとともに、今後のご指導とご協力を念願して、発刊のご挨拶といたします。

昭和61年3月

三重県斎宮跡調査事務所

所長 佐々木 宣 明

## 目 次

I 調査の経過.....	1
II 第59次調査.....	4
III 第60次調査.....	19
IV 第61次調査.....	33
V 第62次調査.....	49
VI 第63次調査.....	61
VII 第58次調査（個人住宅新築等の現状変更緊急調査）.....	79
VIII 調査事務所要覧.....	87

## 例 言

1. 本書は、三重県斎宮跡調査事務所が、国庫補助金を受けて昭和60年度に実施した史跡斎宮跡の発掘調査の概要と事務所要覧である。
2. 第Ⅳ章は、明和町斎宮跡保存対策室が国庫補助金を受け調査主体となって行った現状変更緊急調査と、原因者負担による現状変更緊急調査である。発掘調査は斎宮跡調査事務所が担当した。報告書については、別に明和町が発行している。
3. 遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第6座標系を基準としている。方位の標示は座標北を用いた。
4. 遺構の時期区分については、「斎宮跡の土師器（1984年、年報）」による。
5. 遺構標示記号は次の通りである。  
S B ; 建物 S K ; 土塙 S D ; 溝 S E ; 井戸 S A ; 塚 S F ; 道路
6. 斎宮跡の調査全般については、元京都大学教授福山敏男氏、三重大学名誉教授服部貞藏氏、橋山女学園大学教授久徳高文氏、奈良国立文化財研究所所長坪井清足氏、京都府立大学教授門脇禎二氏、名古屋大学教授樋崎彰一氏、名古屋大学教授早川庄八氏、皇學館大学助教授渡辺寛氏の指導を得た。
7. 本概報の執筆・編集は、三重県斎宮跡調査事務所の、佐々木直明、山沢義貴、倉田直純、杉谷政樹、泉雄二があたり、田中久生、刀根やよい、坂真弓美、若林真登、松田早苗がこれに協力した。

## I 調査の経過

計画調査は、通称中町裏の第2種保存地区の昭和63年度見直しに対応するため、この地区的未調査地点に重点をおき、4ヶ所にわたりて調査区を設定するとともに、第1種保存地区西部の状況把握のため広頭地区で1ヶ所実施した。

第59次調査は、第1種保存地区でも西南部の広頭地区の中において、近鉄奈良駅西側踏切の北側で5月から7月にかけて調査した。ここでは、古い時期の遺構としては、奈良時代中期の竪穴住居多数と1棟の掘立柱建物、平安時代中期以降の掘立柱建物と溝、井戸等が検出された。東西方向の溝と掘立柱建物の柱通りが、宮城中央から東部の地割りとは異なり、字塚山南端を通る通称古道沿い地割りに一致することが特に注目された。

第60次調査から第63次調査の4次の調査は、第2種保存地区に集中して実施した。7月から9月にかけては、近鉄線に近い字東加座地区で、第60次調査を実施した。ここでは、奈良時代の土塙、鎌倉時代の溝のほか、検出した掘立柱建物は、初期から後期の平安時代の建物であった。この調査地点は、宮城東部の地割りのうち、北と東からそれぞれ2条目の西南隅にあたるが、南辺と西辺の溝については、予想される地帯に溝は存在するものの、他所に比較するとやや不明瞭なところもあり、接する調査に課題をおくったこととなった。

第61次調査は、調査事務所東の西加座地区で昭和58年度におこなった第51次調査に南接して実施した。奈良時代末期から平安時代末期までの各時期の掘立柱建物が検出され、第51次調査の建物と合わせて検討を加えると、後述のような各時期の建物の変遷に興味深い事実を指摘することができた。また、井戸SE4050についてはかつて昭和56年度に実施した第37-4次調査と同様の鋼矢板を四角にたてならべる工法で安全をはかり、完掘し、土器の変遷をより明確にできる資料とともに馬齒や人面を描いた高杯脚部を検出した。

第62次調査は、通称役場道に近い東加座で、12月から2月にかけて実施した。奈良時代では竪穴住居、掘立柱建物、井戸、平安時代では初期から後期の掘立柱建物、土塙を検出した。この地区より近鉄線に近い南側の2次の調査で奈良時代の掘立柱建物がこれまで検出されているが、これがさらに北に広がってくることが注目された。また、井戸SE4155からは、矛と刀子の柄を検出した。

第63次調査は、通称木戸の世古に接する西加座地区で、第62次調査と併行して12月から2月にかけて実施した。平安時代初期から後期にわたる掘立柱建物、井戸、溝、土塙等を検出した。保存状態の良好であった井戸SE4250では、その底で小型の井戸枠を確認した。

現状変更に伴う緊急発掘調査は、町道側溝に関して1件、斎宮小学校校庭整備に関して1件、近鉄保全柵に関して1件の合計3件については原因者負担の調査であり、他の5件は個人住宅に伴うものであり、調査面積1,260m<sup>2</sup>で、例年に比べて少ない。このうち第58-4次調査で検出した大型の柱掘形の存在は、その時期を正確に特定できないが、中垣内地区の台地縁辺部にあって、これまで検出していない方に乘る建物あるいは塀という点から特に注目された。

一方、史跡指定後7年をへて、明和町・町議会をはじめ、各方面的関係者から高まってきた「斎宮跡へ博物館を」の熱望は、昭和61年に入り、にわかに具体的な様相を見せてきた。昭和60年5月に三重県文化審議会に諮問された博物館問題は、昭和61年2月に「三重県における博物館構想」として答申された。これによると、県内数ヶ所にそれぞれの地域の特色を生かしたテーマ博物館を設置し、これを統括するセンター博物館とからなる博物館ネットワークの構想であるが、着手順序としては、県立の歴史系のテーマ博物館としてまず斎宮跡からとかかるという内容である。これをうけて知事は、2月18日の記者会見上、来年度予算に基本設計費を計上すると発表し、これは昭和61年度第一回定例議会で可決された。以上のように、いよいよ昭和61年度から斎宮跡の博物館が、現実のものとして動き出すこととなったのである。

また、第60次調査の際には、斎宮跡保存啓発事業の一環として、今年度は明星小学校6年生33名による体験発掘をおこなった。恒例の秋の講演会には、斎宮跡の史跡指定当時、朝日新聞名古屋本社で健筆をふるった、現在朝日新聞東京本社編集委員の飯下彰次朗氏に「国民的ロマンとしての帝王」と題して御講演をいただいた。

昭和60年度発掘調査地区一覧表

調査次数	調査地区	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査期間	地 緯・地 番	所 有 者	備 考
58-1	6 A F K -C・D	186	60. 4. 23~ 60. 5. 4	明和町斎宮字西加座 2721-1	鈴木 常夫	盛土 第2種保存地区
58-2	6 A F H -N	50	60. 5. 18~ 60. 5. 23	明和町斎宮字西加座 2681-8	三村 勇	個人住宅新築 第2種保存地区
58-3	6 A C M -N	203	60. 7. 27~ 60. 8. 3	明和町竹川字東裏 3385-2	明 和 町	校庭整備 第4種保存地区
58-4	6 A B L -A	190	61. 1. 16~ 61. 2. 6	明和町竹川字中垣内 473-1	小家 澄雄	盛土 第3種保存地区
58-5	6 A D Q -Q	22	61. 2. 26~ 61. 2. 28	明和町斎宮字牛葉	明 和 町	町道側溝新設 第4種保存地区
58-6	6 A D R -V	522	61. 2. 26~ 61. 3. 20	明和町斎宮字木葉山 131-3	西山 嘉治	農業用倉庫新築 第3種保存地区

調査次数	調査地区	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査期間	地籍・地番	所有者	備考
58-7	6 A G S - G	66	61. 3. 22 ~ 61. 3. 27	明和町斎宮字中西611	山路 恵一	個人住宅増改築 第4種保存地区
58-8	6 A B M - A	21	61. 3. 27 ~ 61. 3. 29	明和町竹川字中垣内 430-3 他	近 鉄	保全翻新設 第3種保存地区
59	6 A C J - I	1,390	60. 5. 9 ~ 60. 7. 18	明和町斎宮字広頭 3379-1 他	富山 高他	計画的面調査 第1種保存地区
60	6 A G J - B · D · G	1,570	60. 7. 16 ~ 60. 10. 18	明和町斎宮字東加座 2450-1 他	山路 豊他	計画的面調査 第2種保存地区
61	6 A F F - H · I · D	1,310	60. 9. 17 ~ 60. 12. 2	明和町斎宮字西加座 2663-1 他	森下 齊他	計画的面調査 第2種保存地区
62	6 A G I - J · K	1,140	60. 12. 11 ~ 61. 3. 7	明和町斎宮字東加座 2425-1 他	川合修一他	計画的面調査 第2種保存地区
63	6 A F G - M · N	1,250	60. 12. 11 ~ 61. 3. 7	明和町斎宮字西加座 2659-1 他	七林貞次他	計画的面調査 第2種保存地区

## II 第 59 次 調査

### 6 A C J - I (広頭地区)

今回の調査地は宮城西部のなかでも東寄りの場所にあり、小字名では広頭地区にあたる。この地区はこれまで面的調査は実施されていないが、かつて昭和49年度に行った宮城範囲確認調査によって、幅4mの南北トレンチが設定され、全国的にも出土例の希な綠釉の大型壺、風字硯等が出土し注目された。周辺では、広頭地区より西側の東裏地区で第27次、第50次、第56次調査が、北側の塚山地区で第32次、第38次調査の5次にわたる面的調査が実施された。その際、奈良時代と平安時代の遺構が検出され、また、掘立柱建物、溝の方位が宮城中央部から東部にかけてのものが北に対し西へ偏るのに対し、北で東に振れるものが多いなど、宮城中央部から東部にかけての様相と異なることが、これまでに指摘されている。今回の調査はより中央部に近い広頭地区的状況を把握するために調査を実施した。

調査の結果、遺構を検出した黄褐色土地表面は西端では地表より0.3mと比較的浅いが、東に向かって徐々に深くなり東端では0.5mとなる。また、近代の畑作に伴うものと考えられる幅30cm、深さ30cmの小溝が調査区西部で、ほぼ一定の間隔で南北に掘削されていたが、幸い遺構への影響は少なく、奈良時代の竪穴住居10、掘立柱建物1、井戸1、南北溝1、平安時代の掘立柱建物20、井戸2、東西溝2、南北溝2と各時期の土塙を検出した。平安時代初期・前期と鎌倉時代以降の遺構は検出されなかった。

#### (1) 奈良時代中期の遺構

掘立柱建物1、竪穴住居10、井戸1、土塙12、南北溝1がある。これらの遺構は主に調査区中央から西で検出されている。

掘立柱建物S B3947は、調査区東南にあり東西3間、南北は1間分検出したが、調査区外に延びるため規模は不明である。3間×2間の東西棟になると考えられる。方位は平安時代の掘立柱建物と比較して振れが少なく東で南に5°振れる。竪穴住居S B3946より新しい。

竪穴住居は調査区中央から西のS B3899・3900・3901・3915・3920・3921・3938～3940と東部に他の住居とは離れてS B3946がある。規模は一辺3～4mのものが多く、最大のものはS B3900の東西5.4m、南北4mである。S B3899は調査区西端で住居東辺の一部を検出したのみで、また、S B3915より古いS B3901は大部分が削平を受け、わずかに南壁の一部が残るのみで規模は不明である。方位は東で南に10～14°振れるものが多いが、中央部のS B3920・3921は他のものとは異なり北で西に12°、東部のS B3946は振れが大きく27°振れる。このような竪穴住居のうちS B3920は一辺3.5m、深さ0.3mの規模を持ち、その最下層の約0.1mは堅く踏み

59次



第1図 第59次遺構実測図 (1:200)



締められ、張床が認められる。北壁にカマドを持ち、カマドの横には径 0.4m ほどの土塙がみられ、それより土師器杯・皿・甕・須恵器杯・鉢等がまとまって出土したことから、貯蔵穴の性格を持つ土塙と考えられる。また、住居埋土中からは焼土、炭化物が多く認められたこと、また住居床面付近からは建物の部材と思われる棒状、板状の炭化物が多量に検出されたことから、火災を受けて焼失した住居ではないかと考えられる。

井戸 S E 3910は調査区西南部に位置し、径 1.2m 程の円形を呈する。深さは約 2 m しかなく、周辺では通常湧水層まで達するためには 4 ~ 5 m 下げなければならず、なんらかの理由で途中で廃棄された井戸である。径 1 m の円形の土塙 S K 3909と重複し、その切り合いは不明であるが、出土する遺物も同じ時期のものであり、井戸を掘削するにあたり一連の作業で掘られたものと考えられる。

S X 3908は、井戸 S E 3910の西に位置し、約 0.4m 程の焼土塊である。焼土がみられることや、焼土中から底部の一部欠けた土師器の甕が出土したことから、竪穴住居のカマドの痕跡かと考えられる。

土塙については、調査区中央から西で S K 3893・3902~3907・3909・3913・3922・3923・3941を検出した。竪穴住居の周辺から多く検出されていて、特に調査区南西部には S K 3902~3907のように同じ位置に掘削され、その新旧関係はあまり明確ではない土塙がある。遺物はいずれの土塙からもあまり多くは出土していないが、判読不明の墨書き器が S K 3904・3907から 1 点ずつ出土している。

南北溝 S D 3891は調査区北西端に位置し幅 1m 、深さ 0.2m 、北の部分は平安時代後期の東西溝 S D 3890によって壊され、また東西溝の北側では続きを検出できなかった。出土した遺物は少ないが奈良時代中期の遺物をわずかに出土したことや、溝の方位が平安時代の溝と異なることから、この時期の遺構とした。

## (II) 奈良時代後期の遺構

この時期の遺構は少なくわずかに土塙 2 だけである。

土塙 S K 3892は調査区西北に位置し、東西 3.3m 、南北 2.4m の楕円形を呈する。深さは 0.4 m である。S K 3931は調査区中央にあり、径 1.7m の隅丸方形を呈し、深さ 0.4m である。いずれの土塙からも出土した遺物は少ない。

## (III) 平安時代中期の遺構

主に調査区中央部で検出され、掘立柱建物 9 、土塙 2 がある。

掘立柱建物のうち全体の規模の推定できるものは、5 間 × 4 間の東西棟 1 、5 間 × 2 間の東西棟 2 、5 間 × 3 間の南北棟 1 、5 間 × 2 間の南北棟 1 の計 5 棟だけで、他は調査区外に延びるため規模は不明である。方位は北で東へ 8 ~ 10° 振れるものが多いが、方位にのる S B 3942 や

北で東へ6°振れるS B3932、12°振れるS B3936もある。

東西棟の掘立柱建物のうち、S B3914は調査区西南にあり、5間×4間で北と南に廊を持つ二面廊付き掘立柱建物である。柱間は桁行2.1m、梁行2.2m、廊柱間2.1mで、北と南の廊柱掘形の径はやや小さい。また、S B3933はS B3914の東の位置にある。5間×2間になると考えられ、北側柱列はS B3914の北側柱列に揃えている。南側柱列は調査区外のため検出されていない。S B3926はS B3933の北にあり、同時期の土塙S K3928・3929より新しい。西と東の妻柱は浅いためか共に検出できなかった。S B3936はS B3933と重複する位置にあり東西3間分を検出した。3間×2間の東西棟になると思われる。

南北棟のものには、調査区東端にある5間×3間のS B195がある。昭和49年のトレンチ調査で東側柱列が検出されているが、今回の調査で西に廊がつくことが判明した。調査区中央のS B3932は南北4間分検出しているが、更に調査区外に延び5間×2間の南北棟になるとを考えられる。これ以外にS B3934・3935・3937があり、S B3934・3935は西には廊が伴うなど、南北棟5棟のうち3棟まで西側に廊がついている。

掘立柱建物のうちS B3932～3936は同じ位置を占め、平安時代中期にすべてが存在したとはいい難く、柱掘形から出土する遺物の中には古いものも見られるなど、建物の中には時期的にもう少し遡る可能性をもつものもある。

土塙S K3928・3929は調査区中央にあり、ともにS B3926より古い。南北2.2m、東西1.6mの楕円形を呈し、深さは約0.4mである。遺物はほとんど出土していないが、S K3928から綠釉陶器の楕が1点出土している。

#### (IV) 平安時代後期の遺構

掘立柱建物8、塙1、土塙2、東西溝1、南北溝2がある。

掘立柱建物はすべて東西棟で、方位は東で南に8°ほど振れる建物が多く、同時期の東西溝S D3890と方位は同じである。柱掘形から出土した遺物は少ないが、その出土した遺物からS B3911・3916・3925・3944・3948と、S B3930・3943・3945の2時期に分けられる。また、掘立柱建物S B3944の柱掘形の内部に焼土がかなり混入しており、火災の後建物が造営された様子が覗える。

調査区西部のS B3916、中央部のS B3925、東部のS B3944はともに5間×2間で東西溝SD3890から同じ距離を隔てて、柱通りを揃えて建てられている。柱間は梁行がともに2.1m等間で、桁行はS B3916・3944が2.1mでS B3925は小さく1.84mである。S B3925は西妻柱通りの柱掘形が末期の南北溝SD3919によって壊されている。また、西南部のS B3911は北側柱を4間分検出したが、他は調査区外であり、これも5間×2間の建物になると考えられる。S B3948は調査区東部にあり、S B3944と重複する位置である。3間×4間で北と南に廊がつく

二面廂付き掘立柱建物である。

S B 3930・3943・3945は後期のなかでも新しい一群である。S B 3930はS B 3944の西1mにあり、3間×2間の純柱建物である。柱通りはS B 3944に揃えられているが、軒が接しすぎているため、同時存在は考え難い。柱間は桁行2.0m、梁行2.1mである。S B 3945はS B 3944の南にあり、3間×3間の純柱建物である。柱間は梁行2.0m、桁行は不揃いで西より2.5m・2.0m・2.2mである。S B 3943は3間×2間で、桁行1.8m、梁行2.1mである。これまでの後期の掘立柱建物の方位とは異なり、東で南に16°振れ、平安時代末期の建物S B 3917の方位に近い。

土塙は少なく北西部のS K 3894、南東部のSK191がある。S K 3894はS D 3890と重複し、東西4m、南北2mの楕円形で、深さは0.5mである。S K 191は東西2m、南北5.5mの楕円形で、深さは0.3mである。昭和49年のトレンチ調査で検出されたもので、綠釉陶器9点が出土している。

東西溝S D 3890は調査区北部にあり、約60mにわたり検出した。東端でL字状に南に折れ曲がり南北溝S D 189となる。方位は掘立柱建物と同じで東で南に8°振れ、西端では幅約2m、深さ0.4mで、東に向かって徐々に深くなり東端では0.7mに達する。西の断面は台形を呈しているが、東では中央部分が一段と深くなり、昭和49年のトレンチ調査で検出したS K 190につながる。S D 3890とS K 190の関係は、その切り合いが明確に認められないこと、また出土する遺物がかなりの範囲にわたり接合することなどから、一連のものとして考えたい。S D 3890の深い部分は東端のS K 190の所で一旦とぎれるが、更に幅1mの南北溝S D 189と合流する。S D 189は深さ0.3mで南に向かって徐々に浅くなり、南端では検出されなかった。方位は北より西へ4°振れる。S D 3890とS D 189はその規模、方向から見て当地域を画する区画溝と考えられるが、その角度は約100°ほどあり、当地域の地割りについて今後に問題を残す。

南北溝S D 192はS D 189の西2mの位置にあり、幅0.6m、深さ0.2mで、方位はS D 189とほぼ同じである。S D 3890と重複して北に延び、末期の東西溝S D 188によって壊されている。SD 189の東では、ほぼ同じ方位を持つ南北溝S A 3949を6間分検出した。柱掘形は小さく遺物はほとんど出土しなかったが、方位から見てS D 189に伴うものと考えた。

#### (V) 平安時代末期の造構

この時期には造構は少なくなり、掘立柱建物1、井戸2、土塙3、東西溝1、南北溝1がある。前時期の東西溝S D 3890は埋没し、北2mの位置に東西溝SD 188がある。掘削時期については不明だが当該期の区画溝にあたると思われる。

掘立柱建物S B 3917は調査区中央に位置し、3間×2間の東西棟である。柱間は桁行2.4m、梁行2.1mで、方位は東で南に13°ほど振れる。後期の建物と比較して振れが大きい。

井戸S E 3895は西北に位置し、遺構検出面では径1.6m、途中より径1mの円形を呈する。S

E 3897は西端にあり、径約2mの隅丸方形を呈しているが、西半部は調査区外である。ともに2mほど掘り下げたが、完掘はできなかった。

土塙には西部のS K 3896、中央部のS K 3918・3924がある。このうちS K 3896は東西1.3m、南北0.5mで深さ0.2mである。埋土中からほぼ完形の山茶椀2、土師器の小皿9個体以上、口クロ製土師器小皿1、甕等が出土しており、土塙墓かと考えられる。また、S K 3918は東西溝S D 3890より新しく藤沢編年のII-4形式の遺物が出土している。

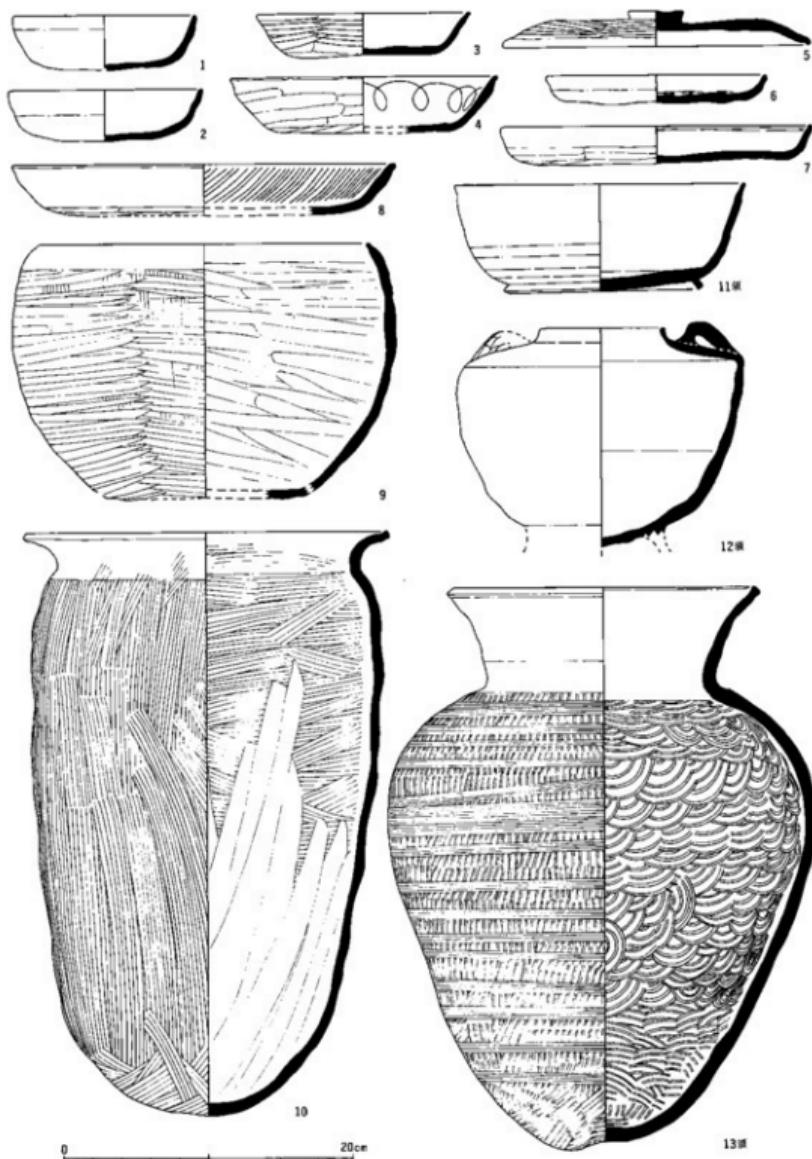
東西溝S D 188は調査区北端で検出された。昭和49年のトレンチ調査で幅1.2m、深さ0.8mの規模を有することが判明しているが、今回はその南の肩部を検出しただけである。方位は東で南に8°振れていって、南にある後期の東西溝S D 3890と同じ傾きである。出土した遺物から見て平安時代末期には完全に埋没したことが考えられる。

南北溝S D 3919は調査区中央を南北に流れ、幅0.5m、深さ0.15mで南に向かって深くなるが、北端では検出されなかった。東西溝S D 3890より新しい。

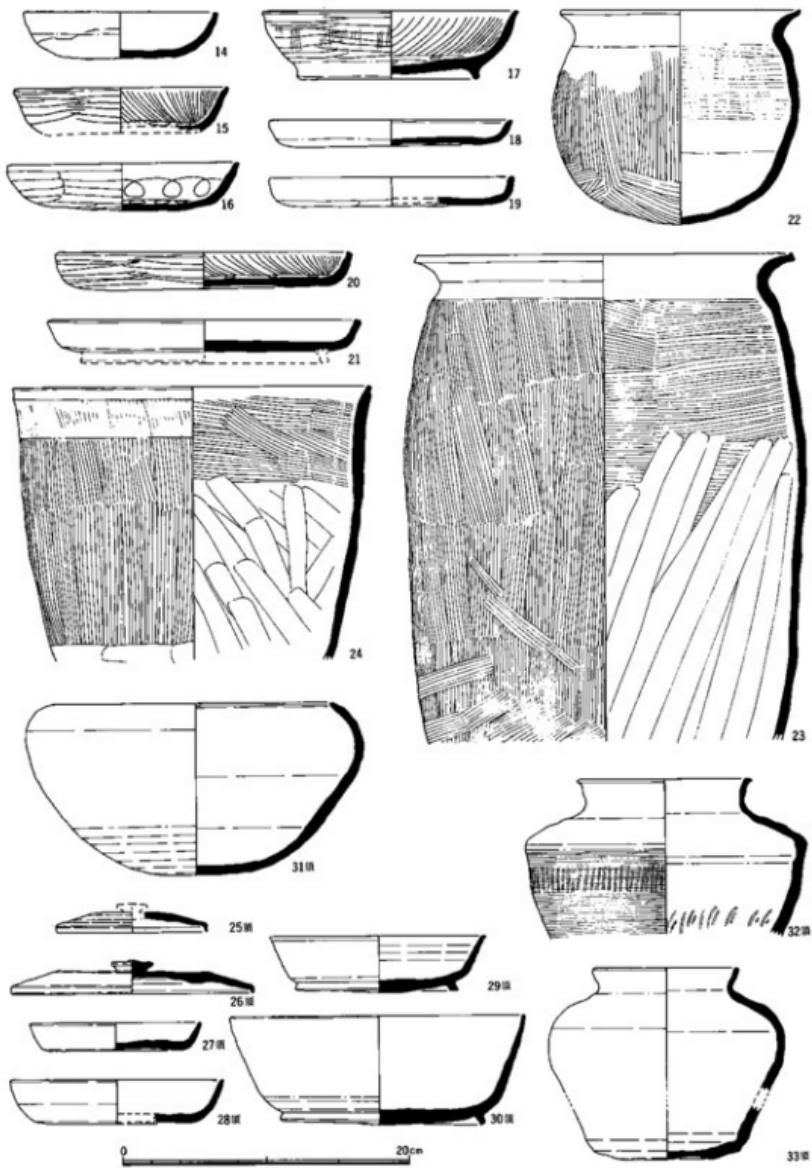
#### (VI) 遺 物

出土した遺物は整理箱で約150箱である。奈良時代中期の竪穴住居、土塙、井戸から出土したものと平安時代後期の東西溝S D 3890から出土したもののが中心で、奈良時代後期と平安時代中期・末期の遺物は少なく、平安時代初期・前期のものはほとんど出土していない。

**奈良時代中期の遺物** 竪穴住居、土塙、井戸から出土しているが、特にS B 3900・3920から良好な資料を得た。土師器杯には精良な胎土を持ち、色調は赤褐色で、調整は底部外面へラケズリをおこなうb手法でつくられるていねいなつくりのものと、胎土に砂が混じり、色調は淡褐色で、口縁部のみヨコナデを施す粘土ひも巻き上げ痕跡の残る粗製のものがある。粗製のものは、口径13~14cm、器高3~4cmのもの(1・2・14)があり、つくりのていねいなものは、口径15~16cm、器高3cm前後のもの(3・15・16)と、口径18cm前後、器高4cm前後のもの(4・17)がある。奈良時代前期のものと比べ、内面に放射暗文の施されるものは少なくなる。b手法でつくられるものが多いが、口縁付近までへラケズリを行うc手法で調整されるもの(4・16)もあり、これらは口縁部内面と底部内面に螺旋暗文を有する。脚のつくもの(17)もあり、口径17.8cm、器高4.7cm。外面にはヘラミガキ、内面には放射暗文と螺旋暗文が施される。皿には口径15~17cm、器高2cm前後のもの(6・18・19)、口径20~22cm、器高2~3cmのもの(7・20・21)とがある。S B 3900とS B 3920の杯・皿を比較してみるとS B 3920の杯・皿には外面にミガミが施され内面に放射暗文と螺旋暗文を有するものが見られるが、S B 3900では放射暗文がなくなること、S B 3900の皿の中には、底部外面にヘラケズリを施さない口径15.1cm、器高2cmの小形の皿6が見られることなど、S B 3900により新しい要素が見られる。土師器鉢9は口径23cm、器高約18cm、精良な胎土を持ち、色調は赤褐色を呈する。内面はヘラケズリ、外面はハケ



第2図 第59次出土遺物 SB3900: 1~13



第3図 第59回出土遺物SB3920; 14~33

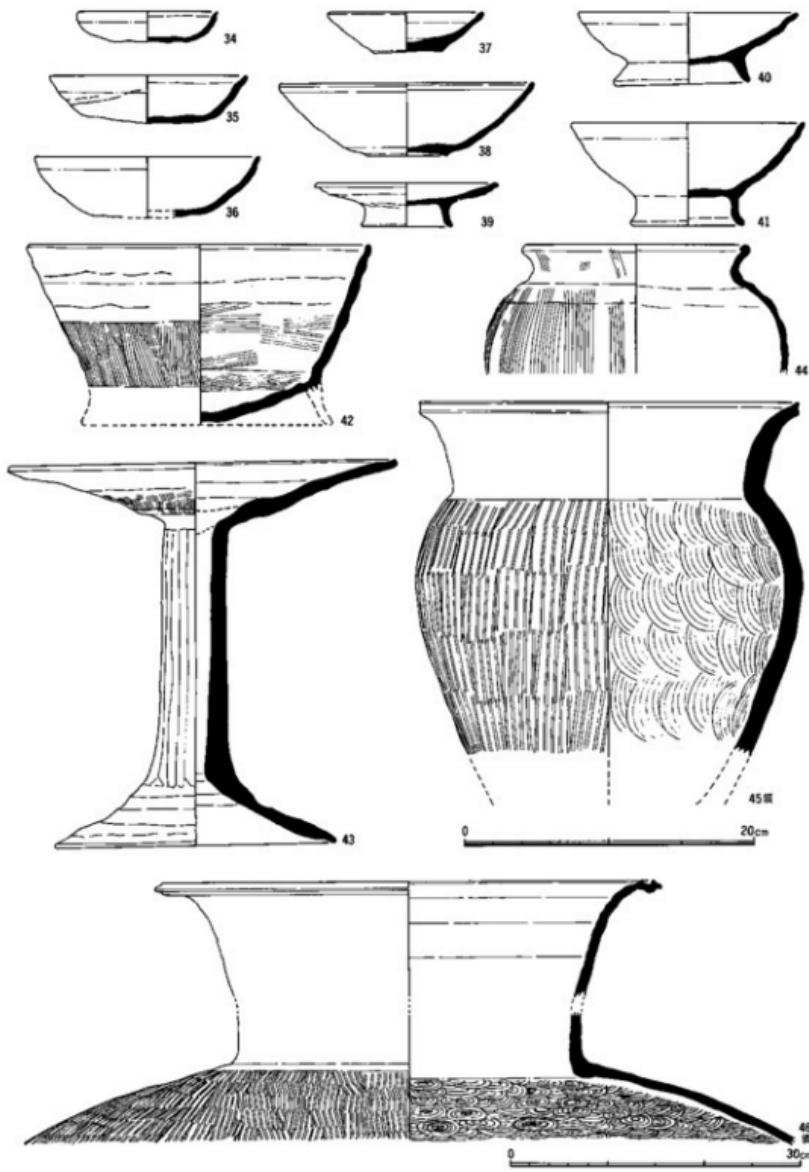
ノ調整で口縁部のみヨコナデを施す。内外面ともにいねいにヘラミガキが施されている。土師器杯蓋5は口径21cmで天井部をいねいにヘラミガキしている。土師器甕は奈良時代を通じて器形、調整はあまり変化しない。長甕10・23と球形で中型の甕22がある。

須恵器は土師器に比べると出土量は少ない。杯・杯蓋・鉢・壺・短頸壺・把手付広口壺・甕がある。鉢31はほぼ完形で口径19.4cm、器高20cmのいわゆる鉄鉢であり、体部下半ロクロケズリを施す。なお、S B3920のカマドの横からは土師器14・17・18・20・22、須恵器29・31がまとまって出土している。また、同住居から、図示してはいないが4個体の土師器皿の底部外面には刻線が焼成後つけられている。

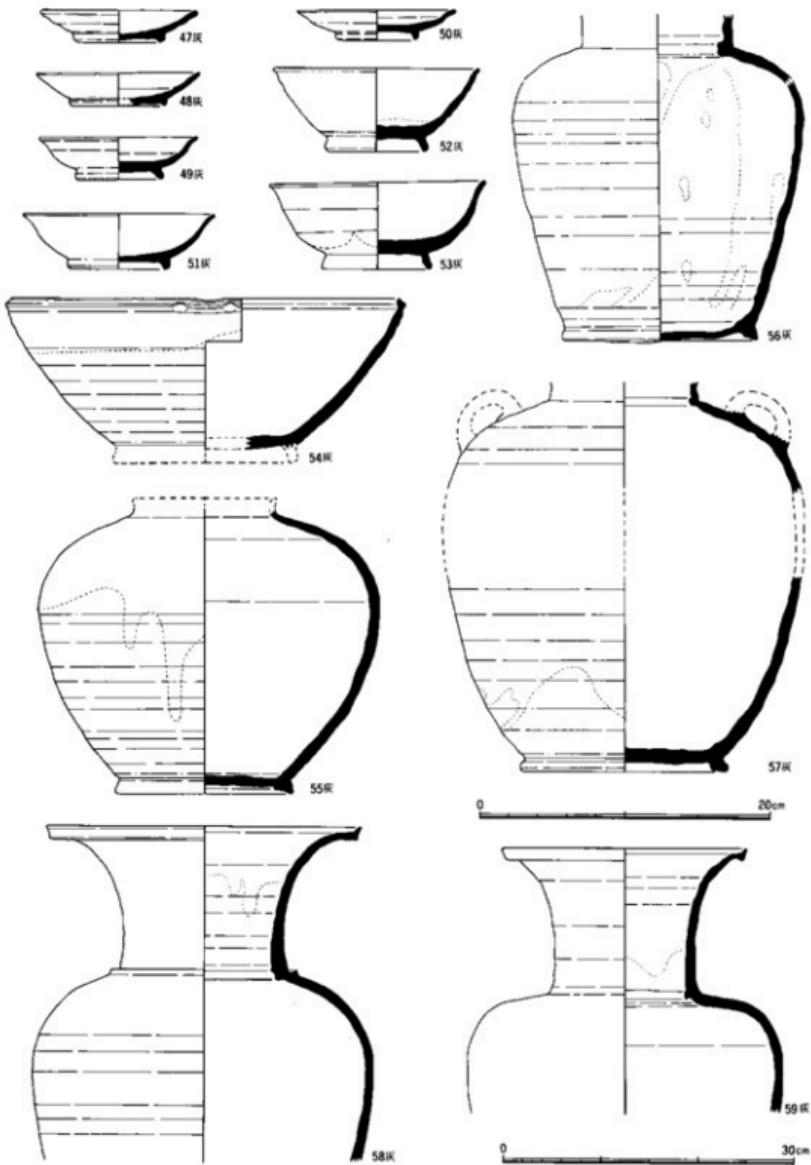
平安時代後期の遺物 主として東西溝S D3890から出土している。斎宮跡土師器編年の後I期の標識遺構であるS E2000に相当する。出土した遺物には土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、風字硯、青磁、フイゴの羽口などがある。S D3890の遺物は溝内のかなり広範囲にわたって接合し、灰釉の壺58のように30m離れていて接合したものや、須恵器甕46のように溝の西端から東端まで、更にはトレンチ調査の部分で南に40mの位置まで散在している様子が見られた。トレンチ調査で検出したS K190は遺構の所で述べたようにS D3890の一連のものと考えているが、S K190とした東端の付近からは綠釉の大型壺・大型椀・瓶・碗・皿・風字硯等が集中して出土しているが、二次焼成を受けて変色しているものが多く見られる。また、土師器椀・甕にも綠釉が一部付着するものもあり綠釉陶器に二次焼成を受けているものが多いことを考えると、火災などによって一ヶ所に廃棄されたものではないかと思われる。

土師器には杯と皿の区別が明瞭ではなくなり、杯と脚のつく椀・皿がある。他に出土量は少ないが高杯・鉢・甕、ロクロ製の小皿・椀、黒色土器の椀・ミニチュアの壺がある。土師器杯には口径10~12cm、器高2~3cmのもの(34)と、口径13~14cm、器高3~4cmのもの(35)、口径15~16cm、器高4~6cmのもの(36)との3種にわかれれる。脚のつく椀には口径15cm、器高5cmのもの(40)と口径16cm、器高7cmの怪の割りには器高の深いもの(41)がある。長い脚のつく小皿39もあり、これらはいずれも口縁部のみヨコナデを施す。ロクロ製土師器の出土は少なく、口径10.8cmの小皿39と口径17.6cmの椀がある。鉢42は口径23.4cmの比較的大型のもので、脚がつく。火を受けて変色しており、残りが非常に悪い。高杯43は口径27cm、器高26cm。脚台部と杯部を連続して成形し、後で中空の部分に粘土をつめて杯部を完成すると思われるが、この部分は欠落している。ミニチュアの壺68は黒色土器で口径5.8cm、器高4.1cm。底部には脚かと思われるわずかな凸部が見られる。

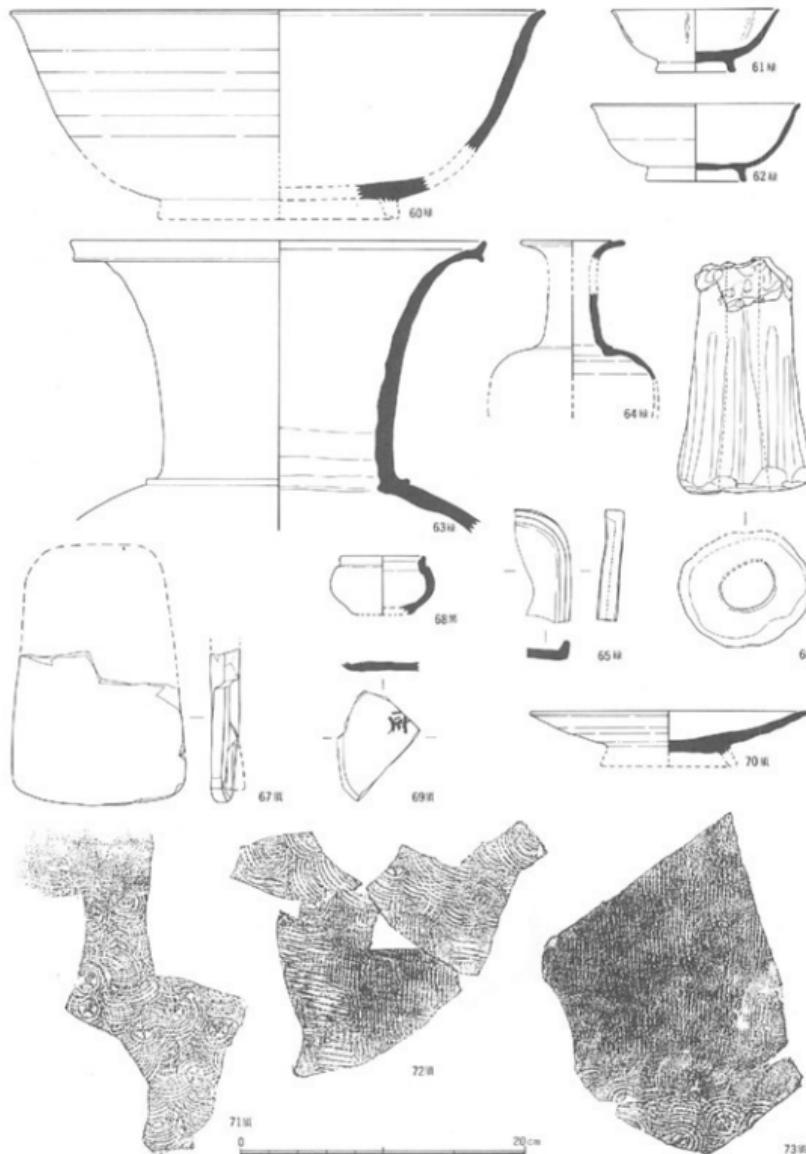
須恵器には甕がある。45は類例がS E2000でも出土していて、平底と考えられる甕である。46は口径51cm、胴部最大径は1mほどになるかと思われる甕である。内面のタタキには所謂、車輪文が見られる。全体の形は明らかにできなかったが、内面のタタキは3段階にわけて施さ



第4図 第59次出土遺物 SD3890; 34~46 (46のみ1:6)



第59次出土遺物 SD3890; 47~59 (58・59のみ1:6)



第6図 第59次出土遺物 SD3890: 60~73

れることが推定される。下段の底部(73)は車輪文で、中段の底部上半から胴部最大径付近まで(72)は平行タタキ、上段の胴部最大径より上(71)は再び車輪文である。所謂、車輪文を有する須恵器はこれまで斎宮でも數例出土しているが、このように全体の調整が判明するものは数が少ない。

灰釉陶器には小皿・椀・鉢・短頸壺・長頸瓶等があり、瓶類の出土量が多い。

綠釉陶器は調査区全体で170点ほど出土しているが、溝内から75点、溝付近の包含層から68点出土した。椀62は口径37cm、器高14cmほどの大型品で、胎土は灰白色のやや軟質のものである。外面下半ロクロケズリの後全面に濃い緑釉が施される。壺63は口径29cm、胎土は灰白色のやや軟質である。口縁部はほぼ残っているが、体部の出土量は少ない。釉は濃緑色であるが、二次焼成を受け変色している。瓶64は口径6.7cm、胴部最大径は約12cmで、胎土は灰白色のやや軟質のもので、二次焼成のため釉は剥落している。風字硯65は胎土が須恵質で全面に濃い緑釉が施されるが、二次焼成を受け変色している。硯部は摩滅していくかなり使用されていたことが窺える。また、この部分には赤褐色の付着物の痕跡がわずかに残っている。このような綠釉陶器の風字硯は全国的に他に出土例がなく特殊なものである。

須恵器の風字硯と転用硯も1点ずつ出土している。67は細長い2個の短脚を付ける。70は口径19cmの皿で底部外面に糸切り痕が残る。いずれも硯部は摩滅している。他に包含層から猿面硯が1点出土している。墨書き土器69は須恵器杯の底部外面に書かれている。墨痕が不鮮明であるが「厨」と思われる。この土器は奈良時代まで遡るもので混入品である。フイゴの羽口は5点あるが、溝からはほぼ完形なもの(66)を含め計3点が出土している。先端にスラグが付着し、通風口径は2cmである。他に土鍤も30点出土している。

#### (VII) まとめ

今回の調査の結果、奈良時代の遺構としては中期のものが主であり、後期のものはほとんどなく、当地域では奈良時代後期から平安時代前期までは空閑地であることが判明した。中期の建物は竪穴住居が10棟と主流を占めるが、掘立柱建物も1棟だけ検出されている。竪穴住居と掘立柱建物が、どのような形で同時存在していたかは不明であるが、第56次調査では中期の竪穴住居9棟、後期の竪穴住居1棟と掘立柱建物が7棟検出され、竪穴住居から掘立柱建物への変遷がかなり判明しており、当地域においても同様な状況が推察される。

宮城中・東部では掘立柱建物の方位は東で北に振れるのに対し、宮城西部では奈良時代の溝S D170やこれに伴う鎌倉時代の古道に規制され、その方位が東で南に振れると言われていたが、第56次調査ではそれぞれ異なる方位を持つ掘立柱建物が混在していることが明らかとなり宮城西部の中でも地域によって異なることが判明した。

今回の調査地では平安時代としては中期から末期の掘立柱建物18棟が検出され、その方位は

東で南に  $8 \sim 10^\circ$  振れるものが多く、この方位は同時期の溝 S D3890・189 とはほぼ同じであり、掘立柱建物はこれらの東西溝の方位に規制されていたと考えられる。S D3890 と S D192 は当地域を区画する区画溝であると思われるが、その角度は  $100^\circ$  ほどある。SD 192 はこれまで言われている宮城中央部と西部を区切る位置にあり、その区画溝と考えられるが、S D192 と方位を同じくする掘立柱建物はほとんどなく、当地域ではあくまでも S D3890 の方位に規制され、特に溝の南 4 m に位置する東西棟の掘立柱建物には顕著に認められる。

このように宮城西部のなかでも南東端に位置する当調査区では、平安時代の地割りは検出された掘立柱建物、東西溝 S D3890 のように東で南に振れることが判明したが、今後に残された問題点も多く、一つは宮城中央部とどのような形でつながるのかということである。これまで宮城中央部西半では本格的な調査がほとんど行われておらず、範囲確認のトレンチ調査と面的調査が 1 回実施されているのみであり、トレンチ調査では区画溝の一部が、また面的調査は西端の第49次調査で奈良時代の東西溝 S D170 や同方位の平安時代末期の掘立柱建物 1 棟が検出され、宮城中央西半でもそれぞれの方位をもつものが混在しているという状況が推察されるが、その解明が遅れているというのが現状である。

もう一つには、今回検出した東西溝 S D3890 はその延長位置にあたる西 200 m の第 56 次・第 27 次調査では検出されておらず、どの範囲までを区画していたものかが不明であるということである。宮城西部の地割りの痕跡は現在の農道にも認められており、調査区の北 110 m にある SD 170 の位置には北側の字塚山と南側の字東裏・字広頭の小字界をなす現在の農道が東西に走っている。また、調査区の北に接する農道も S D3890・189 と同じ方位であり、当地域の地割りの痕跡を残しているものと思われる。この農道は西に 120 m のところで西南に折れ曲がることから、この地点までは当調査区からの地割りが続くことが推察される。調査区の東には宮城中・西部を画する位置に農道が南北に走っている。また、近鉄線の南にも地割りの痕跡かと考えられる小字界をなす道路があり、このような道路を当地域の地割りの痕跡とするなら東西 120 m、南北の距離については不明な点が多いが、方形区画を想定することができる。今回検出した S D3890・192 は遺物の出土状況などからこの方形区画の北と東を画する区画溝と考えられ、また縁釉陶器の大型壺・瓶・風字硯などの遺物が見られることから、当区画の性格には特殊な要素が伴うと考えられる。いずれにしても宮城西部の中でも東南の一部が少しは解明されたが、地割りの問題は複雑であり、宮城中央部とともにまだまだ解明されていない点が多い。

### III 第60次調査

#### 6 A G J - B · D · G (東加座地区)

今回の第60次調査は、通称中町裏といわれる第2種保存地区のほぼ中央南西寄りの字東加座で実施したもので、調査面積は約1,570m<sup>2</sup>、現況は畠地である。

史跡指定範囲の中・東部には、これまでの発掘調査により約120m間隔で碁盤目状に走る区画溝による方形地割りの存在が想定され、これが平安時代帝宮の造営に深いかかわりをもつものと考えられているが、今回の調査区はこの方形地割りの北から2条、東から2条目の区画の南西隅部分に相当する。また、現在の地籍上も、字東加座の南西隅に位置し、調査区西側の農道が字西加座との、南側の町道が字鍛冶山との字界となっている。

調査区周辺では、これまでに数回の発掘調査が実施されているが、昭和54年度の第29次調査の東西トレチ(6 A G J)が調査区の中央に入っている、西端で南北方向の区画溝の可能性が指摘されていた溝S D1462・1463、中央付近で平安時代前・後期の掘立柱建物5棟などが確認されている。一方、町道を隔てて南側の字鍛冶山で実施した第46次調査では、平安時代初頭の東西方向の区画溝S D2400とその南側でこれに方向を揃えた大型の柱掘形をもつ柵S A2800、掘立柱建物S B2780・2810などが検出されている。また、調査区西側の字西加座で実施した第34次、第53-15次調査など一連の調査では、平安時代前期を中心とする大型の柱掘形をもつ掘立柱建物群が検出されている。このような状況から、この一帯は平安時代帝宮の中でかなり重要な位置にあたるものと推測されている。

以上の各点をふまえ、今回の調査は第29次調査の結果を面向的に再確認するとともに、東西方向の区画溝S D2400に関連する遺構、また南北方向の区画溝などの確認とこれらに規制された一区画内の南西隅の状況を把握することを主な目的とした。なお、調査は梅雨明けの7月15日から開始し、7月30・31日の両日には、帝宮跡保存啓発事業の一環としての体験発掘を地元の明星小学校6年生を対象として実施した。

調査の結果、調査区の基本的な層序は第I層：耕作土、第II層：明茶褐色土、第III層：暗茶褐色土、第IV層：黄褐色土～明褐色土の地山で第V層地山までの深さは0.4～0.6m、全体に北から南にかけてごく緩く傾斜していた。検出した遺構は、平安時代初期～後期の掘立柱建物をはじめ、平安時代各時期の土塙、溝などが中心で奈良時代以前に遡るものはなく、また鎌倉時代以降も溝があるのみであった。この内、掘立柱建物は調査区の中央から北側に集中しており、調査区の南及び西側での遺構は疎となっている。一方、期待された区画溝に関しては、東西方向の区画溝S D2400に明確に対応する溝は検出されず、南北方向の区画溝についても調

査区西端近くで3本の南北溝を検出しているが、いずれとも断定し難いものであった。

### (I) 平安時代初期の遺構

掘立柱建物6、塙3、土塙5、溝7がある。

掘立柱建物には、調査区中央北寄りで検出したSB1468・3975・3976と北東端で検出したSB3984・3986・3988があり、塙にはSA3980・3983・3989がある。この内、SB1468は、第29次のトレンチ調査では梁行2間のSB1468と梁行2間のSB1469の2棟として把握されていたものであるが、今回、面的に調査区を広げたところ同一建物であることが判明した為にSB1468と呼称することにした。SB1468は5間×2間の東西棟、SB3984も東端が調査区外となるがおそらく5間×2間の東西棟で、両者は12mの間隔をおいて軸柱通りを揃えて東西に建てられており、その棟方向はE5°Nで区画溝の方向にはほぼ揃っている。また、SA3983はL字状に曲がる塙で、柱穴から出土遺物はないが、SB3984と方向が一致するためこの時期のものとした。

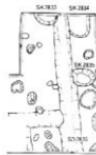
SB3976は、3間×2間の東西棟でE3°Nの棟方向を示す。このSB3976に重複してほぼ同規模のSB3975があり、埋土の切り合いからSB3976→SB3975の順で建て替えられたものと考えられる。また、SB3976の南側に平行して3間の塙SA3980がある。

調査区北東端で検出したSB3986・3988は、調査区外に延びるが、梁行2間の東西棟と考えられるもので、3mの間隔をおき、西側妻柱通りを揃えて、南北に平行に建てられている。棟方向は、方位にのっており、柱掘形も一辺80cm前後の方形でやや大きい。

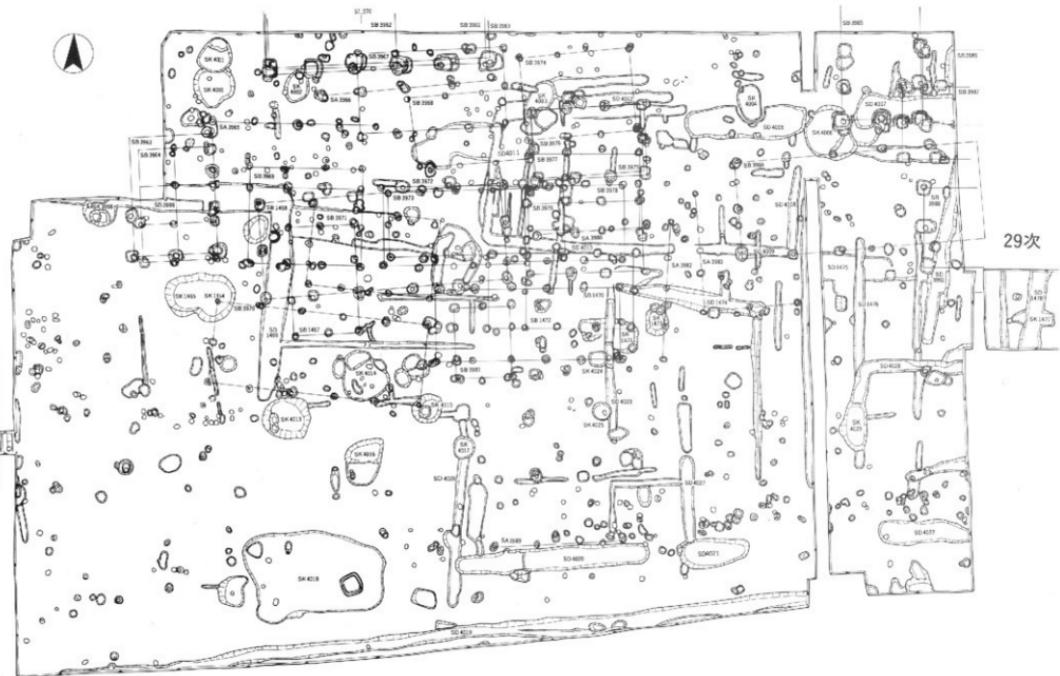
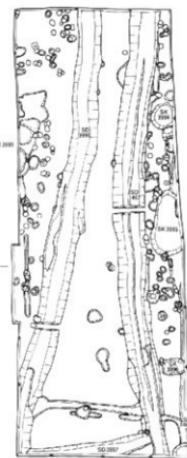
また、SA3989は、3間でE3°Nの方向を示すもので、柱掘形に土器を含まないが後述の溝SD4020に沿っているため、一応この時期と考えた。

土塙には、調査区西部で検出したSK3994・3995、中央近くで検出したSK4024、北東部で検出したSK4004、東部で検出したSK4029がある。SK3995は、東側を平安時代前期の溝SD1463に切られるが、3.3m×1.5m、深さ0.4mの楕円形の土塙で、土師器杯・皿・台付皿、須恵器杯蓋などが出土している。SK4004は、1.8m×1.1m、深さ0.2mの楕円形の土塙で、同時期の溝SD4005を切り、土師器杯・皿・甕、須恵器杯蓋・壺・甕などが出土している。その他は、小規模な土塙である。

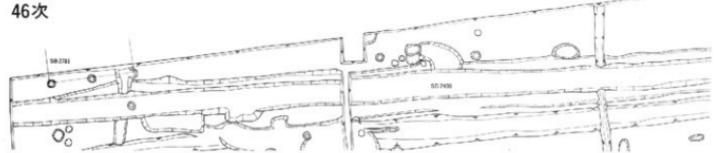
溝には、SD1466・4005・4007・4020・4021・4022・4028がある。SD1466は、調査区中央西寄りで検出した幅1.4m前後の浅い溝で、L字状に折れ曲がる。SD4005・4007は、調査区北東隅で検出した東西方向の溝である。SD4020~4022は、調査区南部で検出した溝で、いずれも浅いものであるが、幅1m前後で黒褐色土を埋土とし、東西方向に並ぶ。その方向は東でやや北に振れ、第46次調査で検出の区画溝SD2400と平行であるところから調査途中ではSD2400に対応する溝と考えたが、調査区西半には及ばなかった。土師器杯・皿・鉢・甕、須恵器甕などが出土している。なお、SD2400とは、溝心々で13.5m隔てる。SD4028はSD4022の北側



60次



46次



第7図 第60次遺構実測図 (1:200)



で検出した幅0.6m前後の溝でL字状に折れ曲がる。S K4029を切っている。

### (II) 平安時代前I期の遺構

掘立柱建物6、土塙5、溝4がある。

掘立柱建物には、S B3961・3963・3964・3967・3979・3987がある。建物方向は、調査区北東隅で検出した初期の建物S B3986・3988に続くと思われるS B3987が方位にのるほかは、東で北に2~3°振っている。中でも、調査区北辺で検出したS B3961は南側柱通りのみの検出であるが桁行5間でその柱掘形も方形で一辺0.9m前後とやや大きい。このS B3961の南西にこれにはほぼ直交する南北棟S B3963・3964がある。いずれも3間×2間であるが、S B3964の方がやや小さく、東柱を持つ。埋土の切り合いにより、S B3963→S B3964の順が考えられる。S B3967は4間×2間の東西棟、S B3979は3間×2間の東西棟である。

土塙には、S K1465・1473・3990・3996・4002がある。S K3996は1.2m×0.8m、深さ0.4mの小規模ながらもやや深い土塙で、東端を同時期のS D1463に切られている。完形の土器師器杯2・ほぼ完形の甕1が出土したが他にはほとんど破片がなく、単なる土器廃棄塙とは考え難い。S K1465は、第29次のトレンチ調査の際検出されたものであるが、前II期の土塙S K1464に切られている。

溝にはS D1463・1475・1476・4027がある。S D1463は第29次のトレンチ調査でも検出されているが、中央の畠と西側の畠の境界下を通る南北溝である。境界上に茶の低木が植えられているため、その隙間で幅を確認したところ幅1m、深さ0.1mで北に対し4°前後西に振る方向のものである。あるいは、南北方向の区画溝の可能性もある。

### (III) 平安時代前II期の遺構

掘立柱建物8、塙1、土塙6、溝3がある。

掘立柱建物にはS B1467・3960・3962・3972~3974・3981・3985があり、塙にはS A3966がある。この内、S B3962・3972・3973は前II期の中でも新相を呈する斎宮跡土器師器編年S K2650の時に該当する。S B3960は前I期のS B3961に重複するほぼ同じ規模の建物で、おそらく同一建物が建て替えられたものと考えられる。さらにそのあと前II期の後半になって柱掘形の小さい、桁行3間の小規模なS B3962が建てられ、この場所でS B3961→S B3960→S B3962の順が考えられる。S B1467は第29次のトレンチ調査で一部が検出されている3間×2間の南北棟で、棟方向はN3°Wで、S B3960などと直交する。S B3974は調査区北部で検出した3間×2間の東西棟でE5°Nの棟方向を示す。S B3985は調査区北東隅で検出した梁行2間の南北棟で前I期のS B3987と同じく棟方向はほぼ方位にのり、埋土の切り合いからS K4006より新しいものと考えられる。S B3981は調査区中央で検出した3間×2間の南北棟であるが、桁行柱間は中央が1.5m、両側が1.0mとやや変則的である。S B3972・3973は調査区中央で重複して

検出した東西棟で、前者が4間×2間、後者が5間×2間、妻柱が不明瞭である。棟方向は西で1~2°南に振る。また、S A3966は東西方向の4間の堀でE5°Nの方向を示す。S A3982は、南北方向の4間の堀でN3°Eの方向を示すが、出土遺物からは前期と推測されるがそれ以上詳細な時期は決定できなかった。

土塙にはS K1464・4000・4001・4003・4006・4016がある。S K1464は第29次のトレンチ調査で検出した径2.5m、深さ0.3mの円形土塙で、重複するS K1465より新しい。土師器、須恵器が整理箱1箱分出土している。SK4000は径2m、深さ0.15mの円形に近い土塙で、土師器、灰釉陶器、須恵器、土鍤、製塙土器などが整理箱1箱分出土している。S K4006は調査区北東隅で検出した径2.5m、深さ0.3mの横円形の土塙で、埋土はS B3985に切られる。土師器、須恵器、黒色土器などが整理箱3箱分出土している。

溝にはS D1462・3991・3992がある。S D1462・3991は調査区西部で検出した鎌倉前半の溝で下層にこの時期の土器をわずかに含む埋土が若干残存していた。明確に続く溝であるかどうかは断定できない。S D3992は調査区東端で検出されたもので北東方向に調査区外に延びる。

#### (IV) 平安時代中期の遺構

中町地区の他の調査区と同じくこの時期の遺構は少なく、わずかに掘立柱建物1、土塙1があるのみである。

掘立柱建物S B3968は調査区北側で検出した3間×2間の東西棟である。柱掘形も小さく建物平面は歪んでいる。

土塙S K3998は調査区西部で検出した径1.5m、深さ0.2mの円形の土塙で北端を鎌倉時代の溝S D3999に切られる。折戸53号窯式の灰釉陶器椀、土師器杯が出土している。

#### (V) 平安時代後期の遺構

掘立柱建物7、堀1、土塙5、溝3がある。S K4013・4014は後Ⅰ期、その他の遺構は概ね後Ⅱ期のものである。

掘立柱建物にはS B1470・1472・3969・3970・3971・3977・3978があり、堀にはS A3965がある。これらは棟方向から、東で6°南に振るS B3970・3971とそれ以外の方位にはばのるものとに分けられる。ほぼ方位にのるものは調査区中央北寄りで、S B1470・1472・3977・3978が重なって存在する。これらを重複しないよう分離すると、一方は5間×2間のS B1470とその北側の3間×2間のS B3978、他方は身舎3間×2間で西側に廂をもつS B1472とその北側の3間×2間のS B3977に分けられる。これらは、規模の大きな建物の北側に1.1~1.5m隔てて小規模な建物が平行に、そして東側妻柱通りを若干東に出して配置されているものと考えられ、同様のセット関係にある建物が場所をずらして建て替えられたものであろうか。これらの西側にやはり方位にほぼのるS B3969がある。この建物は身舎3間×2間で北側に梁行1mの廂をもつ東西

棟で、北側に約2mを隔ててS A3965が平行する。一方調査区中央西寄りで検出したSB3970は5間×2間で、その北側に1.2m隔てて平行し、さらに東側の妻柱通りを揃えて3間×2間のSB3971が配される。やはり南側に大型の、北側に小型の建物を東妻柱通りを意識して平行に配置するセット関係としてとらえられるのではなかろうか。なお、この2棟は柱掘形から出土した土師器には平安時代末期に近い形態のものも含まれ、後期でも新しい時期のものと考えられる。

土塙にはSK4013・4014とSK4015・4017・4025がある。この内、前者は後Ⅰ期、後者は後Ⅱ期のものである。SK4013・4014は調査区中央西寄りで検出した径2.5m前後の円形に近い形狀の土塙である。SK4013からは土師器、灰釉陶器、須恵器が整理箱1箱分、SK4014からも、同様の遺物が出土している。SK4017は調査区中央南寄りで検出した径1.2m、深さ0.1mの円形の土塙で土師器杯・皿・椀・甕およびロクロ製の土師器皿が出土している。そのほかの土塙は規模も小さく出土遺物の量もさして多くはない。

溝にはSD1474・3997・4008～4012がある。SD3997は西側の調査区南端で検出した東西溝で、幅1m前後で両端を別の溝に切られているが、少なくとも東へは延びないようである。出土遺物は少ないが後Ⅱ期のものが含まれ、中に1点だけ弥生時代後期の高杯脚部の破片が混入していた。SD4008～4012は調査区中央北寄りで検出した幅0.5m前後の浅い溝で断続しながらも長方形に巡る。何らかの区画施設とも考えられるが、この中にうまく納まる建物等は検出されなかった。なお、この溝は平安時代前期の土器が混入しているが、一応新しい土器の時代をとてこの時期のものと考えた。

#### (VI) 平安時代末期～鎌倉時代の造構

この時期になると掘立柱建物はなくなり、わずかに溝が残存するだけとなる。

SD1462・3991・3999・4026がある。SD1462・3991は調査区西部で検出した南北溝で、共に第29次のトレンチ調査で確認されていた。この2本の南北溝はかって約170m北方で実施した第47次トレンチ調査(6AFE-N)で検出したSD1900・1902に統くものと考えられていた。今回、面的に調査区を広げたところ、2本の溝ともにやや弧状に曲がりながら南北に延び、溝底は北から南に傾斜していることが判明した。また、いずれも下層に平安時代前期の土器を含む黒褐色の土層が若干確認され、その上に暗茶褐色の埋土の入ったこれらの溝が重複している様で、完没時期は出土した山茶椀から鎌倉時代前半を考えている。おそらく、この2本の溝は調査前からの想定の如くかなりの距離にわたり南北に延びるものと考えられるが、一直線ではなく、ややうねりながら掘られているのではないかと推測される。

SD3999は平安時代初期のSD1466、中期の土塙SK3998を切るように一部検出された溝で、埋土に山茶椀を含んでおり鎌倉時代前半の時期を考えている。

#### (VII) その他の遺構

調査区南端を東西に延びる S D4019は出土遺物がカマドの破片数点以外なく、埋土もあまり縮まっておらず、またその方向も現在の町道にはば描っている点などから、新しい時期のものと推測される。また、S K4018は6m×4mで浅い土塁であるが、出土遺物がほとんどなく、埋土もあまり縮まっていないので新しい時期のものと考えた。

#### (VIII) 遺 物

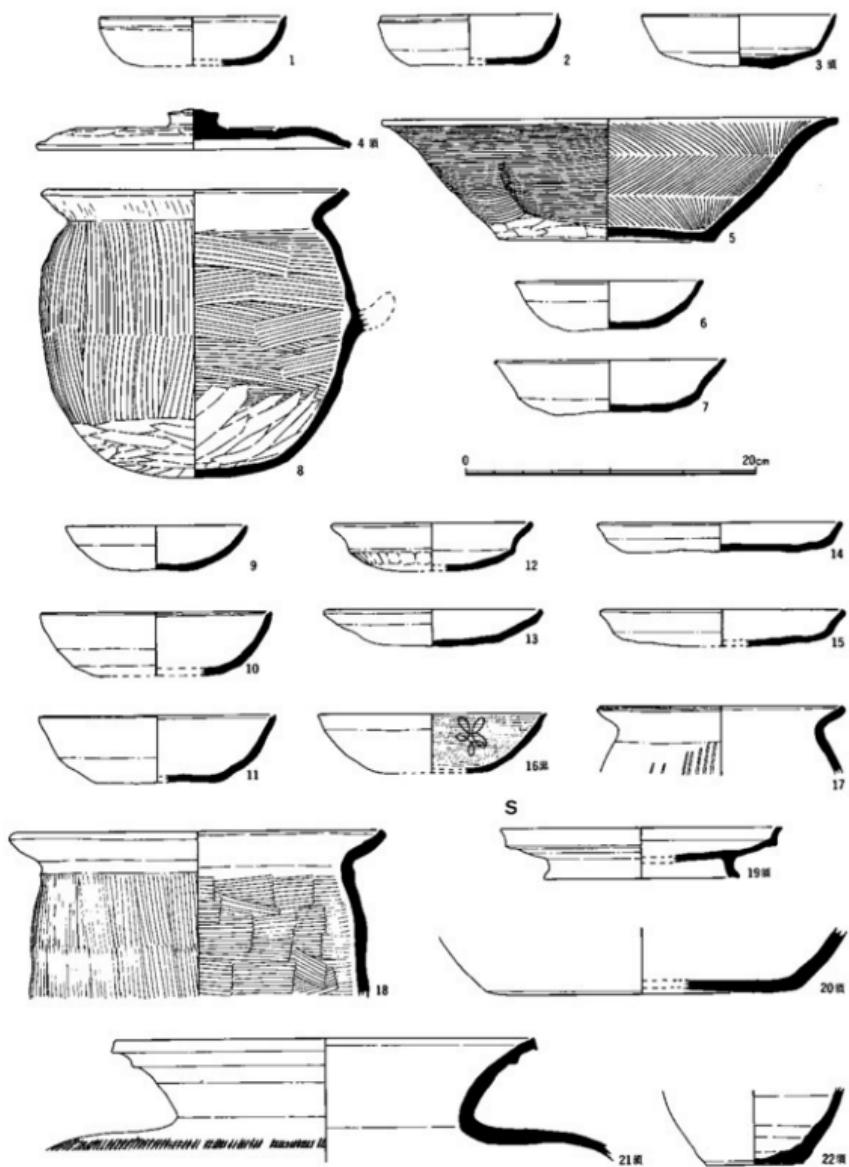
出土遺物は、調査面積に比しやや少なく、整理箱で約60箱分である。遺物には奈良時代末期～鎌倉時代のものもあるが、杯・皿など供器具が目立つ。また、大規模な土塁や井戸などもないため、大量の一括遺物はみられなかつたが、小規模な土塁からは各々整理箱1～3箱程度の遺物が出土している。

S D4020～4022からは土師器杯・皿・甕・鉢、須恵器杯・甕が出土している。小片が多く図示し得ないが、土師器杯にはe手法で調整され口端が内側にまき込まれるもののが目立つ。S D4020出土の土師器1・2はいわゆるいなか風の椀である。S D4022出土の土師器鉢5は、外面にヘラケズリのあと上部は横方向のミガキ、下半はおそらく6分割のミガキが施され、また内面には3段の放射状の暗文が施されている。

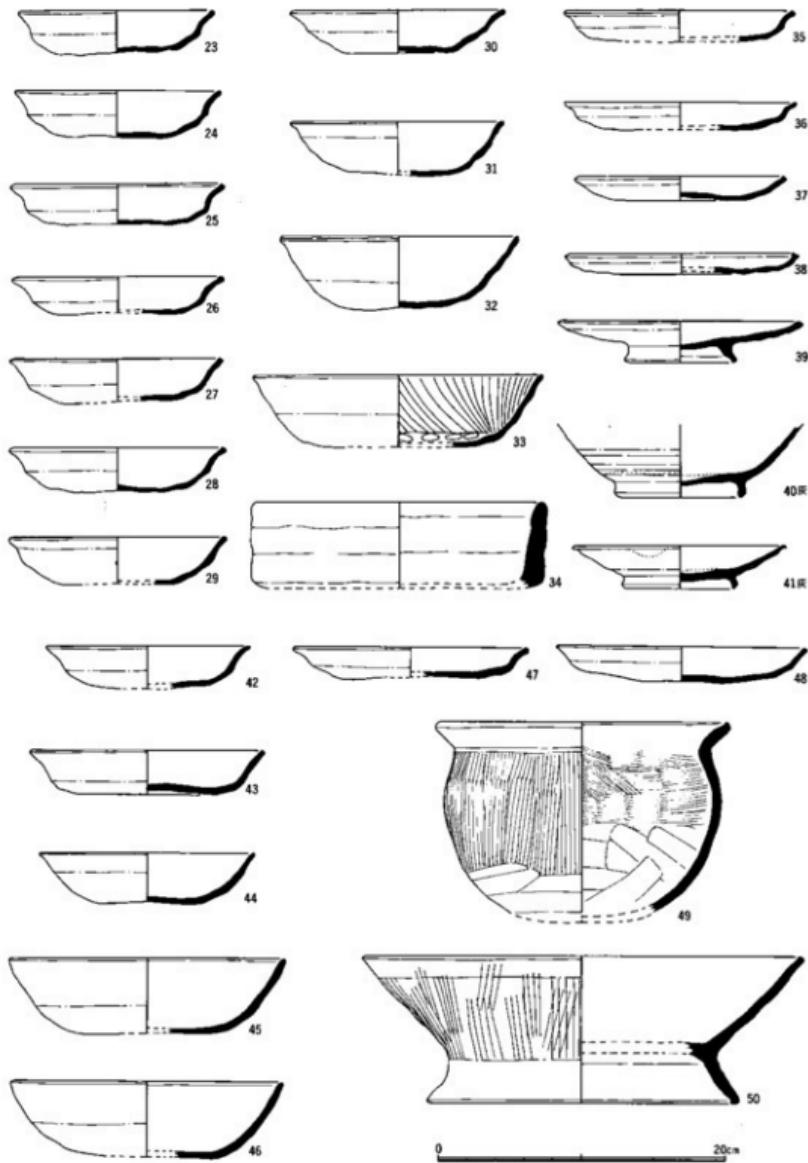
S K3996からは、土師器杯2点・甕1点がほぼ完形で出土した。土師器杯は杯A・B各1点ずつで、ともに厚手で赤褐色を呈するしっかりしたものである。6はヨコナデされた口縁の端部がやや角張り、内傾する面をもつ。7は底部がなでつけられ口縁部がヨコナデされるe手法で、口縁部は外開し、まっすぐのびる。土師器甕8は球形に近い体部に短く外反する口縁部がつくもので、端部は上方につまみ上げられる。外面は縦方向の粗いハケメ、下1/3はヘラケズリされ、内面は上半が横方向の粗いハケメ、下半がヘラケズリされる。欠損するが体部中央に一方のみ把手がつく。平安時代前Ⅰ期の所産と考えている。

S K4006からは土師器杯・皿・高杯・甕・瓶、黒色土器椀・須恵器杯・鉢・壺・甕などが整理箱にして3箱分出土している。土師器杯Aの12は口縁部がかなり外反するが、杯Bには口径16cm前後のものがあり、やや厚手で口縁部がやや内窓気味にのびて端部内側に沈線が巡る面を有するなどやや古相をおびる。土師器皿は口径16cm前後で口縁部は屈曲しており、端部はわずかに内側にまき込まれる。土師器甕18はいわゆる長胴甕で、口縁部は外反し、端部のみつまみ上げられる。黒色土器椀16は内面に細い圓線状のみがきが施され、その上に螺旋状の小さい暗文が描かれる。

S K4000からは土師器杯・皿・台付皿・甕・瓶、須恵器杯・灰釉陶器椀・皿・土錐・製塩土器が整理箱1箱分出土している。また、土器に混じり木炭片も出土した。土師器杯Aには、薄手で口縁部が強く外反するもの(23～29)と、杯Bに近似する形態で、口縁端部近くが外反す



第8図 第60次出土遺物 SD4020; 1~4、SD4022; 5、SK3996; 6~8  
SK4006; 9~22



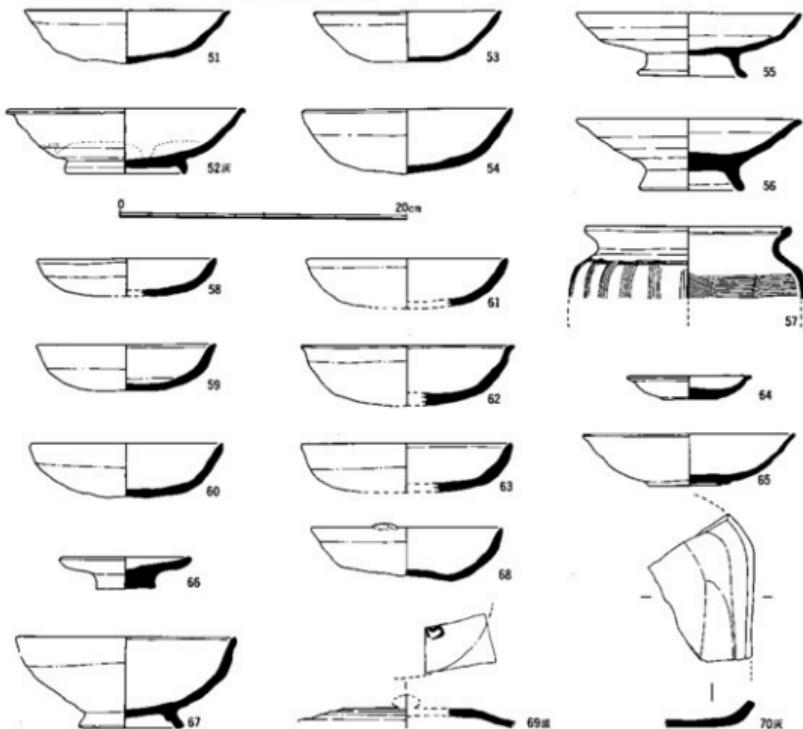
第9図 第60次出土遺物 SK4000; 23~41、SK1464; 42~50

るもの（30・31）があり、前者は径14cm前後、後者は15cm前後である。杯Bには口径20.2cmの大型品もあり（33）口縁部内面に放射状の暗文と内底部に螺旋状の暗文が旋される。土師器皿は口径15cm前後のものが多い。灰釉陶器は、三日月高台が付けられるもので、40は体部内外とも、41は内面のみにハケ塗りにより施釉される。

S K1464は第29次のトレンチ調査で大半調査された土塙であるが、当時のものも含め、土師器杯・皿・蓋・台付鉢・甕・須恵器杯・蓋・甕などが整理箱1箱出土している。土師器杯Aは薄手で口縁が強く外反するものが多く、杯Bには径18cm以上の大型品（45・46）も残る。

皿Aは口径16cmを越え、口縁はかなり外反する。土師器鉢50は口径30.2cmの大型でおそらく平坦な底部から外開して直線的にのびる口縁部をもつ杯部に高台がつく。

以上、S K1464・4000・4006の土器は前II期前半の斎宮跡土師器編年S K3127並行期のものと考えられ、S K1464はやや新相をおびる。



第10図 第60次出土遺物 SK3998; 51・52、SK4013; 53~57、SK4014; 58~65  
SK4017; 66~68、包含層；69~70

S K3998からは土師器杯、灰釉陶器碗各1点が出土した。土師器杯51はやや薄手で口縁部のみヨコナデされ端部が外に引き出されるものである。灰釉陶器碗52はやや丸味をおびた浅い碗の口縁端部が外に引き出されるもので口縁部内外面にハケ塗りによる施釉がみられるが、底部に糸切り痕が残り、ややつぶれた三日月高台が体部との境につけられるなど折戸53号窯式の範疇でとらえられ、これらS K3998の土器は平安時代中期のものと考えられる。

S K4013からは土師器杯・皿・甕・ロクロ製の杯、灰釉陶器碗・皿などが整理箱1箱分出土した。53・54は非ロクロ製の土師器杯で、口径14cm前後でやや丸味をおびる底部から直線的にのびる口縁部の端部近くがヨコナデされ、いずれも乳白褐色を呈する。55は非ロクロ製の台付杯で浅い杯部の中央に直立して端部のみ外開する高台がつく。杯と同じ胎土で、全体に薄いつくりである。一方、56はロクロ製の台付碗で外開して直線的にのびる口縁部に外開する低い高台がつく。胎土に細粒が目立ち、淡褐色を呈する。土師器甕57は径14cmの小さなもので、くの字形に強く外反する口縁の端部は内側に折り曲げられる。体部外面には粗い縱方向のハケメが間隔をおいて施され、内面は細い横方向のハケメが施される。これら、S K4013の土器は平安時代後I期、斎宮跡土師器編年S E2000の範疇に納まるものであろう。

S K4014出土土器には、土師器杯・皿・甕・ロクロ製の杯・皿・須恵器甕、灰釉陶器碗・壺がある。非ロクロ製の土師器杯58~63は、径12.4~15cmで器壁はやや厚く丸味をおびた形態で口縁部のみヨコナデされる。65は口径14.5cmのロクロ製の土師器杯でやや薄手に仕上げられている。64はロクロ製の土師器小皿で底部内面中央がやや盛上がる。これらロクロ製品の内、この土壙では底部が擬高台風に糸切りされたものはみられない。以上よりS K4014の土器は斎宮跡土師器編年S E2000より降るもの、S K1730などよりはやや古相を呈する段階のものと考えられる。

S K4017からは土師器杯・台付碗・ロクロ製の台付皿・台付碗などが出土している。68は歪みの大きい杯で口縁部に現存している部分で2ヶ所輪花状のオサエが残る。67は深い碗に高台のつけられた台付碗、66は擬高台風に底部が糸切りされたロクロ製の小皿である。斎宮跡土師器編年S K1730並行期に位置付けられる。

以上のはかに、当調査区からは包含層などを含め小片も入れれば81点とかなりの綠釉陶器が出土しており、灰釉陶器風字硯(70)、転用硯などが出土している。

#### (IX) まとめ

今回の調査で検出した掘立柱建物はすべて平安時代のもので、その他の遺構も明確に奈良時代に遡るものは検出されなかった。よって、少なくとも今回の調査区内で、掘立柱建物が建て始められるのは平安時代初期からであり、その後、中期の1棟という断絶時期を含むものの、後期に至るまで何棟かの建物群が存在したようである。これらの建物は区画溝の検出されてい

る他の調査区と同様に区画溝の想定される場所から10m内外隔てて建てられており、その間は空閑地となっている。とりわけ、周辺の調査地で柵列や大型の掘立柱建物が配置されている平安時代初期には、当調査区内では、5間×2間の大型掘立柱建物を含む6棟の建物が確認されている。これらは重複・棟方向の相異などからすべて同時存在したものとは考えられず、棟方向を揃え、東西に併列するS B1468・3984とS A3983、棟方向を揃え南北に併列するS B3986・3988、建て替えられたと考えられるS B3975・3976とS A3980に分けられる。この内、おそらく最初に出現するものは、区画溝の方向に棟方向を揃えて併列するS B1468の一群と考えられ、これら的一群は、あるいは第51・61次調査で検出されている平安時代初期の5間×2間の建物が一定間隔をおいて6棟併存する状況にある建物群と同様の配置の建物群の一画であるかも知れない。その後、調査区北東隅では、棟方向を方位に揃えるS B3986の一群が出現し、この建物方向が、前期のS B3987・3985へと受け継がれ、おそらく調査区外に存在する建物群と関連をもって続くものであろう。一方、調査区中央では、S B3976・3975が建て替えられて存在し、前期に至り、調査区北端で区画溝の方向性を踏襲する大型の建物S B3961・3960が出現し、これらを主要な建物とする建物群が形成される。

これに対し後期の建物はS B1470とS B3978、S B1472とS B3977、S B3970とS B3971というように規模の大きな建物の北側に平行し、さらに東側妻柱通りを若干ずらせるか揃えて小規模な建物を配置する建物配置がみられ、少なくとも上記の3回にわたって場所をずらせて建てられている。このような建物配置は、時期は異なるが第51次調査のS B3128・3135など他の調査区でも若干みられ、正殿・脇殿を配する主要な殿舎の配置や、同規模の建物が併列する建物配置などとは異なる建物配置と考えられる。

一方これらの建物を区画する区画溝については、結果的には明確には検出し得なかった。東西方向の区画溝S D2400を道路南側の側溝とした場合、道路北側の側溝の検出が期待された訳だが、今回の調査では、明確にそれと考えられるものは検出されず、あるいは調査区南側の町道下に存在するものであるかも知れない。その際、道路北側の側溝がS D2400と同様の幅とした場合道路幅は最大限7mとなる。ただ、調査区南部で検出した短い溝S D4020～4022は断続的ながら東西にならび、その方向はS D2400に揃うため、何らかの関連があるかも知れず、両者の内側の間隔は約12m（溝心々は13.5m）である。

また、調査区西部でも明確に区画溝と断定すべきものは検出できなかつたが、平安時代前I期の溝S D1463、鎌倉時代の溝S D3931・1462とその下層に若干の痕跡をとどめる平安時代前II期の溝を検出した。前I期の溝S D1463はさして深くはないが、その方向は他の区画溝と同様N4°Wで、調査区西側の農道の西で実施した第47次の6AFK-Kのトレンチ調査で検出している平安時代前期の南北溝S D2836と平行する。両者の間隔は溝中央間で約12.5mであり、

この間を道路とすれば幅約11mの南北道となる。一方、これらが埋まった後は S D1462・3991 が存在し、これらはしっかりした溝でややうねりながらかなり北方まで延びており、直線的な他の区画溝とは異なるが、区画溝の意識がかなり遅くまで溝として残っていたものであろう。

以上、今回の調査では想定される区画の南西隅を対象とした訳だが、検出した建物群は調査区の北および東にさらに連続するものである。建物配置の状況、綠釉陶器の出土量と砾の出土などをみると、これらの建物群は平安時代麻宮寮官衙の一画に相当するものと考えられ、今後この区画の中央部分の調査が期待されるところである。

## IV 第 61 次 調査

### 6 A F F - H · I · D (西加座地区)

中町地区における本年度第2回目の調査として実施した第61次調査は、昭和58年度の第51次調査区の南側に位置する。本調査区は北を東西溝S D291、東を南北溝S D520に、西と南の区画溝は未確定であるが、推定一辺約120mの方形区画の中の中央部西側に相当する。

第51次調査では、柱間10尺、柱掘形一辺1.2mを測る大型掘立柱建物SB3220をはじめ、奈良時代末期～平安時代末期に至る各時期の掘立柱建物63棟、土塙、井戸など多数の遺構が検出され、掘立柱建物の方向が区画溝の方向に概ね揃うものが多く、計画的な建物配置が窺われるところから主要な官衙の一角と見られている場所である。今回の調査では、さらにこれを南側へ調査区を広げ、一区画内における建物の配置状況や遺物の出土状況をより明確にすることを主要な調査目的の一つとした。

調査の結果、遺構の検出される地山面は、北で高く、徐々に南に向かって低く傾斜しており、北では厚さ30cmの耕土を除くとすぐ地山面となっていた。一方南端部は、瓦用の粘土採掘のため、白色粘質土の地山が削平され遺構面まで50cmと深かったが幸い遺構への影響は軽微であった。検出した主な遺構には、奈良時代末期～平安時代初期の掘立柱建物10、溝1、平安時代前期の掘立柱建物13、井戸1、平安時代中期の掘立柱建物4、平安時代後期の掘立柱建物5、鎌倉時代の溝数条のほか、奈良時代後期から平安時代後期に至る各時期の土塙32などがある。

#### (I) 奈良時代後期の遺構

この時期の遺構は土塙のみであり、9ヶ所で検出した。

北から順にSK4037・4065・4066・4054・4072・4073・4080～4082がある。小さなものでは径1.0m×1.3mのSK4082から、大きなものでは径3.6m×3.0mのSK4073まであり、ほとんどが不整形土塙である。東部のSK4054を除き、2ないし3つの土塙が近接あるいは重複する状況が認められた。土塙からは土師器杯・皿・甕などが比較的多く出土しているが全体的な出土量は少ない。共伴する須恵器は鳴海32号窯式に相当する。

#### (II) 奈良時代末期～平安時代初期の遺構

掘立柱建物10、土塙6、溝1がある。

掘立柱建物の多くは調査区の四隅で検出され、北西隅にはSB4032、北東隅にはSB4039・4041、南西隅にはSB4077～4079、南東隅にはSB4093・4095がある。いずれも柱掘形は一辺70～90cmと比較的大型の方形掘形を呈し、柱間2.4m前後で柱通りの方向も概ねE4°Nにまとまる。建物の規模はSB4032のみが5間×2間の東西棟建物であることが判明しているが、他

の建物は調査区外へ延び、全体の規模は明らかでないが、おそらく S B 4032 と同規模の東西棟建物と思われる。

北東、南西、南東隅におけるこれらの掘立柱建物の重複状況は、それぞれの場所で建て替え関係にあるものとみられ、このうち柱掘形の切り合い関係から S B 4079 → S B 4077 と、S B 4095 → S B 4093 の順を確認している。特に四隅にある S B 4032・4041・4077・4093 の 4 棟の建物は互いに柱通りをほぼ揃えており、計画的な建物の配置状況が窺える。おそらく同時期に存在したものであろう。さらにこれらの建物は、第51次調査の S B 3120・3206 とも柱通りが揃う。ちなみに S B 3120 と S B 4032 とは心々で 28.7m、S B 4032 と S B 4077 とは心々で 31.0m の間隔を置く。

以上の大型掘立柱建物以外では、2 間 × 2 間の純柱建物 S B 4045 と唯一南北棟建物である S B 4070 がある。いずれも柱掘形が一回り小さく柱間も狭い。

土塙は掘立柱建物の近くや建物と建物との間の空閑地で検出された。調査区北西隅には S K 4030、西部には S K 4067、東部には S K 4046・4048・4055・4056 があり、前代同様径 3 m 前後の不整形土塙が多い。土塙からは主として土師器杯・皿・甕のほか、須恵器杯・蓋・甕などが少量出土している。中でも径 3.0m × 2.5m、深さ 0.4m の S K 4030 からは整理箱で 7 箱分の土器の出土量があり、比較的まとまった資料が得られた。

溝 S D 4035 は、調査区北部を東西に走る幅 0.6m、深さ 0.1m の小溝で、雨水を流す程度の簡易な排水溝と思われる。

### (III) 平安時代前期の遺構

この時期の遺構は大きく 3 期に分かれる。斎宮跡土師器編年の標式遺構である S K 1424 → S K 3127 → S K 2650 に相当する時期で灰釉陶器の編年では、黒笠 14 号窯式 → 黒笠 14 号窯式の新 → 黒笠 90 号窯式に対応する。

S K 1424 に相当する時期の遺構には、掘立柱建物 5、土塙 4 がある。

調査区四隅にあった前代の主要大型掘立柱建物のうち、南西隅の建物は姿を消し、北東隅の S B 3240 と南東隅の S B 4094 のみがこの時期まで受け継がれる。また北西隅の建物は規模が縮小され、S B 4033・4034 として残るが、柱通りの方向は、前者の 2 つの建物に比べ若干北で西に偏り、柱掘形も小さい。この調査区北西端で南側柱列のみ検出した S B 4031 は第51次調査との関係から 3 間 × 2 間の東西棟建物であることを確認した。

土塙は S B 4094 の北で検出した大土塙 S K 4060 のほか、調査区西端部に S K 4068、東端部にいずれも調査区外へ延びる S K 4049・4059 がある。S K 4060 は径 7.6m × 4.7m、深さ 0.3m の楕円形土塙で多量の土師器杯・皿のほか、灰釉陶器碗・皿、須恵器杯、綠釉陶器皿、黑色土器碗、製塩土器、ミニチュア瓶など整理箱で 16 箱分の土器の出土があった。出土遺物は土塙の西部で

51次

61次



第11図 第61次造構実測図 (1:200)



は少なく、中央部から東部にかけて多量の土器廃棄が認められ、完形品も多い。一応ここでは1つの土塙として取り上げたが、2つ以上重複している可能性もある。他の土塙からも、土師器杯・皿などが多量に出土している。

次に、SK3127に相当する時期の遺構には、掘立柱建物2、土塙4、井戸1がある。

本時期になり掘立柱建物は完全にこれまでの建物配置の意識が崩れ、調査区南部で新たな占地及び建物配置が形成される。即ち前代の土塙SK4060の埋土を掘り込んで建つ東西棟建物SB4090と、この建物の南側柱通りと柱通りを揃える3間×2間の南北棟建物SB4084の出現である。柱通りの方向は北で西へ2°偏る建物に統一されている。

土塙はこれらの建物の北及び西側で検出され、径1.7m×1.3mの楕円形土塙SK4057・4088・4098と一回り小さい径1mの円形土塙SK4087がある。おもな出土遺物には、土師器杯・皿・甕、灰釉陶器碗・段皿・耳皿、須恵器杯・蓋、黒色土器、製塩土器などがある。

井戸SE4050は径3.2m×2.8mの円形素掘り井戸で、埋土上層から多量の平安時代後期の土師器皿・台付皿などが出土し、井戸廃絶の下限の時期を一応推定されたが、井戸の使用時期及び上限については、遺構面から0.8m下の所から井戸壁面が大きく崩落しており、調査中の安全を考慮して鋼矢板を打ち込んで完掘せざるを得なかった。

その結果、深さ4.8mで湧水層に達し、井戸底の絶対高は4.7m、井戸の埋土は上から順に暗褐色土層（第I層）、黄褐色土混入暗褐色粘質土（第II層）、暗灰褐色粘質土（第III層）、明青灰色粘質土（第IV層）、暗灰色粘質土（第V層）であることを確認した。I層からIII層までは平安時代後期の土器が多量に廃棄されており、IV層は土器を含まない層である。V層からは、黒笠14号窯式の新段階から黒笠90号窯式にかけての灰釉陶器やこの時期に相当する土師器のはか、刀形、曲物、編み籠などの木製品が出土し、井戸の上限を本時期まで遡らせることができる。特に井戸底付近で出土の高杯脚部に描いた人面墨書き土器や刀形木製品は、斎宮跡では初例であり、祓えの祭祀に関わる遺物として注目される。

次にSK2650に相当する時期の遺構には、掘立柱建物5、塙1、土塙5がある。

掘立柱建物は前代のSB4090の同一場所、同一規模での建て替えと考えられるSB4089を主要建物として、この周囲に付属的な建物と考えられるものが何棟か認められる。即ち北には（4間）×2間の東西棟建物SB4051、西には4間×2間の東西棟建物SB4074、及び前代からこの時期まで存続していたと思われる3間×2間の南北棟建物SB4084がある。これらの建物の柱通りの方向は、すべて北に対し西へ2°偏る方向を示し、SB4089・4074・4084は互いに柱通りを揃えており、建物配置に計画性が認められる。調査区の東に延びるSB4090や、南北棟建物SB4084の建て替えと考えられ、N2°Eを示すSB4085、塙SA4096などは、前者の建物よりやや後出のものと考えられる。

土塙はS B4089の北側に集中しており、西から順にS K4097・4062・4061・4058・4052がある。S K4062・4061は出土遺物の関係から大土塙S K4060の北部の埋土を掘り込んでいるものと思われたが、土塙南部の肩を明確にすることはできなかった。S K4058は3.1m×2.3mの方形土塙であるが、深さは0.3mと浅く、土器の出土量も少ない。

#### (IV) 平安時代中期の遺構

愛知県猿投窯の灰釉陶器編年の中篠90号窯式の新しい段階のものと折戸53号窯式のものをこの時期の遺構とした。

前者の遺構には掘立柱建物3、土塙1がある。柱掘形の大きさや柱間規模は若干縮小するものの、建物配置については前代の配置をほぼ引き継いでいる。調査区東部へ延びるS B4092のほか、S B4075・4083は前代のS B4074・4085の建て替えと考えられ、柱通りの方向は3棟とも北に対し東へ2°偏るもので、これまでの建物と異なった方向を示す。北側で実施した第51次調査の概要でも指摘したように何らかの理由で中篠90号窯式のある時期に、建物の方向が大きく転換する時が一時期存在することが今回も認められた。

土塙S K4053は、径5.2m×4.0m、深さ0.4mを測る比較的大型の円形土塙で、多量の土師器杯・皿のほか、高杯・瓶・カマド、黒色土器碗・風字硯、灰釉陶器、緑釉陶器、須恵器、製塙土器が出土している。

後者の時期の遺構には、掘立柱建物1、土塙2がある。調査区南部で認められた掘立柱建物は姿を消し、調査区北東隅でS B4040の1棟のみを確認した。棟方向はE1°Sを示し、前者の建物の方向に近く、柱間寸法も似ている。土塙は、この建物のすぐ西側にS K4038、調査区中央部にS K4064がある。

#### (V) 平安時代後期の遺構

衛宮跡土師器編年の中篠2000～S K1730・1074に相当する時期の遺構をこの時期のものとした。掘立柱建物5、土塙2がある。

掘立柱建物は調査区の北東部に集中しており、第51次調査で一部確認の東西棟建物S B3238・3239のほか、3間×2間の南北棟建物S B4042～4044がある。これらは互いに重複関係にあり、短期間に順次建て替えられたものと思われる。柱掘形の径は0.3m前後の円形を呈し、柱痕跡を明瞭にとどめる建物が多い。柱通りの方向は北に対し3～7°西に偏っており、総体的に北に対し西へ偏るという点では、再び前期の建物の柱通りの方向に戻る。

平安時代前期まで上限が求められたS E4050からは、前述のように上面から約3m（I層～III層）までは、土師器皿・台付皿を主体とする土器類の多量廃棄が認められ、整理箱で31箱分の出土量があった。本時期に至り、短期間のうちに土器と共に井戸が埋められたものと考えられる。なおIII層最下部からは、右上顎臼歯（1本）、右下顎臼歯（3本）の計4本の馬歯が出

土しており、馬齢は4～5才と推定される。井戸廃絶の際、若い個体の馬を使った何らかの井戸終焉に伴う儀礼が行われたことが想定される。この井戸の南で切り合う土塙S K4047からも、井戸出土の土器より若干時期が下がると思われる一群の土師器が多量に出土している。

#### (VI) 鎌倉時代の遺構

本時期の遺構は溝のみで建物や土塙などは全く検出されなかった。調査区を南北に走るS D3175とこれから東へ延びる東西溝S D4099・4086は、幅1.6m、深さ0.3mで比較的法面の傾斜が緩やかな溝である。S D4099とS D4086とは心々で約22mの間隔を置く。溝からの出土土器は少なかったが、S D3175の東を並走する小溝S D4071やS D4036は鎌倉時代前半に、前の3条の溝は鎌倉時代後半に位置付けられる。

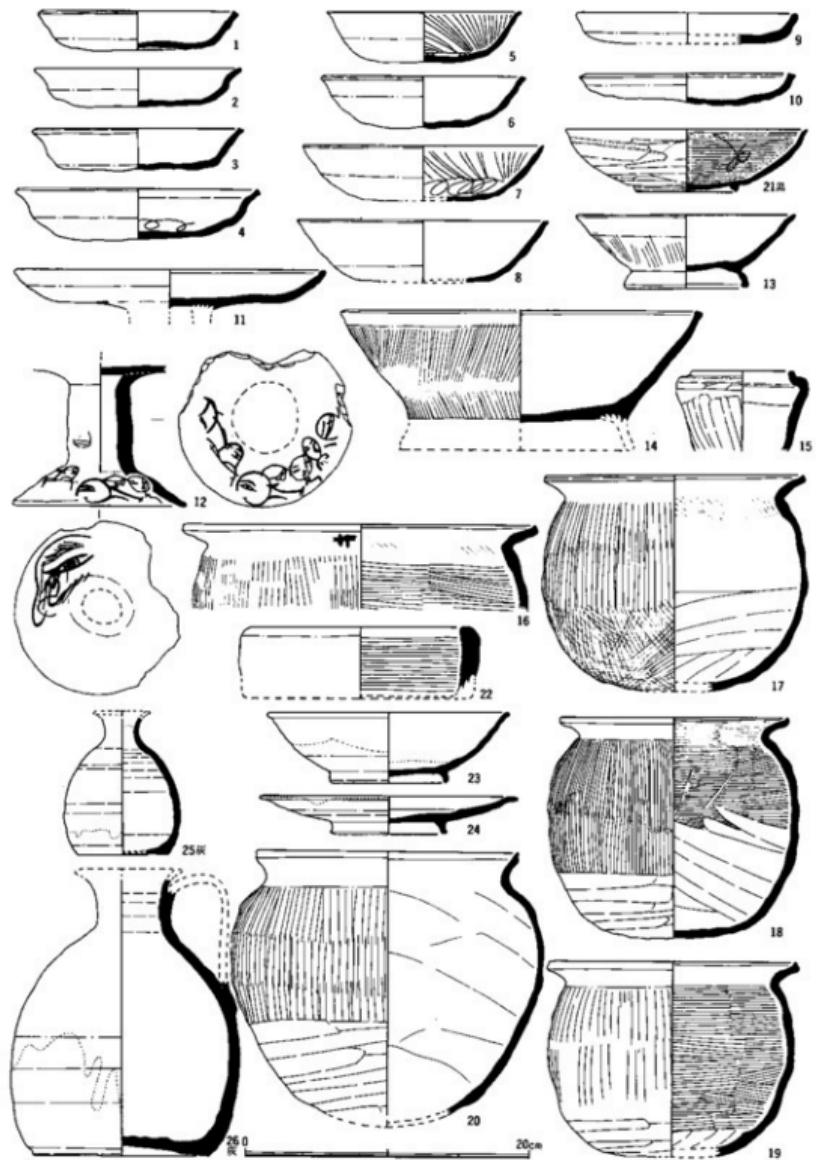
#### (VII) 遺 物

遺物の大半は奈良時代後期から平安時代後期に至る各期の土塙から出土したもので、土師器杯・皿類を主体とした多量の土器がある。中でも奈良時代末期～平安時代初期の土塙S K4030、平安時代前期前半の土塙S K4060、及び平安時代後期の土器が多量に出土したS E4050から良好な一括資料が得られた。ここでは特に井戸S E4050出土の遺物について触れておきたい。

S E4050出土の土器は上層、中層、下層の3時期に大別でき、前述の第I層～第II層が上層、第III層が中層、第V層が下層にそれぞれが対応する。上・中層からは整理箱で31箱、下層から11箱の出土があった。

下層出土の土器には、土師器杯・皿・台付杯・高杯・甕・鉢・壺・壺E、黒色土器椀（A類）、灰釉陶器椀・段皿・手付瓶・小瓶・壺・蓋・須恵器甕・鉢がある。

土師器杯には、口縁部が外反し、器高の浅いAタイプのもの（1～4）と椀に近いBタイプのもの（5～8）がある。Aタイプの杯が12個体、Bタイプの杯が6個体あり、いずれも色調は淡褐色を呈するものが多い。Bタイプの杯には口縁内側に放射状暗文、底部に螺旋暗文を施すもの（5・7）が2個体認められた。口縁部のヨコナデの範囲は、A・B両タイプとも器高の1/2～2/3ほどおよぶ。皿は5個体出土しており、杯Aと同様の口縁を有するAタイプの皿9と、ヨコナデが弱いため底部の境が不明瞭で、口縁端部上面に平坦面を作るBタイプの皿10がある。甕は35個体分の出土があり、最も出土量が多い。口径16～18cm、器高15cm前後で、口径が胴部最大径と同じか、多少胴部径が大きく、底部が比較的平坦でどっしりとしたタイプのもの（17～19）のほか、これより一回り大きく底部が丸いもの（20）や、口径25cmの大型のものの（16）も少量ある。器面の調整は、口縁部をヨコナデし体部外面上半を楕円方向のハケメ、下半をヘラケズリし、体部内面上半を横方向のハケメ、下半をヘラケズリするものが多いが、体部外面下半も乱方向のハケメを施すものや、体部内面をすべてヘラケズリするものも見られる。ハケメは1cmに2～3本の粗いものや、7～9本の細かいものまである。口縁端部は上方につまみ上げられるように



第12図 第61次出土遺物 SE4050 下層；1～26

ヨコナデされるため、大半の甕は口縁端部外側に明瞭な端面が認められる。16の口縁部外側には「井」の墨書きがみられる。

黒色土器椀21は小さな三角形の高台が付き、内外面は丁寧にヘラミガキされ、さらに内面に暗文が施される。

灰釉陶器椀・皿は、体部下半から底部をヘラケズリし、内外面をハケ塗りするもので、大半は黒釜90号窯式に相当するが、段皿24は口縁部内面と底部みこみをハケ塗りし、角高台の付くもので、黒釜14号窯式に近いものも認められる。小瓶25は底部が糸切りのままで、体部最下端のみヘラケズリする。手付瓶26は体部下半から底部外周にかけてヘラケズリし、底部中央はなでられる。いずれも淡緑色の灰釉が体部外面にハケ塗りされる。

人面が描かれた土師器高杯12は脚高9.2cm、脚裾径12.4cmを測る。

杯部が欠損し、器面の保存状態により墨書きの消えている部分もあるが、脚裾部外面には少なくとも10面の粗雑な顔や、脚柱部にも唇と思われるものが認められる。また脚裾部内面には、顔の左半分しか残存していないが、大きく丁寧に描かれたやや垂気味の目、眉毛、髪の毛、髭が確認でき、高杯脚柱部の穴を鼻あるいは口と見ることもできよう。

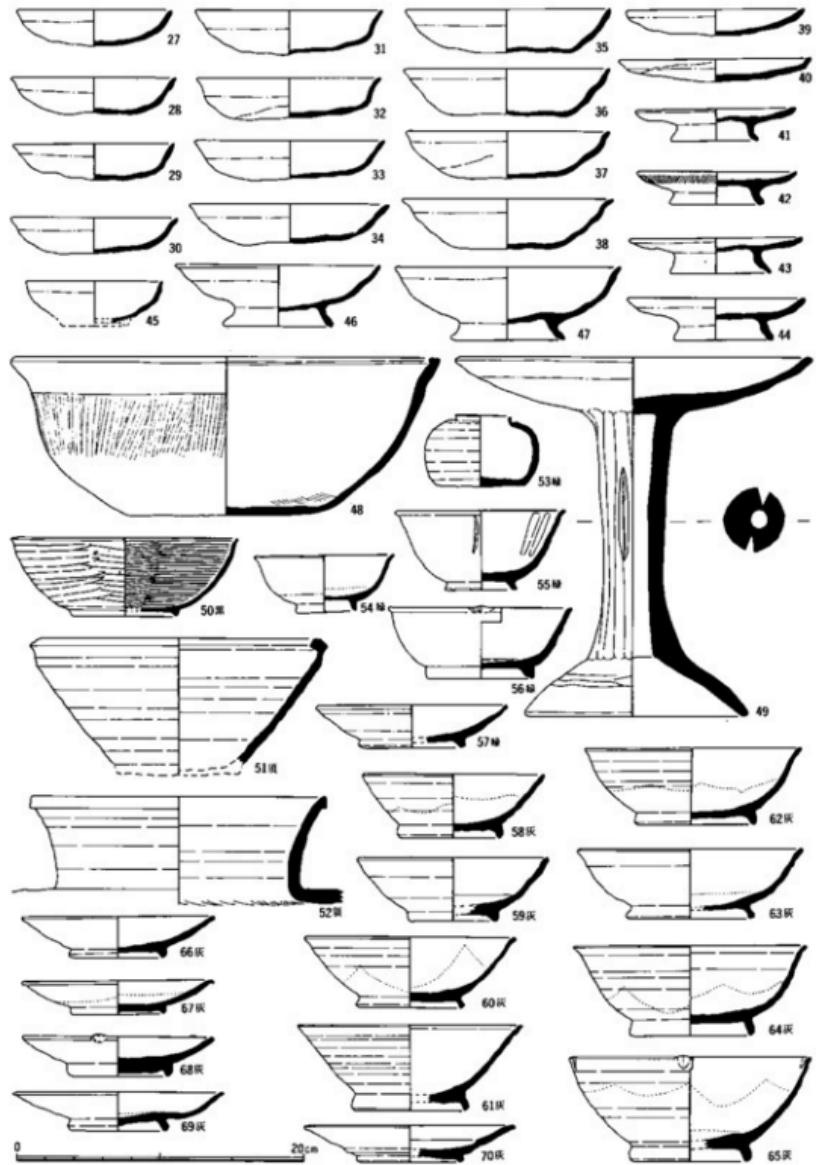
製塙土器22は、口縁部の破片であるため口径は不明瞭。内側に横方向のハケメが施される。

中層出土の土器には、土師器杯・皿・小皿・台付杯・台付皿・台付小皿・椀・台付椀・高杯・鉢・古付鉢・長胴甕・カマド、黒色土器椀、須恵器鉢・甕、灰釉陶器椀・皿・段皿・壺、綠釉陶器椀・皿・小壺などあり、器種別個体数ならびに占有率は右表1のとおりである。

土師器杯には、Aタイプのもの(31~34)とBタイプのもの(35~38)がある。Aタイプの杯は口径13~14cm、Bタイプは14.5~15cmで、口縁端部を0.8~1.5cmほどヨコナデする。胎土には細かい砂粒を含み、色調は全体的に淡褐色系ないしは茶味を帯びた白色を呈する。46・47はBタイプの杯に高台の付くものと考えられる。皿には、器高の浅いBタイプの皿(39・40)とAタイプの杯を縮小した小皿(27~30)がある。Bタイプの皿は口径12.4~13.4cmで、小皿は11~11.5cmを測る。台付小皿41~44は、口径

器種	個体数	%
土師器		
杯A	30	9.1
杯B	29	8.8
皿	9	2.8
小皿	135	41.1
台付杯	5	1.5
台付皿	1	0.3
台付小皿	21	6.4
椀	4	1.2
台付椀	8	2.5
鉢	1	0.3
古付鉢	2	0.6
高杯	4	1.2
長胴甕	4	1.2
甕	18	5.5
カマド	2	0.6
黒色土器		
椀	6	1.8
須恵器		
鉢	2	0.6
甕	1	0.3
壺	1	0.3
灰釉陶器		
椀	30	9.1
皿	6	1.8
段皿	1	0.3
壺	2	0.6
綠釉陶器		
椀	5	1.5
皿	1	0.3
小壺	1	0.3
計	329	100

表1. 井戸中層出土の土器



第13図 第61次出土遺物 SE4050 中層 ; 27~70

11~12.4cmの浅い皿部に比較的高い高台が付く。いずれも非ロクロ製であり、ロクロ製のものは認められない。高杯49は口径、器高とも25cmを測る。脚柱部の面取りは15面で、中央部に長さ約6cmにわたり、一対のヘラ先により鋭くえぐり取られた箇所がある。鉢48は平坦な底部に内湾気味に立ちあがる体部、外反する口縁部から成るもので、口縁部の外反は以前のものに比べて弱く、平安時代初期から見られるこのタイプの鉢の最末型式と考えられる。器面も磨耗が著しいが、内外面ともハケメで調整し、体部下半と底部をヘラケズリするものと思われる。

黒色土器椀A類50は、小さな三角形の高台が付き、内外面とも丁寧にヘラミガキされる。

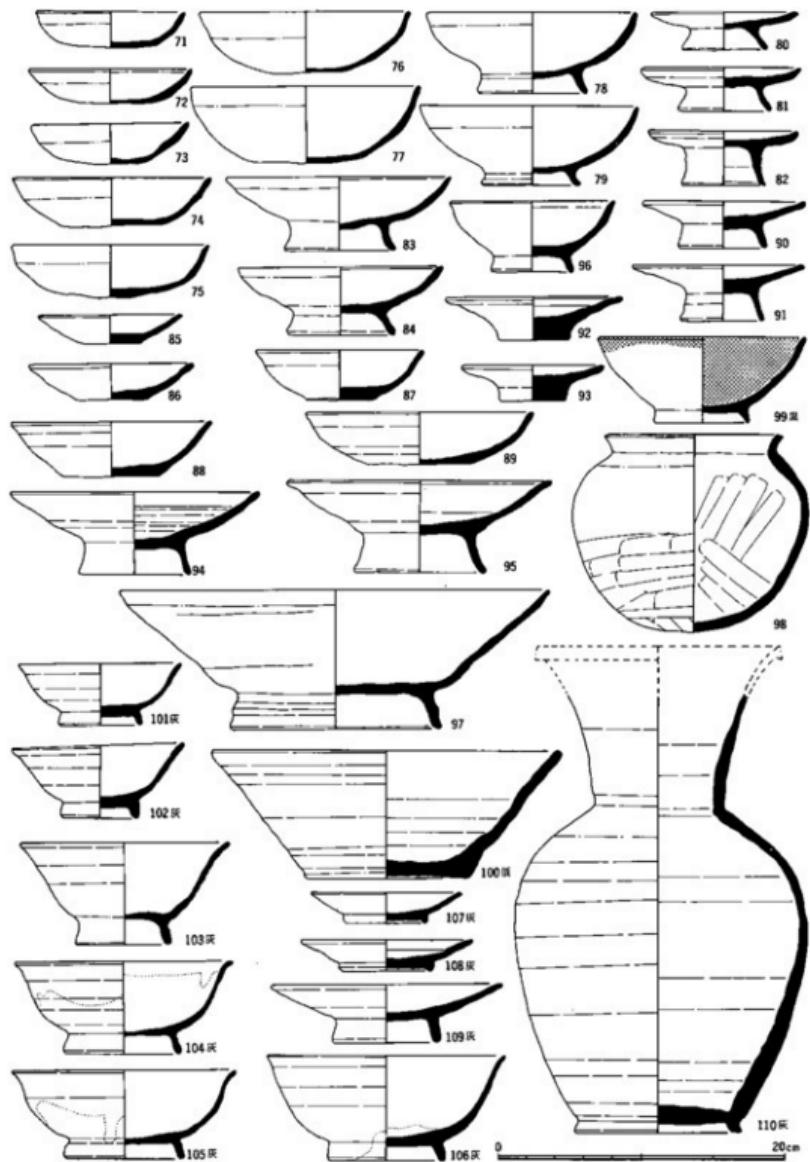
須恵器鉢51は、所謂玉縁口縁鉢と呼ばれるもので、斎宮での出土例は希である。底部は糸切り痕が明瞭に残る。暗青灰色を呈し、胎土は精良である。

灰釉陶器椀・皿は、低くて幅の広い三日月状の高台が付き、灰釉はツケガケされるもので、概ね折戸53号窯式に相当するものと思われる。底部は糸切りのままのもの、中央部のみ糸切り痕を残し、外周をヘラケズリするもの、底部全面をヘラケズリするものがある。椀には、腰が張り、口縁部が外反する深椀タイプのもの（62~65）と、腰の張りが弱く、直線状に開くもの（58~61）がある。皿は口径13.5cm前後のものが多い。椀65、皿68には、口縁端部に5ヶ所の輪花が認められる。

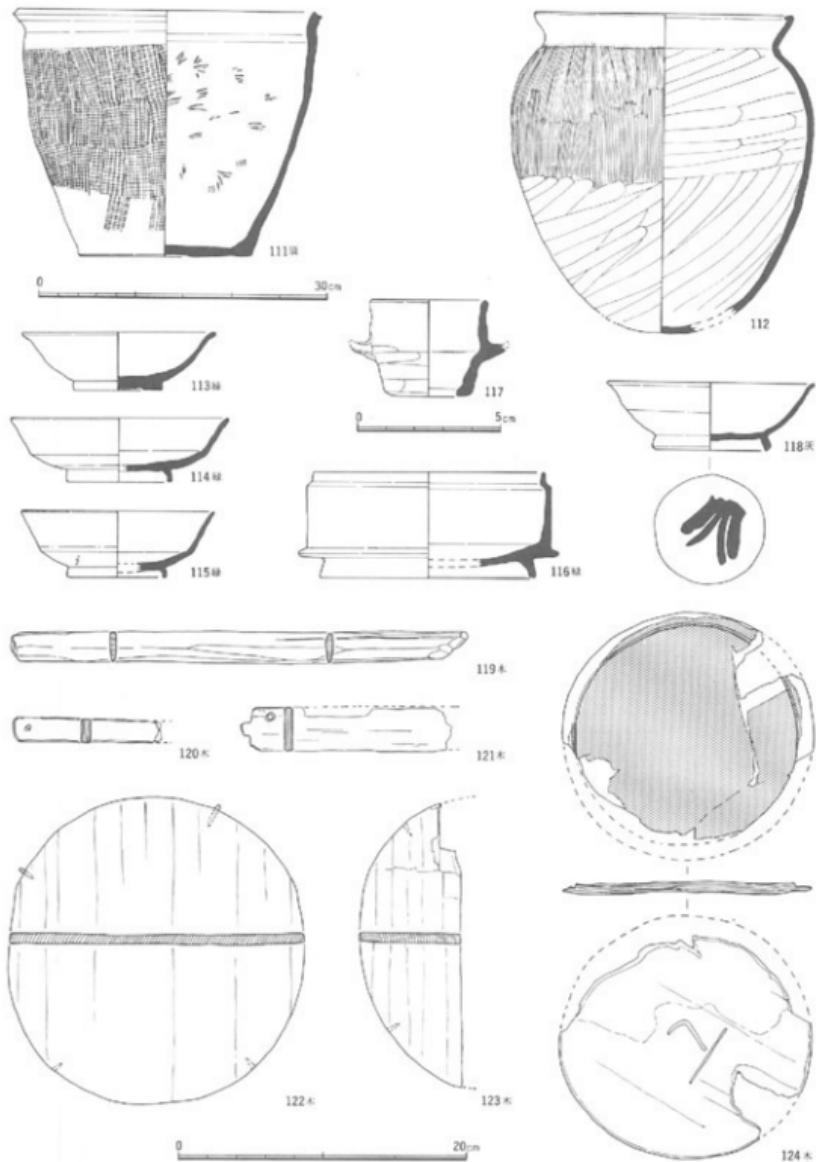
綠釉陶器椀55・56は、深椀タイプのもので、底部は糸切りのままで、淡緑色の釉が掛けられ、近江産の綠釉陶器と思われる。55は全面に釉が掛けられ、体部内面指先、外面ヘラ先による輪花が4ヶ所に配される。56は高台の内側に弱い段があり、底部外面は素地のままで、口縁端部に輪花が3ヶ所認められる。綠釉小壺53は完形品で、外面を丁寧にヘラケズリし、内外面ともに淡緑色の釉をハケ塗りしている。

上層出土の土器には、土師器皿・小皿・台付皿・台付小皿・椀・台付椀・ロクロ皿・ロクロ小皿・ロクロ台付皿・ロクロ台付小皿・ロクロ椀・ロクロ台付椀・台付鉢・高杯・壺・長胴甕・甕・瓶・カマド、黒色土器椀、須恵器壺・甕・鉢、灰釉陶器椀・皿・段皿・壺、綠釉陶器などがあり、器種別の個体数ならびに占有率は表2の通りである。中層出土の土器と比べて大きな違いは、ロクロ皿・椀類の出現であり、また中層出土の土師器杯はAタイプ、Bタイプの区別がある程度できたが、上層出土のものは区別し難く、Bタイプの皿の消失など、平安時代初期からの系統を引く杯・皿の消失である。そこでここからは、杯を皿と呼び、台付杯も台付皿として分類することにした。

非ロクロ製の皿・椀には、口径14cm前後の皿74・75、口径10~11cmの小皿71~73、口径15~16.5cmの椀76・77、これに台のつく、口径15cm前後の台付椀78・79、口径14.5~16cmの台付皿83・84、浅い皿部に高台の付く口径10~11cmの台付小皿80~82があり、これらに対応して同様の器種がロクロ製にも認められる。ロクロ台付小皿90・91は口径11.4~12cm、ロクロ台付皿94



第14図 第61次出土遺物 SE4050 上層：71～110



第15図 第61次出土遺物・SE 4050; 111・112・119~124 SK4052; 116、SK4062; 114・115、SK4060; 113・117・118 (111・112は1:6、117は1:2)

・95は口径18cm前後と非クロクロ製に比べ一回り大きく、クロクロ椀87、及びこれに高台の付く台付椀96は非クロクロ製に比べ小さい。ロクロ小皿85・86、椀87、皿88、擬高台をもつ小皿92・93は、いずれも底部に明瞭な糸切り痕が残る。皿89はロクロ成形後、底部をロクロでヘラケズリする。

長胴甕は、斎宮の土師器編年ではSK2650の段階で消失するものと考えていたが、この時期まで残ることが112の出土で確認された。また、甕は図示していないが、把手が体部中央より下に付けられ、底部のさんはいずれも付かない。

灰釉陶器椀101～106は、深椀タイプで高台が比較的高くて端部が丸く終わるものが多く、東山72号窯式に相当するものと思われる。底部は中央部に糸切り痕を残し、外周をヘラケズリするものが多い。大小関係と思われる無釉の椀102・103は、あまり例を見ないタイプである。

以上のことから、井戸下層出土の土器は、黒笹14号窯式の新しい段階から黒笹90号窯式の古い段階に位置付けられ、中層出土の土器は、ロクロ製土師器がないという点で、斎宮跡土師器編年のSE2000より古い様相を示しており、折戸53号窯式の新しい段階に位置付けられる良好な一括資料と考えられる。またこれに統く上層出土の土器は、概ねSE2000相当の一群であると考えられる。

一方、木製遺物としては井戸下層から出土した刀形、曲物の底などがある。

刀形119は刀身と柄の境の不明瞭なものである。刀身は両面から削り、先端は斜めに切りおとされて、切先を表現している。柄にあたる部分には鎬にあたる棱が弱く、平坦なつくりとなっており、柄を表現しているものと思われる。全長31.7cm、幅2.2cm、厚さ0.5cmである。

曲物の底は径15cm前後のもの3点、20～22cmのもの4点の計7点がある。円板を側板の内側にはめこみ側板の上から木釘をうちこんで結合したものは6点あり、このうち122には木釘が残っている。124は円板内面の周縁を1段低くつくるもので、内面には漆が付着している。側板を結合するための孔は確認できなかった。また、外面中央には焼き印の痕跡かと思われるもの

器種	個体数	%
土師器		
皿	103	13.2
小皿	307	39.3
台付皿	77	9.9
台付小皿	38	4.9
椀	13	1.7
台付椀	51	6.5
ロクロ皿	11	1.4
ロクロ小皿	5	0.6
ロクロ台付小皿	33	4.2
ロクロ台付皿	12	1.5
ロクロ椀	1	0.1
ロクロ台付椀	1	0.1
台付鉢	4	0.5
高杯	7	0.9
壺	1	0.1
長胴甕	12	1.5
甕	49	6.3
瓶	4	0.5
カマド	3	0.4
黒色土器		
椀	2	0.3
須恵器		
壺	1	0.1
甕	2	0.3
鉢	2	0.3
灰釉陶器		
椀	26	3.3
皿	7	0.9
段皿	2	0.3
壺	5	0.6
綠釉陶器		
椀・皿	2	0.3
計	781	100

表2. 井戸上層出土の土器

が残っているが、判読不明である。内径15cm、外径17cmである。

他に孔の穿たれた用途不明のもの2点(120・121)がある。

このほか特殊な遺物として、円面硯脚部片、須恵器転用硯、ミニチュア瓶、墨書き器5点、綠釉陶器91点、刀子などのほか、綠釉陶器の中には、陰刻花文を施文するものや香炉など斎宮で例の少ないものも出土している。

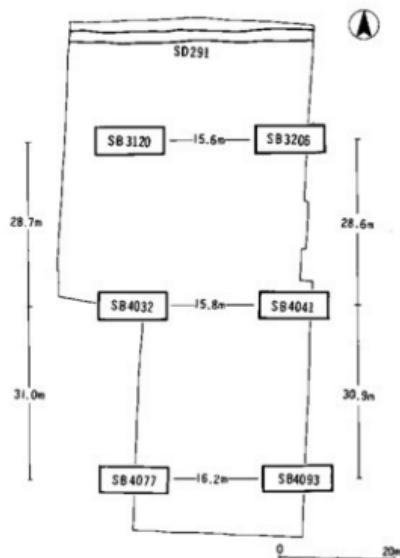
#### (VII) まとめ

今回の調査では、井戸出土の高杯に描かれた人面墨書き器、刀形木製品、馬齒など祭祀にかかると見られる斎宮では初例の遺物の出土、井戸出土の良好な一括遺物、整然と配置された建物及びその時期的な推移など、数多くの発見や知見を得ることができた。

まず、掘立柱建物の規模、柱通りの方向、建物配置などの動きについて少しふれておきたい。奈良時代末期～平安時代初期の建物は、概ね柱間2.4m(8尺)等間で、柱掘形は80cm前後の方形を呈し、柱通りの方向は北に対し西へ4°偏る建物が主流を占める。主要な建物は5間×2間の東西棟とみられ、比較的柱通りを揃え、一定の間隔をおいて整然と配置されていることが認められる。そして建て替えは、それぞれの場所で1～2回行われるようである。ところでこの時期の掘立柱建物の何棟かは、柱掘形内

出土の遺物を見る限り、積極的に奈良時代後期まで遡らせる建物は確認されていないが、第51次調査と同様、今回の調査でも奈良時代後期の土塙が9基ほど検出されており、今後奈良時代後期まで遡る可能性があることも考慮しておく必要があろう。

こうした建物配置は、平安時代前期の前半(黒笠14号窓式相当)頃までは、建物の規模・柱間がやや縮小されたり、廃棄されたりする建物があるものの、ほぼ踏襲されるが、平安時代前期の中頃(黒笠14号窓式の新段階相当)になり、これまでの建物配置のパターンが大きく崩れ新たな建物がこれまで空閑地であった調査区南部に形成される。この時期に何らかの理由で斎宮寮としての機構に大きな



第16図 建物配置図(奈良末～平安初)(1:1000)

変革があったものと想定され、建物配置にみられる第一の画期として把握されよう。この配置は平安時代前期後半（黒笪90号窯式相当）にも受け継がれ、整備拡充される。柱通りの方向は北に対し2°西へ偏る建物に統一されており、柱掘形は60～70cmの方形を呈す。柱間は1.6～2.1mの間におさまり、平安時代初期の建物に比べて規模が縮小する。今回平安時代中期に含めた黒笪90号窯式の新段階相当の建物であるSB4075・4083・4092も、前代の建物配置パターンの延長とみてよく、特に逆L字形に配置されたSB4075・4083は、前代のSB4074・4085の建て替えと見られよう。ただ、この時期の建物は、すべて北に対し2°東へ偏る建物であり、次の折戸53号窯式に相当するSB4040もE1°Sで從来の建物の方向と大きく異なる。柱掘形も径40cm前後の円形となり、北に対し東へ偏る傾向が強いのがこの時期であり、何らかの理由で建物の方向に変化が生じたものと見られ、これを建物を通して見られる第二の画期として把握できよう。平安時代後期にはこれまであった調査区南部の建物群は消滅し、調査区北東部に3間×2間の小規模な建物が集中し、柱通りの方向は再び北に対し3～7°とバラつきがあるものの西へ偏る建物に戻る。以上のような建物の規模や配置の動向は、第61次調査区内に限った見方であるが、齋宮全体にも通じることが十分予想でき、今後第一の画期、第二の画期がいかなる要因によるものか、外的、内的両側面から追求していく必要があろう。

次に、井戸出土の祭祀遺物について触れておきたい。井戸底付近で出土した人面墨書き土器は、共伴する土師器、灰釉陶器から9世紀後半代のものと考えられ、杯部は欠損して不明だが、少なくとも高杯脚部内面に描くという点で例を見ないものである。人面墨書き土器の資料が少ないので、この時期にあって平城京や長岡京から出土する恐ろしげな顔を描いた奈良時代の人面墨書き土器と矢作川河床遺跡出土の平安時代末期以降の人面墨書き土器との間を埋める好資料と言えよう。また、共伴する刀形木製品と共に齋宮の祭祀の実態を窺える数少ない貴重な発見となった。齋宮ではこれまでに95基の井戸が確認されているが、完掘でき得たのはわずか数例であり、今回のように木製品がわずかではあるが、残存していたという事実は、今後の調査で木簡などが出土地する可能性も十分期待できると言えよう。

## V 第62次調査

### 6 A G I - J · K (東加座地区)

第62次調査区は通称中町裏字東加座地区の東南部に位置する。この地区は現在までの調査で、宮城中・東部において碁盤目状に走る方形地割りの存在が想定されているが、今回の調査地は、この方形地割りの北から2条目の東端区画内の西北部に位置する。これまでこの東加座地区では数次にわたり発掘調査が実施されていて、特に今回の調査地付近のものとしては西20mの第40次、西北90mの第57次の面的調査の他、北に接する畠で第35次のトレンチ調査、南東で第48-11次調査が行われている。これ以外に同じ方形区画内では第31-7次、第37-9次、第37-13次の小規模調査が実施されていて、特に第31-7次調査は今回の調査地の東に接する位置にある。これらの調査により、第35次調査と第40次調査では北と西を区画する区画溝が検出されており、今回の調査地はこの区画溝に面される位置にある。また小規模調査により、奈良時代後期から平安時代前期にかけての掘立柱建物群が確認されており、同時期の遺構の検出が予想される地区である。

今回の調査は、これまで面的調査の行われていないこの区画内で、奈良時代から平安時代前期の建物配置の実態を把握することを主な目的として実施した。

調査の結果、遺構検出面は、耕土、床土を取り除いた黄褐色土の地山層であり、この地山面までは非常に浅く南端で0.2mであり、北に向かって徐々に深くなり北端では0.4mである。北端部には近代の排水溝が東西に走っており、この部分では遺構は検出されなかった。

検出した主な遺構には、奈良時代としては中期の竪穴住居1、井戸1、後期の掘立柱建物6、井戸1、平安時代としては初期の掘立柱建物4、前期の掘立柱建物13、後期の掘立柱建物9とこれらの各時期にともなう土壙がある。しかし、調査区が南北に細長いため掘立柱建物の規模の明らかなものは少ない。

#### (I) 奈良時代中期の遺構

奈良時代中期の遺構には竪穴住居1、井戸1、土壙5がある。

竪穴住居S B4135は調査区中央西にあり、西半分は調査区外の為正確な規模は不明であるが、南北5.4m、深さ0.2mで比較的の規模の大きな竪穴住居である。住居床面は堅く踏み固められ、埋土中から焼土、炭化物などの出土はなく火災をうけた様子は認められないが、床面のかなり広範囲にわたり焼土面を検出した。焼土面以外の床面積は非常に狭く、普段の生活を営んでいたとは考えられず、通常の竪穴住居とは異なる性格を持つものと考えられる。北1mの位置に幅0.3m、深さ0.2mの東西溝S D4134と、東1.2mの位置には幅0.3m、深さ0.1mの南北溝SD

4136とがある。出土する遺物は少ないが、竪穴住居 S B4135の北辺と東辺とに平行することから付属する施設と考えられる。

井戸 S E4155は竪穴住居 S B4135の南5mに位置する。一辺1.6mの方形で、深さ4.4mの規模である。井戸枠は平安時代初期に抜き取られ、抜き取りにともなう径4mの円形の落ちこみが上面に認められ、抜き取った後埋められている。埋土は抜き取りにともなう平安時代初期の遺物を多量に含む層が遺構検出面から約1mあり、その下には遺物をほとんど含まない層が約3m続き、最下層の0.5mは井戸使用時の堆積土であると考えられる暗灰色粘質土である。最下層には植物の葉や木片が残存しており、それらとともに木製品が4点ほど出土しているが、最下層からの遺物の出土は少なく土師器杯・甌、須恵器甌などの経片がある。また上層からは土師器、須恵器に混じり壇堀、焼土塊も出土しており、焼土塊の中には鋳型かと思われるものもあるが、小片のため詳細は不明である。

土塙は竪穴住居 S B4135の北に S K4130、東に集中して S K4148・4150～4152がある。遺物は各土塙から整理箱で4～8箱出土している。出土した遺物の中には別々の土塙や井戸 S E4155と接合するものも認められる。S K4130は一辺3mの方形を呈し、深さは0.2～0.8mで埋土中には焼土が多く含まれる。S K4148は径1mの円形を呈し、深さは0.7mである。埋土中から底部の穿孔された完形の土師器甌や杯・高杯などが出土している。S K4150～4152は、径3～4mで、深さは約0.5mの横円形を呈する。これらの土塙から出土した遺物は土師器杯・皿・甌が中心であり、須恵器の出土量は少ない。

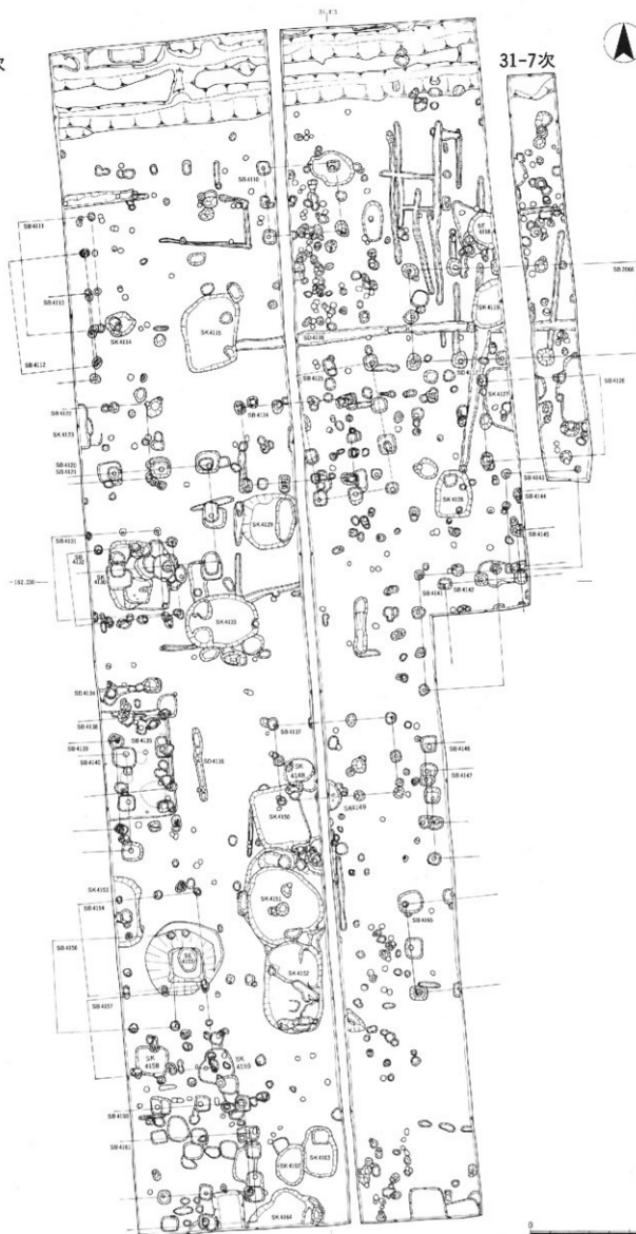
## (II) 奈良時代後期の遺構

掘立柱建物6、土塙4、井戸1、東西溝1がある。

掘立柱建物のうち規模の判明するものはS B4137のみで他は不明であるが、6棟とも東西棟になると思われ、方位は東で北に4°振れる。S B4120・4121は同じ位置で建て替えられたもので、中期の土塙 S K4130より新しい。柱間は2.4m等間である。柱掘形は建て替えられたものは一辺0.7mの規模であるが、古いものはより大きく一辺1.2mの方形を呈し、蕭宮跡でこれまで検出された掘立柱建物のなかでも比較的規模の大きな柱掘形である。S B4138・4139は竪穴住居 S B4135より新しい。切り合い関係から平安時代初期のS B4140より古くS B4138→4139の関係が認められた。S B4137はS B4139の東にあり、3間×2間の東西棟である。桁行2.0m、梁行1.9mで中期の土塙 S K4150より新しい。S B4165は東南部にあり、柱間2.2m等間で柱掘形は径0.8～1mの方形で比較的大きな建物である。

土塙 S K4114・4115は調査区北西にある。S K4114は径1.2m、深さ0.3mで、S K4115は南北3.4m、東西2.4m、深さ0.4mの横円形を呈する。S K4149は中期の土塙の密集する中央南にあり、径1.5mの円形を呈するS K4119は東北にあり、南北2.2m、深さ0.3mで、東半は調査区

62次



第17图 第62次发掘示意图 (1:200)



外に延びる。いずれの土塙からも出土した遺物は少ない。

東西溝 S D4116は S K4115から東に延び、幅0.4m、深さは西では浅く東に向かって深くなり0.4mである。埋土から出土した遺物はほとんどないが、東端では平安時代前期の土塙 S K4119に壊される。方位は東で北に4°振れる。

井戸 S E4118は S K4119の北にあり、遺構検出面では径1.8m、底では径1mの円形を呈する。東半は調査区外のため、2.4mまで掘り下げたが完掘できなかった。出土した遺物には土師器、須恵器のはか鉄鎌が1点出土している。

### (III) 平安時代初期の遺構

掘立柱建物3、土塙2がある。また、この時期に井戸 S E4155は埋め立てられる。

掘立柱建物 S B4140は中央西にあり、奈良時代後期の掘立柱建物より新しいことがその切り合い関係から判明した。南北2間分検出したのみであるが、柱間は2.4m、柱掘形は一辺1mの方形を呈し、中央の柱掘形の深さは0.5mである。北と南の柱掘形は全体に0.8m掘削され、柱径約0.24mの部分だけさらに掘り下げられ遺構検出面から1.4mに達する。柱掘形からこの時期のメルクマールとされるロクロ水びきで作られ、底部に糸切り痕をのこす長頭臺の底部が出土した。北部にある S B4110は2間×2間。S B4124は S B4110の南にあり、3間×2間の東西棟でともに方位は東で北に4°振れる。

土塙 SK4128は調査区中央東に位置し、東西1.8m、南北2.4m、深さは0.3mの楕円形を呈している。出土した遺物には土師器、須恵器、製塙土器などがあり、整理箱で4箱ほどである。土師器杯・皿が大半で、須恵器は壺1個体と杯・甕の破片がわずかに出土しているのみである。S K4153は S B4140の南にあり、南北3.6m、深さ0.4mで西半は調査区外である。出土した遺物は少ない。

### (IV) 平安時代前Ⅰ期の遺構

掘立柱建物は6棟あり、これらは柱掘形の径が約1mの方形で比較的規模の大きな東西棟建物になると考えられる S B2066・4146・4147と、これよりも柱掘形の規模の小さな S B4125・4126・4141とに分けられる。方位は概ね東で北に2~3°振れるが、S B4125は方位が異なり北で西に9°振れている。規模の大きなもののうち調査区東北にある S B2066は東接する第31~7次でも検出されており、4間以上×2間でおそらく5間×2間の東西棟になると思われる。S B4146・4147は同じ位置で建て替えられたもので S B2066の南方に位置し、西妻柱通りをほぼ揃えられており、S B2066と同じような規模になると思われる。また、規模の小さなものは大型建物 S B2066と S B4146・4147の間に S B4125以外は位置し、S B4125・4141は3間×2間の南北棟、S B4126は第31~7次調査でも検出されており3間×2間の東西棟になると思われる。

#### (V) 平安時代前II期の遺構

掘立柱建物6、土塙9がある。

掘立柱建物は前I期と同様に柱掘形の大きさなどから二者に分けられる。規模の大きなものはSB4160・4161があり、調査区南東で検出された。同じ位置で建て替えられたもので、南北2間、東西3間以上の東西棟建物である。その切り合い関係からSB4161のほうが古い。規模の小さなものはSB4142～4145が中央東で集中して検出された。規模が判明するものではなく、SB4143が東接する第31～7次調査でも検出されており、3間×2間の南北棟と推察されるだけである。

土塙にはSK4123・4127・4129・4133・4158・4159・4162～4164がある。出土した遺物は少ない。中央にあるSK4133は東西3.6m、南北2.6mの楕円形で深さ0.4mである。埋土から遺物は整理箱で2箱出土し、土師器、須恵器、綠釉陶器、灰釉陶器、製塩土器などがある。このうち綠釉陶器は楕1個体の破片で、口縁部内面に陰刻花文が施されている。また南にあるSK4162からも土師器、須恵器、灰釉陶器とともに綠釉陶器が2点出土した。

#### (VI) 平安時代後期の遺構

掘立柱建物9、南北溝SD4117がある。掘立柱建物はいずれも調査区西辺で検出されたもので、規模の明らかなものはない。西北部にあるものは、北からSB4111～4113・4122・4131・4132があり、井戸SE4155周辺ではSB4154・4156・4157がある。これらのうち、南北3間分検出され南北棟になると考えられるものはSB4111・4112の2棟だけであり、他のものは南北2間分が検出されいずれも東西棟建物になると思われる。方位は東で北に5°前後振れるものが多い。柱掘形は円形で径0.4mと小さい。また、SB4112の柱掘形からは、ほぼ完形の綠釉陶器の小皿が1点出土している。

南北溝SD4117は調査区東北に位置し、幅0.6m、深さ0.1mの規模の小さな溝である。方位は北で東に8°振れる。

#### (VII) 遺 物

調査面積のわりには遺物は多く整理箱で約100箱ほどある。その遺物は奈良時代中期のものが中心で、平安時代初期・前期のものは少なく、中期以降のものはほとんどない状態である。また、綠釉陶器の出土は少なく、調査区全体でわずかに7点しか出土していない。

奈良時代中期の遺物は、土塙からかなり出土している。土師器杯にはミガキの施されるものがあまり見られないことや、皿のなかには口径14cmで底部e手法のものが見られるなど中期のなかでも新しい時期と考えられる。ここでは中期の遺物については他の土塙と接合したものについて述べるにとどめ、後は奈宮跡では初めてである工具類の柄（木製遺物）を出土した井戸SE4155出土の遺物について記述する。

S K4130から出土した土師器鉢12は口径25.4cm、器高6.4cmの把手の付く鉢で、S K4145・4151に同一個体がある。胎土は精良で赤褐色を呈する。体部外面にはミガキが施され平滑に仕上げられている。内面上端には螺旋暗文が1条と下方には斜格子状暗文が底部内面は螺旋暗文が2条以上施されている。S K4152から出土した須恵器甕54は口径22.2cm、器高27cmで口縁部の破片がS K4130・4138から出土している。体部外面には縱方向のハケメの後カキメが施されており、タタキメを刷毛で丁寧に消しているようである。S K4148から出土した須恵器杯蓋37は口径9.1cmで同一個体がS K4150・4152から出土している。

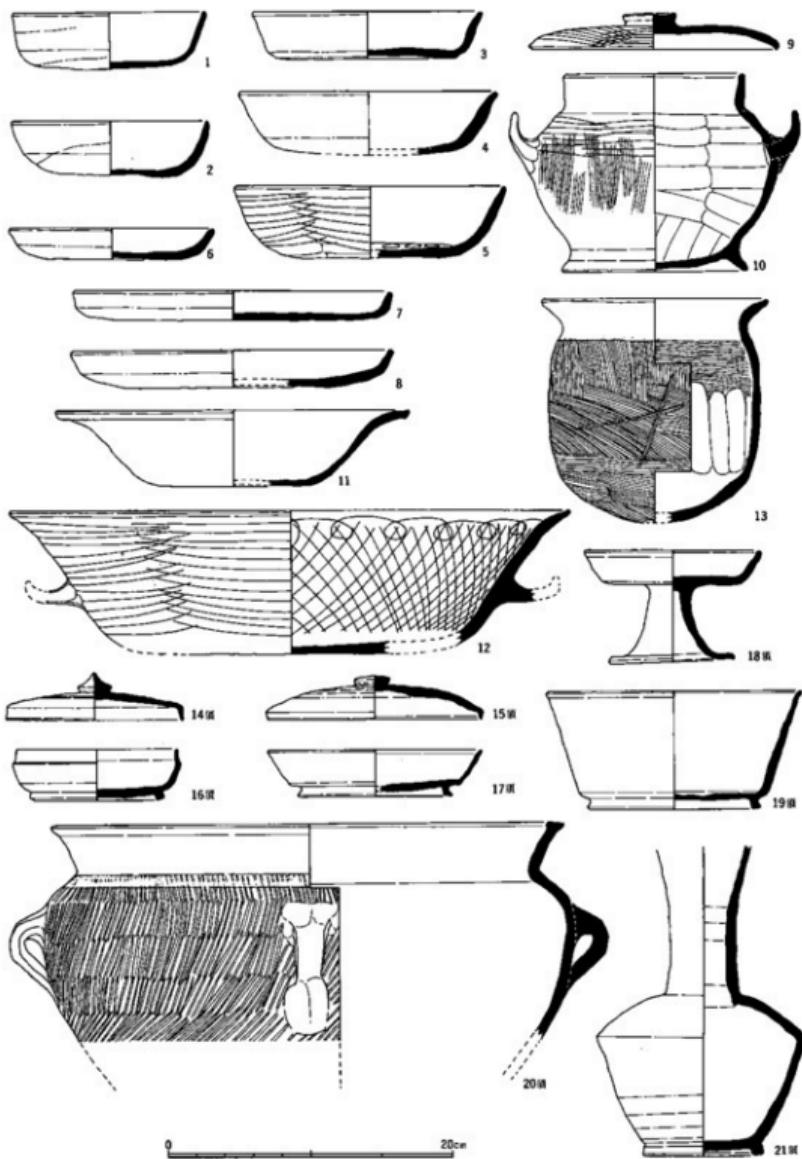
S E4155出土の遺物は、平安時代初期の井戸の廃棄にともなう上層のものと使用時期と考えられる下層のものとに分けられる。下層から出土した遺物は少なく、その年代については不明な点が多いが、後述するように奈良時代中期の土塙の遺物と接合するものが見られることなどから土塙群と同じ時期が考えられる。

上層から出土したものには土師器杯・皿・鉢・甕、須恵器杯・皿・甕とスラグの付着する堆積と考えられるもの1点、鋳型の破片と思われる焼土塊がある。土師器杯は底部外面e手法で口縁部はヨコナデされ、外反気味にたち上がるも（55～57）と底径が小さく椀に近いも（58・59）があり、これらは法量によってさらに大小に分けられるようである。土師器皿60は口径17.3cm、器高2.2cmで口縁部外面までヘラケズリが施される。皿61は口径19.5cm、器高2.1cm底部外面はe手法である。土師器鉢62は口径23.8cm、器高8.9cmで底部外面ヘラケズリが施される。胎土は赤褐色の精良なものである。須恵器はその出土量は少なく杯64・65と他に口縁端部の折り曲げられ脚の付く皿などがある。

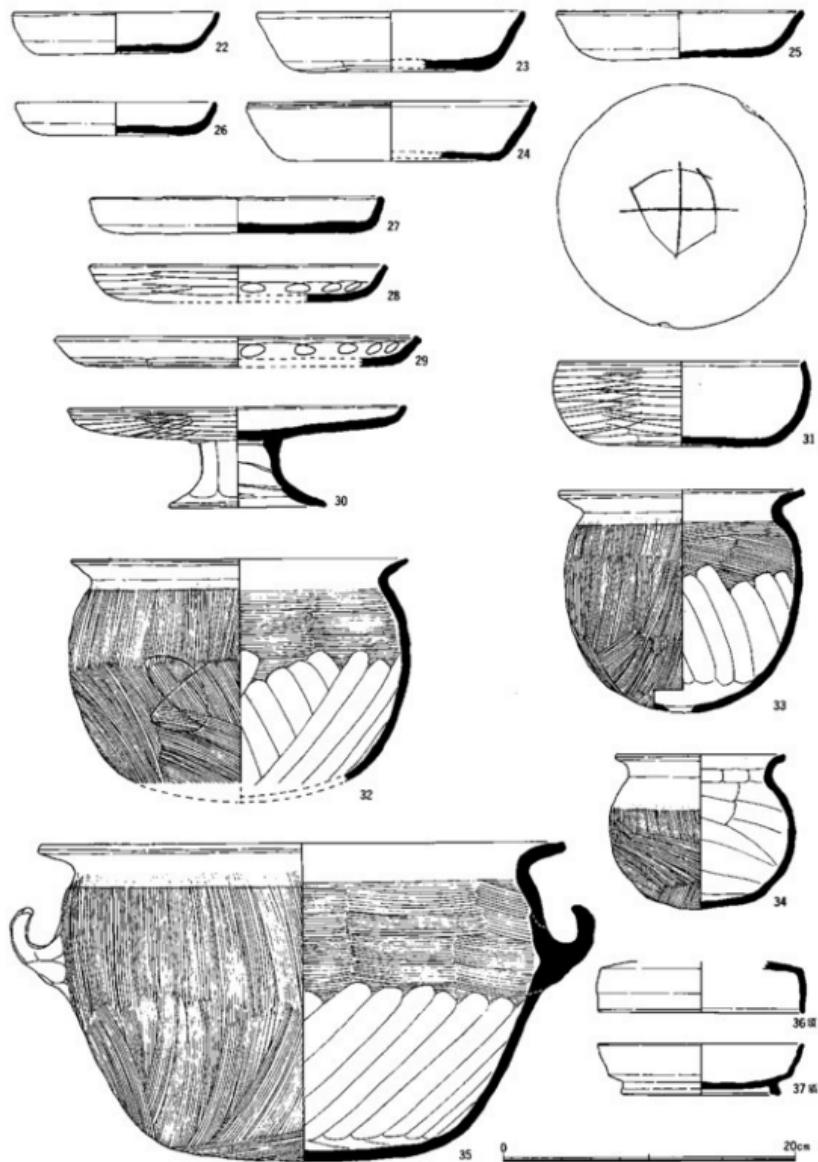
下層から出土したものは土師器杯・高杯・甕、須恵器甕と木製遺物がある。土師器杯・高杯は細片がわずかに出土しただけであるが、杯の底部外面にはヘラケズリが施されている。土師器甕63は口径、器高ともに15.4cmの球形を呈するもので、同様なものが他に一個体ある。また、把手のつく口径42cmほどの甕も出土している。須恵器甕67は口径55.8cm、器高38cm、底径29cmで、口径と器高に比べ底径の広いもので、同一個体が土塙S K4130・4150・4151から出土している。調整は通常のものとは異なり体部外面はタタキの後上半にはヘラケズリ、下半には縱方向のヘラミガキと螺旋暗文を一条と、他に性格不明のミガキが部分的に施されている。また、さらに底部外面にも螺旋暗文が一条巡らされていて、このような大型の須恵器で暗文の施される例は少ない。須恵器甕66は口径37.6cm、器高29.8cmの脚のつくもので、同一個体が土塙S K4151から出土している。

木製遺物には次のものがあるが、材質については現在のところ不明である。

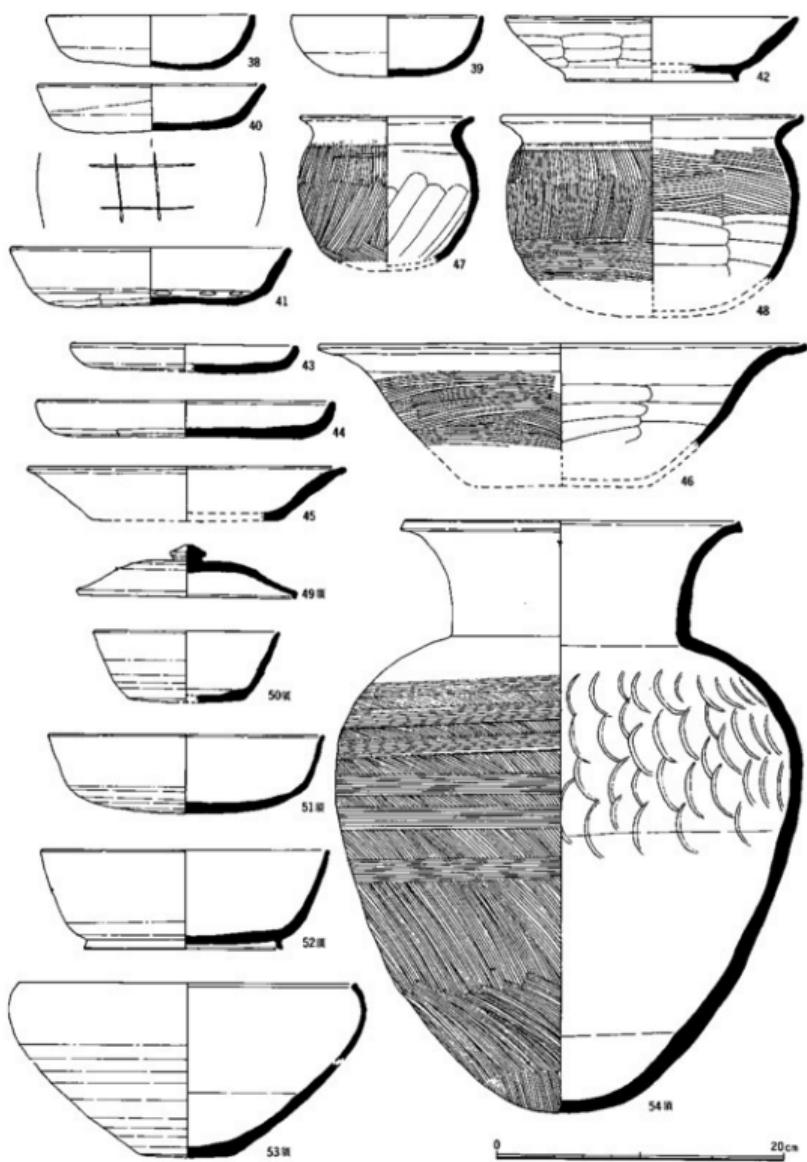
斧の柄68は木の幹と枝の股を利用し、枝から握りを幹から斧台をつくるもので、鉄斧を横方向に装着する横斧である。斧台は板状に加工されるが、鉄斧装着部は明確ではなく、その厚味



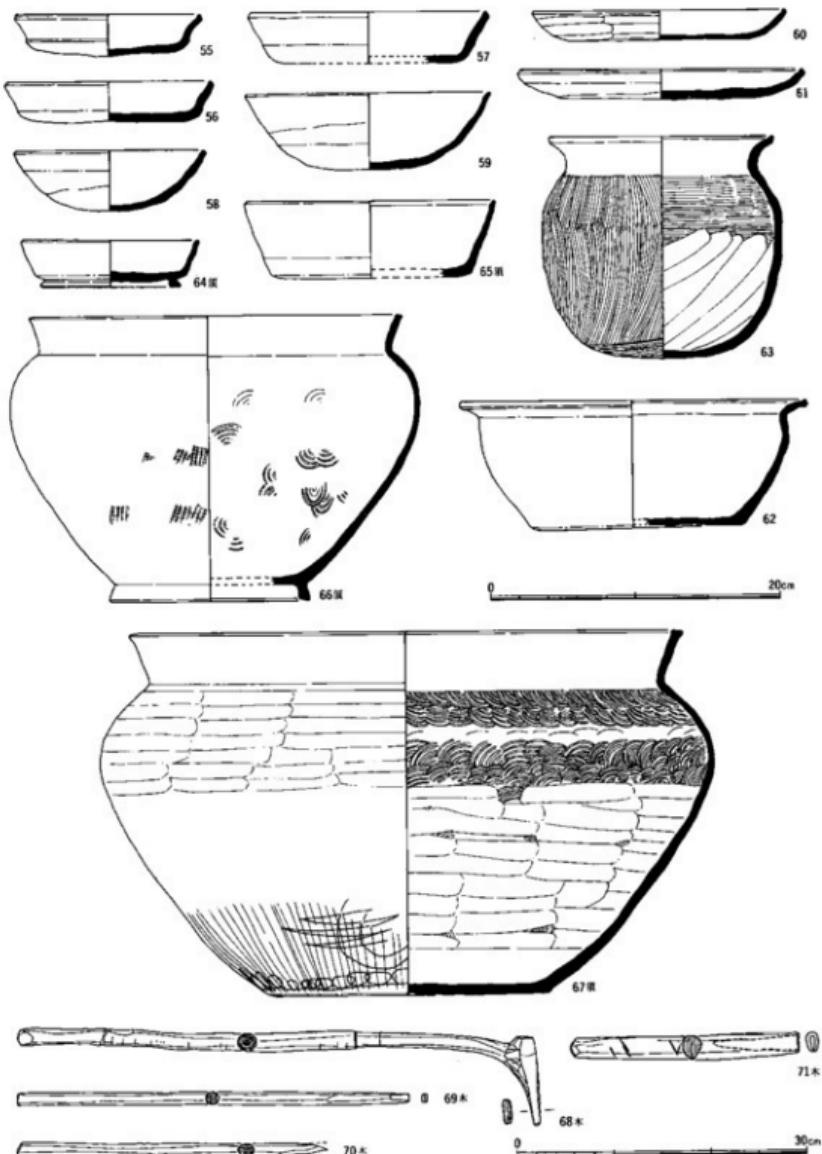
第18図 第62次出土遺物 SK4130; 1~21



第19図 第62次出土遺物 SK4148 : 22~37



第20図 第62次出土遺物 SK4152; 38~54



第21図 第62次出土遺物 SE 4155 上層；55~62・64・65  
SE 4155 下層；63・66~71 (66~71のみ1:6)

は先端に行くほど減る。完全に残る握りの部分には表皮が残っているが、斧台部近くではなく意識的に剥ぎ取られたものと思われる。全長54.5cm、握り径2.0cm、斧台長9.5cm、同幅2.5cmである。69は全長41.3cm、径1.4cmの割材で作られる丸棒状の柄で、先端は両面から加工され断面が方形気味である。この先端部には幅1mm、深さ5mmほどの切りこみがあり、この部分になんらかの工具を装着したものと考えられる。70は残存長33cm、径1.8cmの割材で作られる丸棒状の柄で、先端部を欠するが69と同じようなものと思われる。71は刀子の柄で全長23cm、径2.8cm×2.1cmで断面は楕円形を呈する、刀子の柄の中では比較的大きなものである。柄頭部の先端は加工され丸味を持つ。他に長方形曲物の側板の断片も出土している。

#### (VII) まとめ

今回の調査の結果は当初の目的通り、奈良時代後期から平安時代前期を中心とした掘立柱建物を調査面積が狭いにもかかわらず17棟を検出したが、建物配置までは明らかにすることはできなかった。奈良時代後期から平安時代前期までの建物には各時期で柱掘形の規模の大きな梁行2間の東西棟建物と、規模の小さな東西棟、南北棟が見られ、当地区では大型建物を中心として、それに付属するような形で小型のものが配置されていたようである。宮城東南部では調査があまり行われていないが、当区画の南の方形区画では第48—11次の小規模調査が実施され、奈良時代の竪穴住居2、掘立柱建物6などが検出されていて、東部地区においても奈良時代の遺構が存在することが確認されている。この調査は小規模ではあったが、今回の調査成果とあわせて考えてみると、奈良時代後期から宮城東南部周辺の整備がかなり進んでいる状況が明らかとなった。

奈良時代中期の竪穴住居S B4135は床面にかなりの焼土面があり、特殊な性格が考えられるが、この竪穴住居の南5mの位置にある井戸S E4155の上層から埴堀、鉄型、下層からは工具類の柄などが出土し、これらの遺物を周辺から廃棄されたものであるとするなら、竪穴住居に小規模ながらも鍛冶工房的な性格があるのではないかと考えられる。

また、井戸下層から出土した木製遺物については、斎宮跡ではこれまで土壤の性質のためか木製遺物はあまり出土していない。しかし、今年度の調査では第61次調査の井戸から刀形、曲物などの木製品が、第63次調査の井戸からは井戸枠が、そして今次調査の井戸からと、多くの出土例をみた。これ以外に、これまで木製品の出土した遺構はすべて井戸であることから、井戸内には木製品がかなり残存している可能性が高くなってきており、斎宮跡では、まだ出土していない木簡などの文字資料についても今後に期待がもてそうである。

## VI 第63次調査

### 6 A F G - M・N (西加座地区)

本年度の計画調査は、史跡指定範囲東部の第2種保存地区（通称中町地区）の調査に重点を置いて実施してきた。今回の調査はその一環として第2種保存地区の北西部、字西加座で実施した。調査面積は約1,250m<sup>2</sup>、現況は畠である。

今回の調査地は、史跡指定範囲中・東部に想定されている方形地割りに従えば、北から1条、東から3条目の区画の南側中央部近くに相当し、先述の第61次調査は同じこの区画の西側中央に位置し、その間約40m離っているにすぎない。さて、今回の調査区が位置する区画については、その西半において第51次と第61次の2回の面的な調査が行われ、その様相は先述の如く明らかになりつつある。それに対し、区画の東半部では、わずかに第41次、第47次のトレンチ調査が行われているに過ぎなかった。このうち第41次の南北トレンチの1本(6 A F G - N)が今回の調査区の東端近くを通っており、その際、この区画の南辺を限る東西方向の区画溝と考えられるS D 2360、奈良時代の土塙、平安時代初期の掘立柱建物などが検出されていた。一方、調査区西側を南北に通る町道沿いでは町道西側で個人住宅の建設に伴う第11-2次調査などの小規模な調査を実施しているが、町道に近い部分ではかつての粘土採掘により遺構が削られている事が判明している。このような状況の下で、今回の調査では、第41次のトレンチ調査の結果を面的に再確認するとともに、区画溝S D 2360とそれに規制された一区画内の南辺の状況を明らかにする事を主な目的とした。

調査区内の基本層序は第I層：耕作土、第II層：褐色土、第III層：茶褐色土、第IV層：黄褐色土の地山となっており、第IV層（地山）までの深さは0.3~0.6mで南から北にむかって緩やかに傾斜している。遺構は一部を除き第IV層（地山）上面で検出した。

主な遺構としては、奈良時代の土塙、および平安時代初期～後期にかけての掘立柱建物をはじめ各時期の土塙、溝などがある。中でも、掘立柱建物は調査区中央西側にかなり集中して検出され、またその南側で検出した平安時代前期の井戸S E 4250には、小規模なものではあるが、方形の板組の井戸枠が残存していた。

しかし、期待された区画溝S D 2360については、調査区南端に近代の粘土採掘による攪乱が広がっており、調査区東端で痕跡を確認できたに過ぎなかった。

#### (I) 奈良時代中期の遺構

調査区北東部で、土塙3を検出した。

S K 2358は第41次のトレンチ調査で一部が検出されているもので、今回の調査により3.5m×

2.2m、深さ0.4mの隅丸方形の土塙で東側にテラス状の段を有するものであることが判明した。土師器杯・皿・甕・須恵器杯・甕などが整理箱2箱分出土している。SK4230は、畑の境界の西側で2/3程を検出したもので、土師器杯・皿・甕が少量出土した。SK4223は調査区北東でその一部を検出したもので、e手法で調整され内面に小さな渦巻きと直線および放射状の暗文が施された土師器碗が出土している。

### (II) 奈良時代後期の遺構

やはり、調査区北東部で土塙6を検出したのみである。

土塙SK4220は調査区北部で検出した3.4m×3.2m、深さ0.2mの台形に近い土塙である。平面の形状、底が平坦なことから、小規模な竪穴住居とも考えられるが、柱穴、カマド、焼土などが検出されず、竪穴住居とするには積極的な根拠に欠けるので一応土塙と考えておきたい。土師器、須恵器が整理箱3箱分出土している。SK4231は畑の境界東側で東半を検出した長径2.5m、深さ0.3mの土塙である。口縁部と底部との界が明瞭になりつつある土師器杯や小ぶりの土師器皿をはじめ、土師器把手付甕・カマド、須恵器把手付甕などが整理箱1箱分出土している。SK4226・2356・4227・4229は径0.8~1.8mの円形に近い小さな土塙で、いずれもb手法、e手法により調整される土師器杯・皿及びいわゆるいなか風の椀・甕、須恵器杯などが若干出土している。

### (III) 平安時代初期の遺構

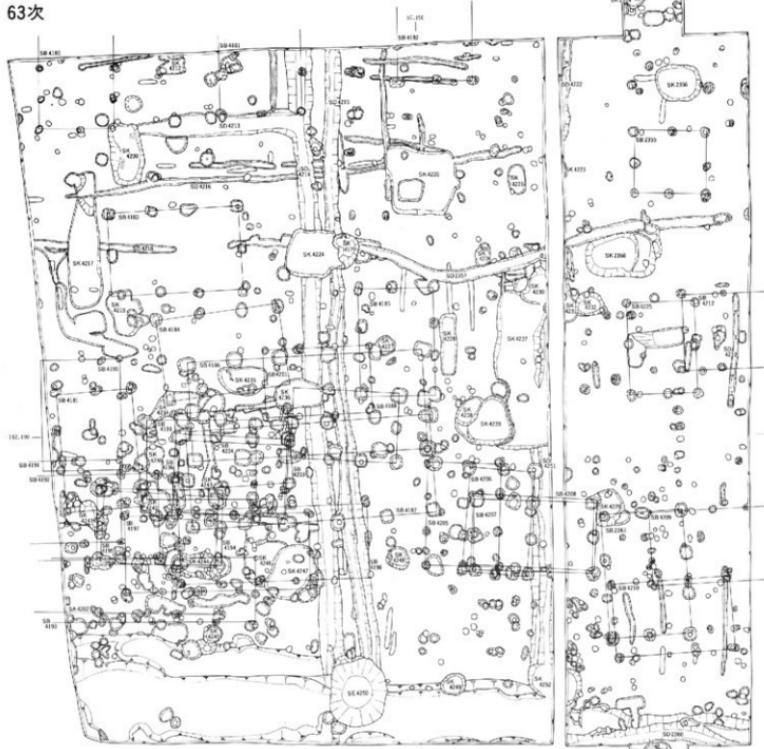
この時期に至り、調査区内では、はじめて大型の掘立柱建物を中心とし複数の建物が建ちならぶようになる。検出した遺構は、掘立柱建物10、土塙8、溝4で、遺構、遺物ともに多くみられる時期である。

掘立柱建物には、SB2355・2361・4180・4181・4183・4186・4187・4193・4206・4207がある。調査区中央部で検出したSB4186は5間×2間の東西棟でE3°Nの方向性を示し、区画溝方向にほぼ揃う。柱掘形は、一辺0.8mの方形で桁行はほぼ8尺等間である。このSB4186に平行しその北西に3間×2間の東西棟SB4183が存在する。また、SB4186に重複しながらやや南にずれた位置にやはり5間×2間の東西棟SB4187がある。梁行は5mでSB4186と同じであるが、桁行は12.3mでSB4186よりやや長い。柱掘形は、一辺0.7mの方形で一部に径20cm前後の柱痕跡が残っている。SB4186との前後関係は柱掘形の切り合いがないので不詳であるが、SB4187の柱掘形内出土土器の方がやや新しい様相を示すためSB4186→SB4187の順が考えられ、おそらく同じ建物が位置をずらして建て替えられたものであろう。また、このSB4187と直交する方向を示す3間×2間の南北棟SB2361が調査区南東部にある。両者の間は約8.3m離れ、SB4187の南側側柱通りとSB2361の北側妻柱通りはほぼ揃っている。あるいはSB2361はSB4187に付属する建物の可能性がある。

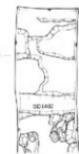
41次



63次



29次



0 10m



ほぼ方位にのる建物としては、調査区南西部の東西棟S B4193、調査区北辺の南北棟S B4180・4181、調査区南東部のS B4207がある。S B4207を除き柱掘形は0.3~0.4mと小さな円形である。S B4193は梁行が狭いため幅長く、S B2355は東西にやや長い。これらに対しS B4206のみ異なる方向を示している。

土塙には、SK 4200・4217・4219・4224・4228・4232・4237・4249がある。これらは、SK 4249を除き主に調査区北半で検出している。SK 4200は調査区北西部で検出した3.0m×1.7m、深さ0.3mの長方形に近い土塙で、埋土に焼土を若干含み底で2か所焼土塊を検出した。土師器杯・皿・高杯・甕・須恵器杯・甕などが整理箱8箱分出土しており、この時期の良好な一括資料となる。

SK 4224は、調査区中央北寄りで検出した2.8m×2.5m、深さ0.2mの方形に近い土塙で、上面を同時期のSD 2357に切られる。また、東端に重複する無遺物のSK 4179との切り合い関係は明瞭でなかった。土師器杯・皿・甕・須恵器杯が出土しており、e手法のはかにb、c手法の土師器杯・皿など奈良時代後期の様相を残す土器も含まれる。また、これらとともに土師器のミニチュア杯が出土している。SK 4237は、調査区中央東寄りで検出した長径8.0m、深さ0.2mの規模の大きな土塙である。東辺は畑の境界に入り、同時期の溝SD 4251に上面を切られる。土師器杯・皿・蓋・高杯・碗・甕・須恵器杯・甕・製塙土器が整理箱2箱分出土している。

溝には、SD 2357・4218・4233・4251がある。SD 2357・4218は、調査区北部をやや蛇行しながら東西に走る幅0.7m前後の浅い溝で遺構面ではとぎれて検出されたため、別の遺構番号をつけたが、おそらく一連のものであろう。土師器杯・皿・台付杯・高杯・甕などが出土しており、奈良時代後期の様相を残す杯・皿も含まれる。畑の境界の西側で溝上面から土馬の胴部が出土している。

SD 4251は畑の境界西側で検出した溝で、東辺がこの境界の畦中となる。南側と北側の延長はそれぞれ不明で、上面を近世の溝に切られ北半は同時期のSK 4237を切っている。土師器杯・皿・甕・須恵器杯・甕などが整理箱1箱分出土している。

#### (IV) 平安時代前I期の遺構

掘立柱建物4、塙1、土塙6がある。

掘立柱建物は、初期のS B4186などの大型建物の規模を受け継ぐものがなくなり、小規模な建物が点在する状況になる。S B4208は3間×2間の東西棟で柱掘形の大きさは異なるが、初期のS B4207と同一規模で重複している。S B4185は調査区中央で検出した3間×2間の南北棟である。また、S B4209・4212はいずれも調査区東外側に延び全体の規模は不明である。これらは、東でやや北に振れる方向性を示す。

SA 4202は調査区南西隅で検出したものですが南まで近代の擾乱がおよんでいるため、あるいは

は掘立柱建物の一部であるかも知れないが、ここでは一応塙と考えておきたい。柱間は2mでほぼ方位にのる。

土塙にはS K 4235・4236・4241・4246・4247・4252がある。S K 4247は調査区中央南寄りで検出した3m×2.5m、深さ0.2mのやや不整形な土塙で西肩で同時期のS K 4246を切っている。土師器杯・皿・高杯・甕・瓶、製塙土器、須恵器杯・盤・壺・甕、灰釉陶器碗、黒色土器碗が整理箱3箱分出土している。S K 4246は浅い土塙で土師器杯・皿・甕、黒色土器などが出土した。

そのほかの土塙は、いずれも径1.3~2.7mの楕円形に近い土塙で土師器、須恵器などが出土している。また、S K 4236からは転用碗（須恵器蓋）が出土した。

なお、後述する井戸S E 4250は少なくともこの時期には掘削され使用されていたものと思われる。

#### (V) 平安時代前II期の遺構

掘立柱建物9、土塙3、溝1、井戸1がある。

掘立柱建物には、S B 4188・4190・4191・4194・4195・4196・4199・4203・4204があり、調査区中央から西部の一角でかなり重複して検出された。これらは前I期と同様に規模の大きなものがみられず、全体の規模のわかるものはすべて3間×2間と小規模なものである。柱間寸法は一定ではないが、S B 4188のみ6尺等間である。棟方向はほとんどが東西棟でS B 4188・4194・4195・4196・4204は東でやや南に振れ、S B 4190・4191・4199はほぼ方位にのり、S B 4203は東でやや北に振る方向性を示す。また、三者のうち前者は柱掘形が一辺0.7~0.4mの方形であるのに対し、後者は径0.3m前後の円形である。さらに柱掘形に含まれる土器から、前者のうちS B 4195を除くものは前II期の中でも古相を呈する斎宮跡土師器編年S K 3127出土土器並行期(前半)、その他は新相を呈する斎宮跡土師器編年S K 2650出土土器並行期(後半)のものと考えられる。また、ほぼ完全に重複する建物については、埋土の切り合い等からS B 4196→S B 4204、S B 4194→S B 4195の順が考えられる。

土塙にはS K 4221・4244・4248があり、いずれも小規模なもので土師器杯・皿・甕、須恵器杯・甕、灰釉陶器碗などが出土しているが、その量は多くない。

溝S D 4216は調査区北部で検出した幅0.3mの細長い東西溝で土師器、須恵器、灰釉陶器の小片が若干出土している。

井戸S E 4250は調査区南端で検出した3.4m×2.8mの楕円形に近い平面形を呈するものである。埋土の上面を鎌倉、室町時代の溝や近代の擾乱により切られる。深さは遺構面から4.3m、底部近くで湧水をみた。湧水面の高さは標高4.8mである。埋土は、第I層：暗茶褐色土、第II層：黄褐色土と暗茶褐色土の互層、第III層：暗灰色砂れき土、第IV層：暗灰褐色砂れきの4層

に大別でき、第Ⅰ層からこの時期の前半の土師器杯・皿類を主体とした遺物が整理箱17箱分出土した。第Ⅱ～Ⅳ層はあまり遺物を含んでおらず、第Ⅳ層下部を掘り込んだような状況で暗青灰色粘質土のつまた1.0m×0.9mの小規模な方形の掘形と、その内側に納まる木製の井戸枠を検出した。井戸枠は遺存高0.1～0.4mとその底部が残存するのみで、板が欠損する部分があったり土圧によりやや変形しているため正確な数値は出せないが、概ね0.5m×0.4mの方形で各辺に縦板を4～5枚ずつならべて組合わせ、さらに北東と南西隅の内側に角材を打ち込んで固定している。使用されている板材は幅8～17cm、厚さ1～3cmのもので材質は不明。この井戸枠内の埋土からは、平安時代前Ⅰ期に遡る少量の土師器杯類と自然木などが若干出土したにとどまり期待された木簡などは出土しなかった。

さて、SE4250の使用時期については井戸枠内および下層から出土している土師器杯類が前Ⅰ期に遡り得るものでこれらの土器を井戸廃絶直後か使用時のものと考えるならば、前Ⅰ期に井戸として機能していたものと推定される。上限についてはSE4250の位置が初期の主要な建物SB4186・4187の南正面にあたり、またSB4187・2361を一連の建物と考えるならSE4250と同時存在するとは考えがたいためこれらの建物が廃絶した後と考えざるを得ない。その後、井戸として機能しなくなった後、前Ⅱ期前半には多量の土器が投棄される土器溜めとなり完全に埋まつたようである。ただし、井戸全体の掘形に対し井戸枠が小さく、さらに南に片寄っている点、井戸枠が当初の物か疑問が残るが、掘形を完掘したところ井戸枠底部と井戸掘形底の高底差はほとんどなく、別の井戸の痕跡やそれを想定させる遺物も出土しなかつたことから一応前述のように理解しておきたい。

なお、以上の遺構のほかに前期のものであるがそれ以上の時期区分ができなかったものはSB4184、SK4240・4242、SD4222がある。SB4184は3間×2間の東西棟で柱間は桁、梁行ともに7尺等間である。

#### (VI) 平安時代中期の遺構

この時期に入ると遺構、遺物ともに少なくなる。掘立柱建物1、土塙1を検出したのみである。

掘立柱建物SB4198は調査区中央南寄りで検出した5間×2間の東西棟でE2°Nの方向性を示す。土塙SK4238はSB4198の北東で検出した長径2.1m、深さ0.3mの楕円形の土塙である。東半をSK4239に切られる。土師器、須恵器、灰釉陶器などが整理箱2箱分出土している。量的にはさして多くはないが良好な資料が少ないこの時期にあって比較的まとまった資料となろう。

#### (VII) 平安時代後期の遺構

掘立柱建物6、土塙3がある。

掘立柱建物には、S B 4182・4189・4192・4197・4201・4205がある。S B 4197は中期のS B 4198からやや西にずれて重複する位置で検出した5間×2間の東西棟である。規模、棟方向など、S B 4198と類似するので同一の建物の建て替えである可能性がある。そのほかは調査区北端のS B 4182をのぞいて調査区中央南寄りで検出している。全体の規模のわかるものは、3間×2間と小規模なもので南北棟、東西棟が混在する。その方向はS B 4189を除き方位から1°～2°振れる程度となる。柱掘形は、0.3～0.5mの円形を呈するものがほとんどである。これらの建物は後I期に属する。

土塙には、S K 4239・4234・4245がある。S K 4239はS K 4238の東側に重複して検出した2.5m×2.2m、深さ0.2mの隅丸三角形の土塙である。東山72号窯式の深楕をはじめ灰釉陶器、綠釉陶器、須恵器、土師器、製塩土器などが整理箱で2箱分出土している。S K 4245は調査区南西部で検出したもので百代寺窯式の輪花をもつ灰釉陶器楕・皿、黒色土器、土師器杯・皿・甕が出土している。

#### (VII) 鎌倉・室町時代の遺構

溝を検出したのみである。

S D 4214は調査区中央をほぼまっすぐに南北に貫通する幅1m前後、深さ0.2mの溝である。埋土に平安時代の土器も含むが山茶楕も出土しており、鎌倉時代前半に完没した溝と考えられる。S D 4213はS D 4214から直角に西へのびる溝でS D 4214と一連のものと考えられる。S D 4215は前述のS D 4214に平行し、すぐ東側で検出した南北溝である。南半では東肩にテラス状の段があり、あるいは2本の溝であるかもしれないが、埋土に差異がないため一応1本のものと考えた。埋土に平安時代の土器も含むが、天目茶楕などをも含むため室町時代に完没したものと考えられる。

このように平安時代末期には遺構がほとんどみられなくなったあと、鎌倉・室町時代には何らかの境界とも考えられそうな南北溝が存在したようで、この段階で区画溝に代表される平安時代の地割りの意識は消失したものと思われる。

#### (IX) その他の遺構

掘立柱建物S B 4225は調査区東部で検出した2間×2間の建物である。N 2° Wの方向性を示すが、柱掘形内に土器を含まないため時期決定し難い。掘立柱建物S B 4210は調査区南東部で検出した3間×2間の東西棟である。E 4° Nの方向性を示すが、柱掘形埋土には土師器甕の胴部片が含まれるのみで、時期決定できない。

第41次トレントン調査の南端で検出され、從来区画溝とされてきたS D 2360は、調査区南端に近代の擾乱が入っていたため、わずかに調査区東南でその一部を検出したのみである。しかも、その部分においても溝上面を切って近世の陶磁器を埋土に含む幅の広い溝が存在し、その下に

S D 2360の埋土が若干残存していたのみである。溝そのものの掘形も一定ではなく、かなり凹凸があり、埋土にも平安時代前期の土師器に加え平安時代末期の山茶椀をも含むもので、これらを層位的に識別することはできなかった。そのため、ここでは S D 2360を区画溝の可能性のある東西溝で、少なくとも平安時代前期と末期の2時期あるものと把握しておくにとどめておきたい。

#### (X) 遺物

調査区南端の近代の搅乱を除き、包含層および遺構から主に奈良時代～鎌倉時代各時期の遺物が整理箱約100箱出土している。以下、比較的良好な資料の得られた遺構の出土遺物について概述する。

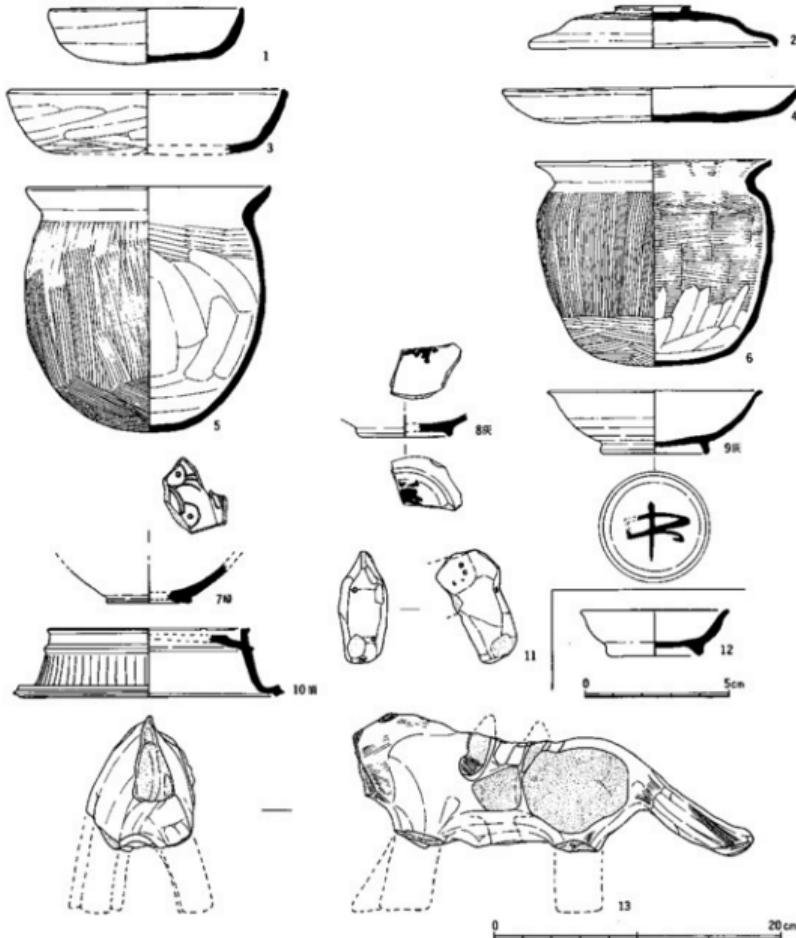
S K 2358は、第41次トレンチ調査でその一部が調査されているが、今回は土師器杯・皿・碗・甕・カマド・須恵器杯・甕などが整理箱1箱分出土している。土師器杯・皿は、口径20cm前後と大ぶりで、杯3は体部外面から底部までヘラケズリされている。甕5・6はくの字型に外反する口縁に、5はやや綫長で丸底、6は平底風の体部がつくものである。須恵器杯蓋2は弯曲する天井部に低い輪状のつまみのつくもので、天井部に2条の沈線がめぐる。これらは、奈良時代中期に位置付けられよう。

S K 4220出土土器は奈良時代後期に位置付けられる一群で土師器杯・皿・台付杯・高杯・甕・鉢・須恵器杯・甕・鉢などが整理箱3箱分出土している。土師器杯・皿は口径20cm前後のものに混じりやや小ぶりのものが存在する。また、底部と口縁の境が明瞭化しありb、c手法に加え、口縁部をヨコナテし底部をナデつけるe手法がみられるなど新しい様相が目立つ。鉢26は口径20.8cm、器高27.6cmで肩が張り、底部はやや平底になるもので、体部外面下半は回転ヘラケズリされる。

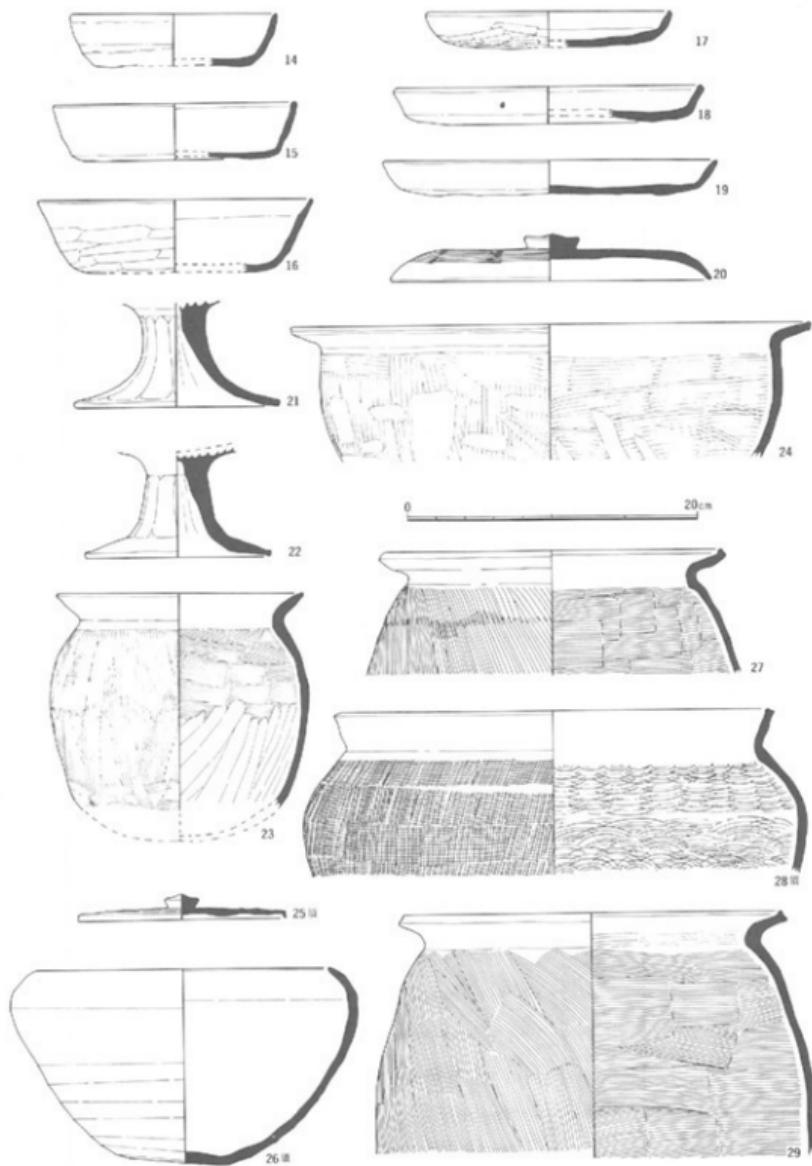
S K 4200出土土器は土師器杯・皿・碗・高杯・甕・製塙土器・須恵器杯・甕などが整理箱に8箱あり、その大半は土師器杯・皿類である。また、土塙埋土中には、炭化木、焼土も含んでいた。土師器杯・皿はすべて器壁が厚く、そのほとんどがe手法で調整され、b手法のものが若干混じる。杯Aは口縁部の立ち上がりが急で口端が内側にまき込まれるものが多く、口径13cm代と15～16cmのものの二者に分かれる。杯Bは口径が12cm前半、13cm代、16cm代のものに分かれ、後者は底部をヘラケズリし、内面に暗文の施されるもの（34・35）がみられる。皿Aは口径16～17cmのものがほとんどである。断面が弓状になる皿B 50・51は口縁端部が丸くおさまり面をなさない段階のもので、口径は20cm前後と大ぶりである。これらに混じり内弯気味に立ち上がる奈良時代的な口縁部の皿Cも若干みられ、内底部に螺旋状の暗文の施されるもの（53）もある。また、52・54は底部に墨書きがあり、52は「十八」、54は「大」と判読できようか。土師器甕27・29は長胴甕で口縁部はくの字型に外反し、端部は斜上方につまみ上げられる。これら土師

器に対し須恵器の出土量はわずかであるが、杯蓋は小さなものから大きなものまで各種あり、中に天井部が弯曲するいわゆる照りかえりのあるもの(58)も混在する。これらの土器は平安時代初期の指標遺構SK1445出土土器並行時期に位置付けられよう。

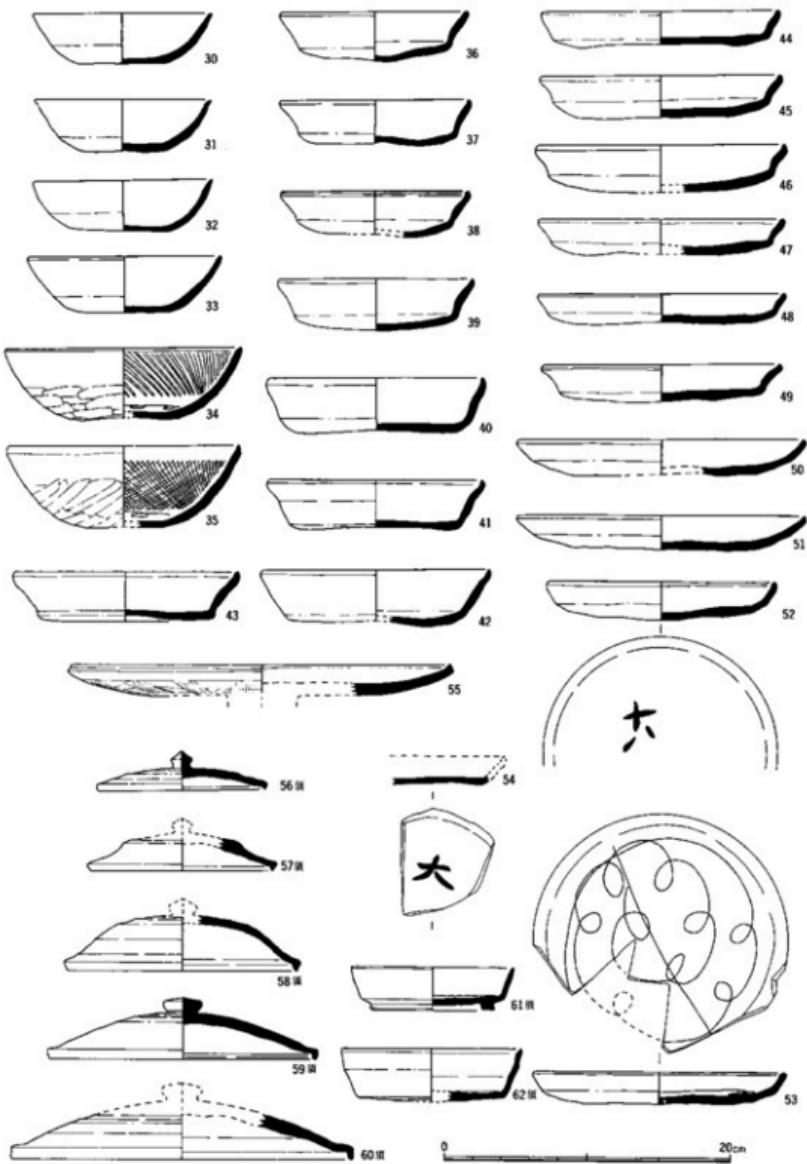
SE4250出土遺物には、土師器杯・皿・蓋・台付皿・高杯・甕・瓶・小瓶・カマド、製塩土器、須恵器杯・高杯・甕、灰釉陶器碗・皿・平瓶、綠釉陶器碗・皿、砥石、瓦など多種多様遺物が



第23図 第68次出土遺物 SK2358; 1~6、SD4216; 8、SK4224; 12  
SD2357; 13、包含層; 7+9~11 (12のみ1:2)



第24図 第63次出土遺物 SK4220; 14~26、SK4200; 27~29



第25図 第63次出土遺物 SK4200; 30~62

整理箱17箱分ある。これらのうち井戸枠内から出土したものは、土師器杯（88）と若干の甕胴部片のみであり、井戸枠外から土鍾（106・107）、井戸枠直上の第IV層から土師器（86・87・89）などが出土しているのみである。遺物が少ないため明確な時期決定はし難いが、88・89は器壁もやや厚く、やや深い形態でヨコナデの範囲もまだ広いことから平安時代前Ⅰ期の所産と推測され、S E 4250の使用時期、あるいは庵施直後の時期をこの時期に考えたい。その他ほとんどすべての遺物は、井戸埋土第I層からの出土である。

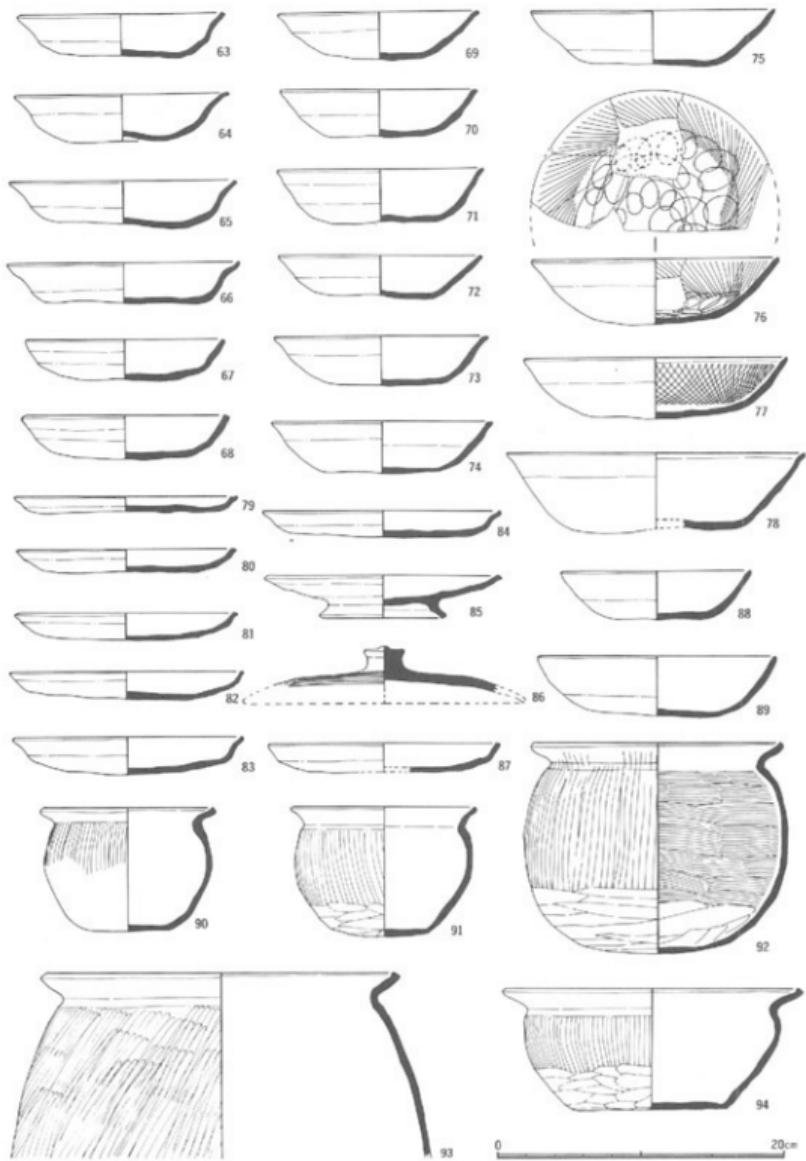
土師器杯Aは器壁がやや薄くなり口縁部は外反したまま内側にまき込まない形態のもので、口径が14cm前後、15cm前後、16cm前後のものがある。杯Bは口縁部が外傾しやや浅くなりヨコナデの範囲も狭くなりはじめる。口径が14cm前後、15cm前後、16cmを越えるものに分かれ、中には20cmの大型のものも若干残存する。これらのうち、前二者には口縁端部に水平かやや内傾する面をもつものが目立つ。やや大型の76・77には暗文が施される。また、これら杯の中に平らな底部から口縁部が弯曲して立ち上がり、そのままのびe手法で調整されるもの（67・68）がある。大別すれば、杯Aの範疇に入るものであろうが、口縁部の状況の相異から系統を異にするものであるかも知れない。皿はA・Bともに器高が低く扁平なものが多くなるが、83のようにやや深いものも残存する。口径は皿Aが16cm前後、皿Bが14~15cmのものが多い。

甕は長胴甕が少なくなり、かわって体部が球形に近いもの（90~92）が主体的になる。いずれも、平底気味でやや横に広がる球形の体部にくの字型に外反する口縁部のつくもので、体部外面上半をやや粗い縱方向のハケメ調整、下半をヘラケズリ、内面上半を横方向のハケメ調整、下半をヘラケズリする。口径が12cm前後、13cm前後、16~17cmに分かれ。96は小瓶状のもので頸部以上を欠く。器壁は厚く、残存が悪いため明確ではないが外面下半はヘラケズリされているようである。一応土師器としたが、あるいは綠釉陶器の素地の可能性もある。

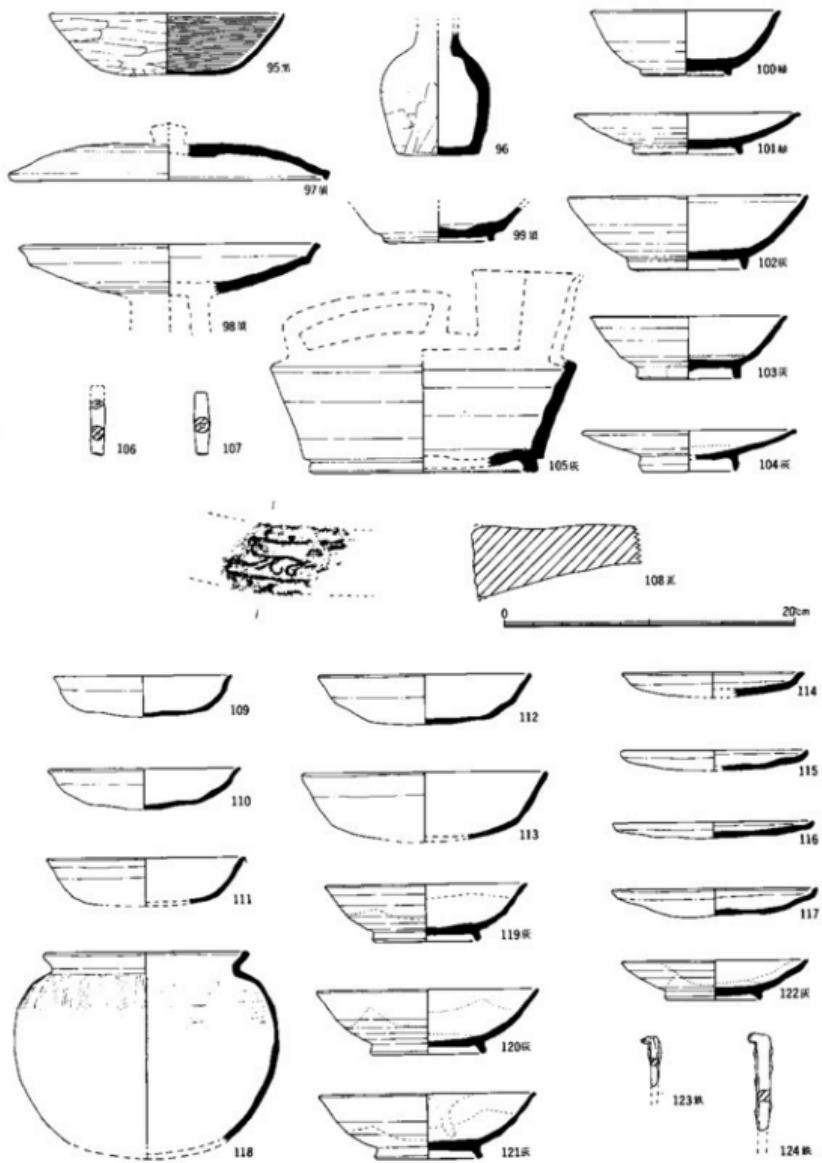
95は黒色土器A類で器面が荒れているため調整は明確ではないが、内面に細い圓線状のミガキが施され口縁端部に一条の沈線が巡る。

灰釉陶器には、角高台（103）と三日月高台（102・104）がつくものがあり、103・104は直接重ね焼きされるが、102にはその痕跡がない。102は全面に、103は体部内外面および底部内面中央に、104は体部内面のみに施釉される。綠釉陶器100・101はいずれも硬質の素地に淡緑色に発色する釉が掛けられる。これら井戸埋土第I層の一群の土器は平安時代前II期でもやや古相のS K3127並行期に位置付けられよう。

以上の遺物に混入し奈良時代後期の均正唐草文軒平瓦の断片（108）が出土している。遺存が悪くかなり摩滅しており、また小片のため断定はできないが、伊勢国分寺などとの関係が指摘されている鈴鹿市川原井瓦窯出土の均正唐草文軒平瓦と同范の可能性がある。また伊勢神宮寺の可能性が指摘される度会町逢鹿瀬廃寺出土軒平瓦の中に近似するものがみられる。この瓦が



第26図 第63次出土遺物 SE4250; 63~94



第27図 第63次出土遺物 SE4259; 95~108、SK4238; 109~124

どういう目的で斎宮に持ち込まれたかは判らないが、伊勢国司の影響下にあったと推測される瓦窯および伊勢神宮と係りのある神宮寺との関係は興味を引くところである。

S K 4238出土遺物は斎宮跡土師器編年の指標遺構 S K 2650より新しく S E 2000以前に位置付けられるもので、土師器杯・皿・甕、灰釉陶器椀・皿、須恵器甕、鉄釘などがある。土師器杯Aは口径12~14cmで器壁が薄く白っぽい胎土のものが目立ち、口縁部の外反も弱く杯Bと区別し難いものもある。杯Bも器高が減じ浅いものが多く、中に大ぶりで口縁部がやや角をなしながら外開するものもみられる。皿は、皿Bのみとなりかなり扁平なものが多い。中に平らな底部から口縁部のみがつまみあげられるもの(115~117)も出現する。おそらく皿Bの退化形態であろう。甕118は短くくの字型に外反する口縁の端部が内側に折りかえされて上面に面を持つ形態のものである。共伴する灰釉陶器は体部と底部の境の外側に外開する高台がつくもので回転糸切り痕が残り、つけかけにより施釉される。折戸53号窯式のものであろう。

その他の遺物として、7は綠釉陰刻花文陶器の底部の破片で内面の花文は珍しい種のものである。8・9はともに灰釉陶器で墨書きがある。8は底部内外面に同じ文字が書かれ「美」と判読でき、書かれた位置が上方に偏るところから下方にもう一字書かれていた可能性がある。9は「中」と判読できる。10は復元径14cmの円面鏡である。脚部外面にはヘラ書きの沈線が間隔をおいて描かれる。なお残存する脚端部は焼き歪みのため外方に弯曲している。11は土馬の頭部と考えられるもので表面が荒れているが細い竹管による円形文で目などを表現している。土馬13は頭部と四足を欠損するが、現在長28cmと比較的大型のものである。胴部は中空となっており腹部中央に3.4cm×2.2cmの楕円形の穴があけられる。また背部には粘土紐によるくらの痕跡が残る。残存する部分から頭部は扁平、四足は外方に開いてつけられるものと考えられる。なお胴部は S D 2357の上面から、尾部は調査区北西部の包含層から出土し接合したものである。12は口径5.1cmのミニチュアの土師器杯である。平安時代初期の土塙 S K 4224から出土しているが形態的には奈良時代の様相を残す。炊さん具が多いミニチュア土器にあって斎宮跡では供膳具の初例である。

#### (xi) まとめ

今回の調査は想定されている区画の南辺を対象としたが、同じ区画の西部で第51次および先述の第61次調査を行っているためこの区画の様相が次第に明らかになってきた。今回検出した遺構は奈良時代から室町時代の各期のもので掘立柱建物33棟をはじめ塙、土塙、溝、井戸などがある。

奈良時代の遺構としては中・後期の土塙がある。これらはいずれも生活廃棄物を投棄したものと考えられ、今回の調査では確認していないが、おそらく近辺にこれらの土塙が形成された時期の建物群が存在するであろう。このことは近年史跡指定範囲東部の調査を重ねるなかで、從

来史跡指定範囲西部にあった奈良時代の斎宮が中・東部に移動する時期について奈良時代末にまで遡り得るという指摘を傍証するとともに、すでに奈良時代中期には何らかの人々が生活していた可能性を示唆するものであろう。

一方、掘立柱建物は平安時代初期に至り 5間×2間の大型建物を含む一群として出現する。建物方向は方位にのるものも存在するが、主要なものは西でやや南に振る区画溝の方向に一致し、この段階で今回の調査地も明らかに斎宮宮域内に取り込まれ計画的に建物が配置されたものと考えられる。なお、この時期には先述のごとく区画の西半では 5間×2間の建物が計画的に並んで配置される状況が確認されており、今回の建物と直接の関係は不明であるが、この区画に大型の建物が建ち並ぶ状況が想像される。

その後、前Ⅰ期以降後期に至るまで調査区中央西寄りには建物が継続して存在するのに対し、調査区北および東部にはあまり建物がみられず、建物の分布に片寄りが生じている。このことから少なくともこの期間調査区内においては、中央西寄りは建物が建ち並ぶ部分、北および東部は基本的には空閑地という土地利用意識の差異があったのではないかと推測される。また、その中で前Ⅱ期前半には建物方向が東でやや南に振るものが目立ち、若干時期ははずれるが第51・61次調査でも同じ状況が指摘されている。この時期に区画溝に代表される地割りと異なる建物配置が行われたものであろうか。

また、調査の主たる目的の一つである区画溝については先述のごとく明確には把握できなかつたが、平安時代前期と末期の2時期の溝の存在が推測される。ただし、これまでの調査例では区画溝から建物が建ち始める部分まで10m前後の間隔がみられたが、今回は数mで建ち始めておりやや様相を異にしている。

一方、これまで斎宮跡における井戸枠の出土例は第52次調査のS E 3260の木製の円形くりぬき枠以外は曲物を使っていた可能性のあるものが若干あるに過ぎない。このような中で今回検出した方形縦板組の井戸枠は小規模なものとは言え板組井戸枠として斎宮跡初例であり、今後の井戸の調査に期待が持たれる。

出土遺物では、土馬が注目される。これは腹部中央に穿孔のあるもので同様に穿孔のあるものとしては度会郡玉城町カリコ遺跡出土の土馬がある。カリコ遺跡例の場合胴部は中空とはならないが、土馬とともに土師質の円筒状の土製品が出土しおそらく腹部の穴に棒状のものを突き刺し、その下端を円筒状の製品に差し入れて使用されたものと推測される。今回出土の土馬も腹部の穴に棒状の物を突き刺し、これを地面に打ち立てるなどして使われたものであろう。こうした使用法は木製馬のそれと共通したものである。また、これとは別個体の土馬頭部が一点出土しており、今回計2点の土馬が出土したことになる。斎宮跡では19・20例目の出土である。これまでの斎宮跡での土馬の出土状況は、史跡指定範囲西部の古里地区を中心に西半に集中し東部

ではわずかに第29次調査のS K1486から尾部が出土したに過ぎなかった。今回の2例出土は土馬の出土が西半に片寄るものではなく、当時、東半でも土馬が使用、投棄されていたことを示すものであろう。

祭祀に深い係りをもつ斎宮跡でも土馬をはじめとした祭祀遺物が徐々にその出土数を増している。今後、これらの祭祀遺物そのものの性格の解明と、祭祀遺物からの斎宮の祭祀へのアプローチが期待されるところである。

## VII 第58次調査

(個人住宅新築等の現状変更緊急調査)

### 第58-1次調査 6AFK-C-D (鈴木盛土)

昭和59年度末に第53-15次調査で東半の調査を行った同一申請地の西半残り部分(186m<sup>2</sup>)を調査した。調査の結果、第53-15次調査で検出した平安時代前期のS B3871・3872の西半部を確認した。いずれも方形の柱掘形をもち、N3°Wを示す南北棟で3間×2間の桁行6.5m、梁行4.4mの同規模の建物であった。S B3871はS B1440の棟通りに北妻柱通りを描え、S B3872はS B1441の南側柱通りに北妻柱通りを描えて直交する位置に建てられており、S B1440・1441に従属性の性格のものと推測される。同時期の塀S A4264はE1°N、S A4261はN4°Eで、付近の建物との関連は明確ではない。これより西の建物は、いずれも柱の掘形が円形の径30~40cm程度のもので、S B4255・4256は遺物より平安時代後期の建物と考えられる。また、S B4260は遺物は出土しなかつたが、建物の方向がN3°WでS B4256と揃うものであり、おそらく平安時代後期に属する建物であろう。遺物としては、土師器、須恵器、灰釉陶器、綠釉陶器、黒色土器などがあり、なかには包含層から「文」の墨書のある黒色土器、底部外面に「九」のへら書きのある綠釉陶器がある。

### 第58-2次調査 6AFH-N (三村宅地)

中町集落北部を南北に走る、通称木戸の世古と呼ばれている道路に面する場所で50mについて調査した。厚さ50cmほどの盛土をユンボで耕土したのち、調査を実施したが調査区の大部分が既に土取りされていることが確認されたので、全面発掘をやめ幅2mのL字形に曲がるトレチ調査に変更した。遺構面(標高9.4m)は調査区の西端でわずかに認められたのみで、道に面する部分は土取りされており、遺構、遺物とも検出できなかった。

### 第58-3次調査 6ACM-N (斎宮小学校校庭整備)

斎宮小学校の校庭整備にともなう事前の発掘調査である。学校用地18,825m<sup>2</sup>のうち、昭和52年の第15次調査以来既に、4,295m<sup>2</sup>にわたって調査が行われており、奈良時代~室町時代までの各種遺構が検出されている。今回の調査は小学校用地内の広い範囲にわたり、21ヶ所のトレチを設定して合計203m<sup>2</sup>について実施した。

バックネット・防球ネット設置予定部分(第30図A~C)は校庭東南隅にあたる。検出した主な遺構は北部と西部に限られ、中央のバックネット部分については、90~110cmの深さまで搅乱されて遺構は残存していない。北部では鎌倉時代前半の土塙S K4266と室町時代以降の東西溝S D4267・4268が、また、西部には鎌倉時代前半の南北溝S D4270のほか、時期不明の土塙

S K 4269を検出した。出土遺物は、鎌倉時代土師器鍋、山茶椀、室町時代以降の土師器鍋・皿、陶器鉢・皿などがある。校門設置予定部分（第30図D・E）は東部では深さ80cmまで搅乱を受けしており、遺構は残存しない。西部（E地区）では一部搅乱されているが、その他の部分でも遺構は残存しない。出土遺物はない。

校庭南側溝設置予定部分（第30図F～J）については、幅1.2mのトレンチを6ヶ所東西に設定した。このうち遺構を検出したのはH地区とG地区の両トレンチで、H地区では奈良時代後期の土師器杯・皿・甕・高杯と鎌倉時代後半の常滑壺が出土した土塙S K 4271が、G地区では時期不明の小穴と土塙を検出した。校庭西側溝設置予定部分（第30図K～M）では3ヶ所設定したトレンチのうち、M地区では奈良時代後期の土師器杯・甕が出土する土塙S K 4272を検出した。小範囲のため明らかではないが、あるいは竪穴住居になるかもしれない。

校庭北側溝設置予定部分（第30図N～R）では5ヶ所設定したトレンチのうち東端部分のR地区では幅90cm、深さ50cmの溝S D 4273を検出した。この溝は昭和52年度に実施した校舎部分の調査でみつかっている円形周溝を切って南に延びる南北溝の一部と考えられる。N～Q地区からは土塙、小穴が検出されているが、時期は不明である。このうちP地区中央部の扁平な自然石を置いた穴は、鎌倉時代前期の建物の柱掘形の可能性がある。出土遺物としては、奈良時代後期の土師器杯・甕、鎌倉時代檣り鉢、室町時代土師器鍋が包含層から若干出土した。体育館西側溝設置予定部分（第30図S～U）で検出した遺構は井戸1、溝1のほか小穴が多数あるが、柱掘形と考えられるものは少ない。井戸S E 4275は径約3mの比較的大型の井戸で、鎌倉時代前半の山茶椀、土師器鍋・皿、白磁が出土した。他の遺構の時期は明らかではない。

#### 第58-4次調査 6 A B L-A (小家盛土)

調査地は、宮城西部の標高13.8mをはかる台地縁辺部であり、柴川の沖積平野に面している。かつて、三彩陶器が出土した第30次調査区より西へ約200m隔てた地点である。L字状のトレンチを設定して190m<sup>2</sup>にわたり調査を実施した。調査の結果、東部からは弥生時代前期の土塙S K 4279・4278、弥生時代中期の竪穴住居S B 4283、飛鳥時代の壠S A 4281・4282、掘立柱建物S B 4280、また、西部から時期不明の掘立柱建物S B 4284を検出した。竪穴住居S B 4283は、調査区外へ広がるため、全容は明らかでないが、東の一辺は3.5mで方形を呈するものと思われ、弥生時代中期の壺の破片（口縁部）が出土しており、この時期の竪穴住居と思われる。台地端部からおよそ50m東へ入った調査区東端部で検出した南北方向3条の柱列については、ここでは一応西側にある建て替えられた2条の柱列を壠とし、東へ4.5m隔てて平行する大型柱列を掘立柱建物とした。これら3者の時期については、S A 4282の柱掘形から立ち上がりのある小型の杯身のほか、土師器杯・甕の小片が出土しており、7世紀中頃～8世紀中頃までの広い時期を与えるをえない。また、これら3つの柱通りの方向がN1°Eとよく方位にのることが注目さ

れる。

#### 第58-5次調査 6 A D Q-Q (町道側溝)

調査地は、近鉄彦宮駅の南側から旧参宮街道とを結ぶ町道で、排水路部分22m'について調査を実施した。遺構検出面は、北部で0.8m、旧参宮街道に面する南部では相当の整地層があり1mに達する。調査地区が幅70cmと狭いため建物としては、平安時代後期の建物1棟(S B4286)を確認できたにとどまる。他には、平安時代前期の土塙S K4288、後期の土塙S K4287・4289、溝S D4290、室町時代以降の溝S D4291を検出している。S D4291は東西溝で、幅2m以上、深さ0.7mあり、溝の埋土中より室町時代以降の土器が少量と木片が出土した。旧参宮街道とはば重複しているため、全容は明らかではない。包含層と建物としてまとまらなかった柱穴から縁釉陶器2点が出土している。

#### 第58-6次調査 6 A D R-V (西山倉庫)

調査地は、牛葉地区的旧参宮街道の南側で、史跡指定範囲の南辺に位置し、昭和59年度に実施した第53-11次調査の北西に隣接する標高12.3mの畠地である。第53-11次調査では、奈良時代の掘立柱建物、竪穴住居などが確認されている。調査面積は552m'と広いが調査区東半を中心とする大半の部分は、近世～近代陶磁器、瓦などを多量に含む大規模な擾乱土塙が広がっており、遺構はほとんど削平されていた。検出した遺構は奈良時代の土塙S K4293、平安時代末期の溝S D4294、時期不明の掘立柱建物S B4295がある。遺物としては、S K4293、S D4294に伴う奈良・平安時代の土器のほか、縁釉陶器1点、また、前述した近世～近代の多量の遺物がある。

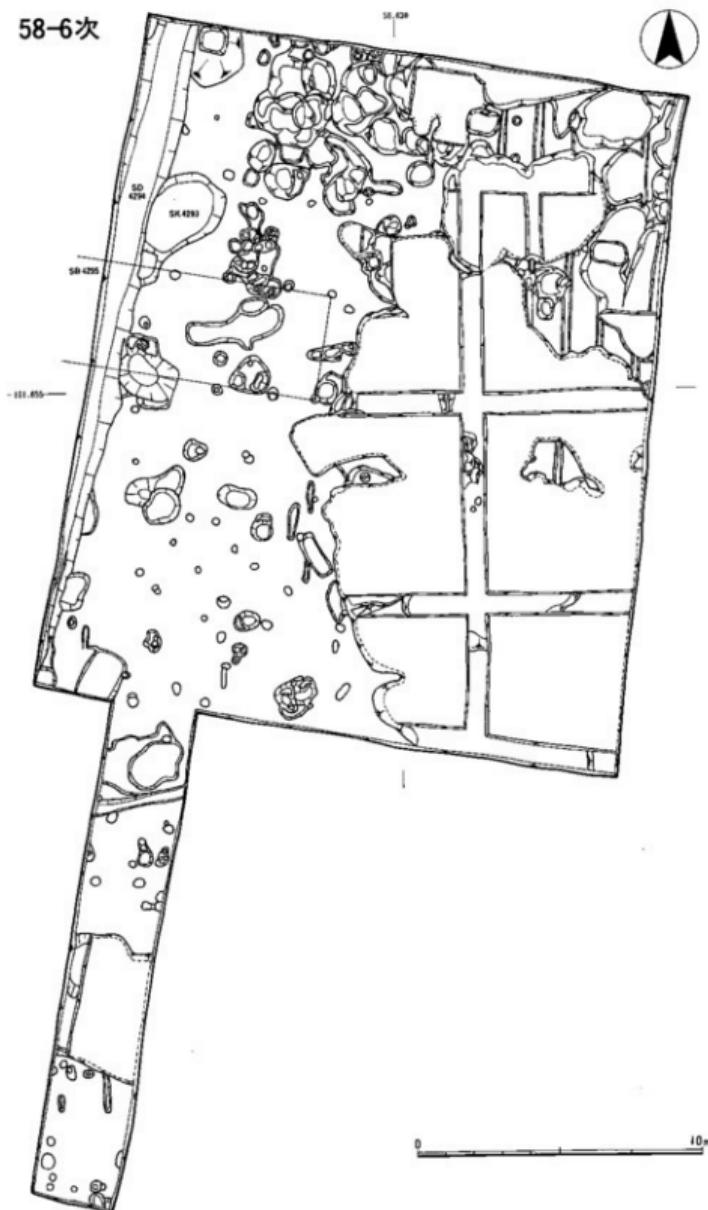
#### 第58-7次調査 6 A G S-G (山路宅地)

調査地(標高9.9m)は、中町地区的旧参宮街道の南側で、これまで、あまり調査の行われていない部分で幅3.5m、南北19mのトレンチを設定し、66m'について調査を実施した。検出した遺構は掘立柱建物S B4298、鎌倉時代の土塙S K4299・4301、室町時代の土塙S K4303と近世の溝S D4302がある。S B4298は、柱穴内に遺物を含んでいなかったが、S K4299・4301に切られているため鎌倉時代以前のものと考えられる。

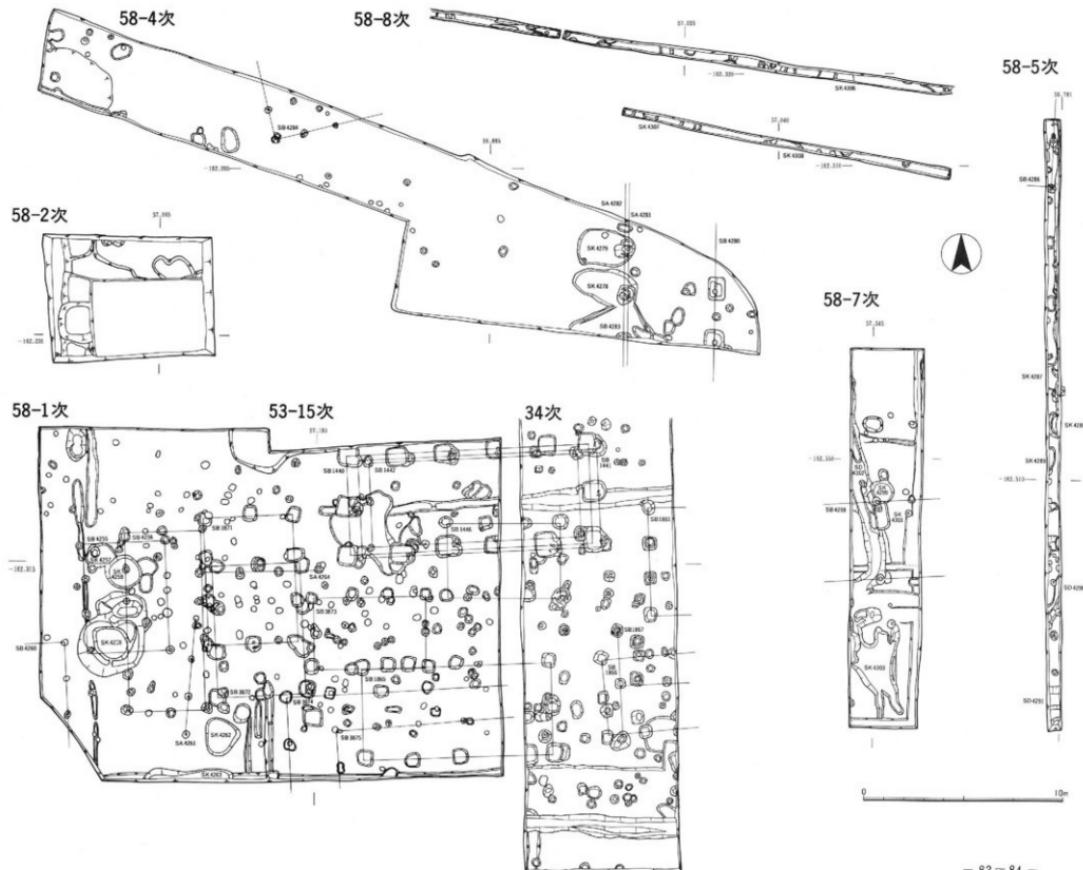
#### 第58-8次調査 6 A B M-A (近鉄保全柵)

近鉄の保全柵新設に伴う事前調査で、県道南藤原・竹川線のすぐ西側の部分である。調査区が幅30cm前後と狭いため、検出した遺構の性格などについては不明の点が多いが、調査面積に比し、多くの遺構を検出した。主な遺構としては、弥生時代後期の土塙S K4308、飛鳥時代の土塙S K4307の他、室町時代の土塙S K4306がある。

58-6次

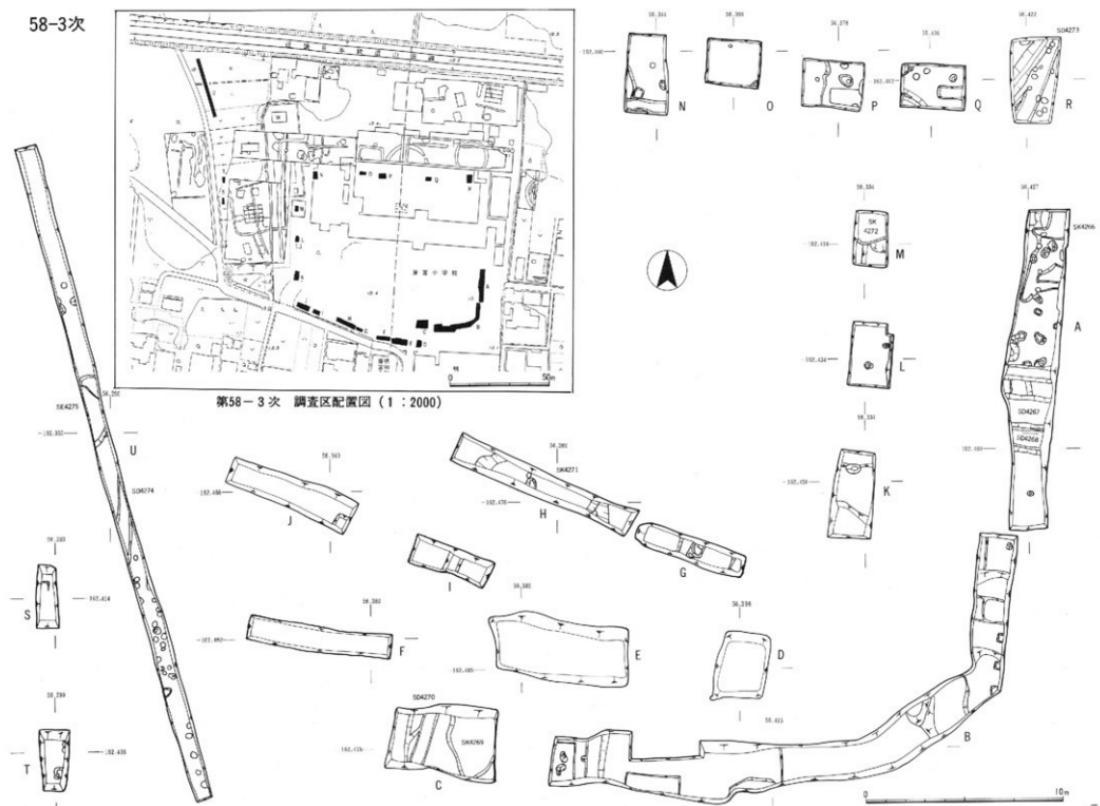


第28図 第58次造構実測図 (1 : 200)



第29図 第58次造構実測図 (1:200)

58-3次



第30図 第58次遺構実測図 (1:200)

## VIII 調査事務所要覧

### I 調査概要

(1) 調査事業	13地区	7,920m <sup>2</sup>
ア 計画発掘調査	5地区	
第59次調査	広頭地区	1,390m <sup>2</sup>
第60次調査	東加座地区	1,570m <sup>2</sup>
第61次調査	西加座地区	1,310m <sup>2</sup>
第62次調査	東加座地区	1,140m <sup>2</sup>
第63次調査	西加座地区	1,250m <sup>2</sup>
イ 緊急発掘調査(個人住宅新築等)		
第58-1次～8次調査		1,260m <sup>2</sup>

### (2) 普及事業

#### ア 現地説明会の開催

##### (ア) 第59次発掘調査現地説明会

日時 昭和60年6月9日 11時  
 場所 明和町斎宮字広頭地内  
 調査面積 1,390m<sup>2</sup>  
 調査期間 5月7日～7月18日  
 報告 山沢義貴主査  
 参加人員 約200名

##### (イ) 第60次発掘調査現地説明会

日時 昭和60年9月16日 10時30分  
 場所 明和町斎宮字東加座地内  
 調査面積 1,570m<sup>2</sup>  
 調査期間 7月15日～10月18日  
 報告 杉谷政樹主査  
 参加人員 約170名

##### (ウ) 第61次発掘調査現地説明会

日時 昭和60年11月3日 11時  
 場所 明和町斎宮字西加座地内  
 調査面積 1,310m<sup>2</sup>  
 調査期間 9月17日～12月2日  
 報告 倉田直純主査  
 参加人員 約180名

##### (エ) 第62次発掘調査現地説明会

日時 昭和61年2月2日 10時30分  
 場所 明和町斎宮字東加座地内  
 調査面積 1,140m<sup>2</sup>  
 調査期間 12月11日～2月24日  
 報告 泉 雄二技師  
 参加人員 約220名

#### (ア) 第63次発掘調査現地説明会

日時 昭和61年2月2日 10時30分

場所 明和町斎宮字西加座地内

調査面積 1,250m<sup>2</sup>

調査期間 12月11日～2月25日

報告 杉谷政樹主査

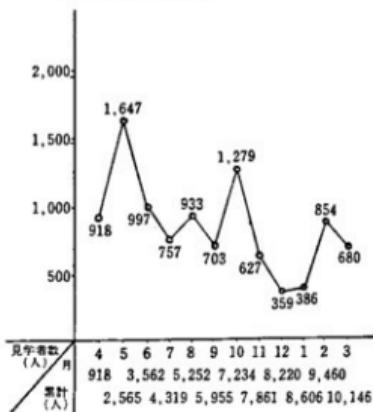
参加人員 約220名

#### イ 調査報告講演

(ア) 1月5日 三重大学原始古代史部会

倉田直純主査

#### ウ 資料展示室見学者数



#### エ その他

##### 斎宮講演会

日時 昭和60年11月3日 午後1時30分

場所 明和町中央公民館講堂

演題 「古代の国民的ロマンとしての  
帝王」

講師 朝日新聞編集委員 斎下彰治郎

## II 予算

斎宮跡保存対策費 69,263千円

(単位:千円)

区分 事業名	歳出	財源内訳		備考
		県費	国費	
発掘調査費	36,975	18,975	18,000	発掘面積約6,600m <sup>2</sup>
史跡公有化補助金	29,193	29,193	—	公有化面積約0.96ha
保存改良事業	500	500	—	
維持管理	2,595	2,595	—	
計	69,263	51,263	18,000	

## III 組織規定

三重県教育委員会事務局組織規則抜粋

(昭和43年4月1日)  
(教育委員会規則 第6号)

最終改正 昭和54年3月31日

教育委員会規則第6号

### 第三章 出先機関の組織

(教育事務所及び斎宮跡調査事務所の設置等)

第12条 事務局の事務(県立学校関係事務を除く。)を分掌させるため、出先機関として教育事務所及び斎宮跡調査事務所を置く。

3. 斎宮跡調査事務所の名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	位 置
三重県斎宮跡調査事務所	多気郡明和町

(分掌事務)

第14条 3. 斎宮跡調査事務所においては次に掲げる事務をつかさどる。  
一、斎宮跡の発掘並びに遺構及び出土品の調査研究に関すること。  
二、斎宮跡に関する各種資料の収集調査及び研究並びに公開展示に関すること。

三、その他斎宮跡に関すること。

附則 (昭和54年3月21日、教育委員会規則第6号抄)

この規則は、昭和54年4月1日から施行する。

## N 職 員

職	氏 名
所長	佐々木 宣明
主査	山沢 義貴
主事	倉田 直純
主事	杉谷 政樹
技師	泉 雄二
調査補助員	田中 久生
事務補助員	刀根 やよい
"	坂 真弓美
"	松田 早苗
"	若林 真登

## V そ の 他

(1) 斎宮跡調査指導委員

○ 設置要綱

### 1. 設 置

国史跡斎宮跡の調査と保存のための整備にかかる事業の円滑な推進を期するため、三重県教育委員会事務局に斎宮跡調査指導委員(以下「委員」という)を置く。

### 2. 所掌事務

委員は、国史跡斎宮跡の調査、保存のための整備について、三重県教育委員会教育長の求めに応じて次の事項を指導・助言する。

- (1) 当史跡の遺構の調査、検討に関すること。
- (2) 当史跡の遺物の調査、検討に関すること。
- (3) 当史跡の文献の調査、検討に関すること。
- (4) 当史跡の環境整備の計画、検討に関すること。
- (5) その他、当史跡の調査、保存のための必要事項に関すること。

### 3. 定 数 等

- (1) 委員の定数は、10人以内とする。
- (2) 委員は、考古学、歴史学、建築史学などに専門的知識を有する者のうちから三重県教育委員会教育長が委嘱する。

#### 4. 任 期

任務が完了するまでの間とする。

#### 5. 会 議

会議は、必要に応じ三重県教育委員会教育長が招集する。

#### 6. 座 務

会議の座務は、三重県教育委員会事務局文化課において処理する。

#### 7. そ の 他

この要綱に定めるもののはか、委員に関し必要な事項は、三重県教育委員会教育長が定める。

#### 附 則

この要項は、昭和54年10月19日から施行する。

#### ○調査指導委員

氏 名	専 攻	現 職
福山敏男	建築史	(国)文化財保護審議会専門委員
服部山藏	考古学	(県)文化財保護審議会委員
久徳高文	国文学	椎山女学園大学教授
坪井清足	考古学	奈良国立文化財研究所長
門脇祐二	古代史	京都府立大学教授
柏崎彰一	考古学 陶磁史	名古屋大学教授
早川庄八	古代史	名古屋大学教授
渡辺 寛	古代史	皇學館大学助教授

## 昭和60年度所内日誌

自 昭和60年4月1日  
至 昭和61年3月31日

月 日	内 容
4月15日	斎宮跡出土土器特別展（4月15日～5月14日）
19日	環境整備基本構想（試案）検討会……吉田山会館
20日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町中央公民館
23日	第58-1次発掘調査開始（盛土）
5月4日	第58-1次発掘調査完了
9日	第59次発掘調査開始（広頭地区）
11日	博物館問題について協議（県教委・調査事務所）
18日	斎宮跡地権者の会（全体会）……明和町中央公民館
〃	第58-2次発掘調査開始（住宅新築）
23日	第58-2次発掘調査完了
24日	斎宮跡地権者の会（全体会）……明和町中央公民館
6月9日	第59次発掘調査 現地説明会（山沢主査報告）
〃	第2回斎王まつり
14日	東海三県埋蔵文化財担当者会議……三重県教育文化会館
18日	文化振興斎宮跡保存促進三重県議員連盟へ陳情（斎宮跡へ県立博物館の設置要望）……明和町
20日	三重県議会議長、県教育長へ陳情（斎宮跡へ県立博物館の設置要望）……明和町
27日	三重県文化審議会専門委員会……吉田山会館
7月1日	斎宮跡地権者の会（全体会）……明和町中央公民館
7日	斎宮跡保存啓発事業（浜松市伊場遺跡・市立博物館視察、明和町各界代表）
15日	昭和60年度埋蔵文化財研究生発掘調査指導（神殿遺跡 9月中旬まで）
16日	第60次発掘調査開始（東加座地区）
18日	第59次発掘調査完了
26日	文化庁主任調査官 斎宮小学校現状変更指導
27日	第58-3次発掘調査開始（斎宮小学校校庭）
29日	斎宮跡保存啓発事業（体験発掘 29～30日 明星小学校6年）
8月3日	第58-3次発掘調査完了
10日	斎宮跡保存啓発事業（文化財講座 講師 国学院大学 吉田恵二氏）
22日	斎宮跡調査指導委員会……明和町役場会議室
27日	斎宮跡に関する府内課長会議……吉田山会館
30日	斎宮跡環境整備基本構想（試案）説明会……三重県松阪府舎会議室

月 日	内 容
9月 5日	斎宮跡整備に係る協議（三重県・明和町）……明和町
16日	第60次発掘調査 現地説明会（杉谷主事報告）
17日	第61次発掘調査開始（西加座地区）
24日	三重県議会（第3回定例会）で斎宮跡の歴史博物館について一般質問
〃	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町中央公民館
30日	知事に陳情（斎宮跡へ県立博物館の設置要望）……明和町
10月 3日	大規模遺跡調査五県会議……斎宮跡調査事務所
17日	玉城町上黒土遺跡実測指導（杉谷主事）
18日	第60次発掘調査完了
11月 2日	町民文化祭に縄文花文陶器等展示……明和町中央公民館
3日	斎宮跡保存啓発事業……斎宮跡講演会「古代の国民的ロマンとしての斎王」講師 朝日新聞東京本社編集委員 輪下彰治朗氏……明和町中央公民館
9日	第5回中世遺跡研究集会に参加（杉谷主事）……草戸千軒町遺跡調査研究所
21日	遺跡環境整備担当者会議……福岡県
29日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町中央公民館
12月 2日	第61次発掘調査完了
3日	副知事斎宮跡現地視察
6日	明和町寺垣内遺跡遺構測量指導（倉田主事）
11日	第62次発掘調査開始（東加座地区）
〃	第63次発掘調査開始（西加座地区）
13日	斎宮跡資料館について協議（三重県・明和町）……明和町
16日	知事・県教育長へ陳情（斎宮跡に県立博物館の設置要望）……明和町
20日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町中央公民館
1月 16日	第58-4次発掘調査開始（盛土）
24日	斎宮跡調査指導委員会……明和町役場会議室
30日	文化庁指導監査
31日	文化振興斎宮跡保存促進三重県議員連盟の視察（奈良県立考古博物館・今井町等）
2月 1日	斎宮跡保存啓発事業（文化財講座 講師 奈良国立文化財研究所 金子裕之氏）
2日	第62次・第63次発掘調査 現地説明会（泉技師・杉谷主事報告）
6日	第58-4次発掘調査完了
〃	県教育長へ陳情（斎宮跡に県立博物館の設置要望）……明和町
12日	明和町議会全員協議会で斎宮跡整備基本構想（試案）を説明……明和町議会
17日	三重県文化審議会……吉田山会館

月 日	内 容
2月19日	三重県埋蔵文化財展に斎宮跡出土品展示……伊勢シティプラザ 知事に陳情（斎宮跡に県立博物館の設置要望）……明和町
20日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町中央公民館
26日	第58-5次発掘調査開始（町道側溝）
"	第58-6次発掘調査開始（農業用倉庫新設）
28日	第58-5次発掘調査完了
3月3日	三重県議会（第1回定例会）で斎宮跡の歴史資料館について一般質問
4日	作業員旅行（鳥羽）
7日	第62次・第63次発掘調査完了
20日	第58-6次発掘調査完了
22日	第58-7次発掘調査開始（住宅新築）
27日	第58-7次発掘調査完了
"	第58-8次発掘調査開始（近鉄保全柵）
29日	第58-8次発掘調査完了

## 掘立柱建物・塀一覧表

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		

第59次調査 (6 A C J - I)

3947	3 ×(2)	E 5°S	5.4	—	2.4	2.2	奈 良	
195	5 × 3	N 9°E	10.5	4.2	2.1	2.1	平安中	西面廂、南面廂、南北柱間2.1m 第8-4次調査で確認
3914	5 × 4	E 9°S	10.5	8.4	2.1	2.2	"	北面、南面廂、南北柱間2.1m
3926	5 × 2	E 9°S	11.0	4.4	2.2	(2.2)	"	妻柱検出されず
3932	(4) × 2	N 6°E	—	4.2	1.9	2.1	"	
3933	5 × 2	E 10°S	10.8	4.4	2.16	2.2	"	
3934	(2) × 3	N 10°E	—	4.2	2.1	2.1	"	西面廂、南北柱間1.2m
3935	(2) × 3	N 10°E	—	5.2	1.8	2.0	"	西面廂、南北柱間1.2m
3936	3 ×(2)	E 12°S	6.3	—	2.1	2.0	"	
3937	(2) × 2	N 9°E	—	4.4	2.2	2.2	"	
3942	(2) × 2	N 0°	—	4.2	2.0	2.1	"	
3911	(4) × —	E 8°S	—	—	2.4	—	平安後	
3916	5 × 2	E 8°S	10.5	4.2	2.1	2.1	"	
3925	5 × 2	E 8°S	9.2	4.2	1.84	2.1	"	
3930	3 × 2	E 8°S	6.0	4.2	2.0	2.1	"	総柱建物
3943	3 × 2	E 16°S	5.4	4.2	1.8	2.1	"	
3944	5 × 2	E 7°S	10.5	4.2	2.1	2.1	"	
3945	3 × 3	E 6°S	6.7	6.0	不端	2.0	"	桁行柱間西から2.5m、 2.0m、2.2m
3948	3 × 4	E 7°S	6.3	4.2	2.1	2.1	"	北面、南面廂、南北柱間 2.0m、南面廂柱間2.2m
3949	(7)	N 0°	—	—	—	—	—	塀
3917	3 × 2	E 13°S	7.2	4.2	2.4	2.1	平安末	

第60次調査 (6 A G J - B · D · G)

1468	5 × 2	E 5°N	12.2	4.8	2.44	2.4	平安初	第29次で確認、規模変更
3975	3 × 2	E 4°N	5.5	3.4	1.83	1.7	"	S B 3876より新しい
3976	3 × 2	E 3°N	5.7	3.55	1.9	1.78	"	
3984	(5) × 2	E 5°N	—	4.9	2.4	2.45	"	
3986	(1) × 2	E 0°	—	3.8	—	1.9	"	
3988	(1) × 2	E 0°	—	4.0	—	2.0	"	
3980	3	E 4°N	5.7	—	1.9	"	塀	
3983	3 × 2	E 5°N	6	4.6	2	2.3	"	塀、S B 3984に接する
3989	3	E 3°N	6.6	—	2.2	"	塀、S D 4020に接する	
3961	5 × (1)	E 2°N	11.0	—	2.2	—	平安前 I	
3963	3 × 2	N 3°W	6.0	4.2	2.0	2.1	"	
3964	3 × 2	N 3°W	5.7	3.8	1.9	1.9	"	東柱あり
3967	4 × 2	E 3°N	7.2	4.0	1.8	2.0	"	
3979	3 × 2	E 2°N	5.7	3.55	1.9	1.78	"	

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)			時 期	備 考
					桁 行	梁 行	柱間寸法(m)		
3987	(2)×2	E 0°	—	3.6	2.0	1.8	平安前 I		
1467	3 × 2	N 3°W	5.4	3.3	1.8	1.65	平安前 II	第29次で確認、規模変更	
3960	5 × (1)	E 3°N	11.1	—	2.22	—	〃		
3962	3 × (1)	E 3°N	6.6	—	2.2	—	〃	S B 3960より新しい 妻柱不明確	
3972	4 × 2	E 1°N	7.1	4.0	1.78	2.0	〃		
3973	5 × 2	E 2°N	8.8	3.3	1.76	1.65	〃		
3974	3 × 2	E 5°N	5.6	4.2	1.86	2.1	〃		
3981	3 × 2	N 2°W	3.5	2.8		1.4	〃	桁行1.0+1.5+1.0	
3985	(3)×2	N 1°W	—	4.0	1.8	2.0	〃	S K 4006より新しい	
3966	4	E 5°N	8.4		2.1		〃	塀	
3982	4	N 3°E	6.9		1.72		平安前	塀	
3968	3 × 2	E 5°N	5.7	3.6	1.9	1.8	平安中	柱間不揃い、並みあり	
1470	5 × 2	E 1°N	9.2	3.6	1.84	1.8	平安後 II	第29次で確認、規模変更	
1472	4 × 2	E 0°	7.2	3.8	1.8	1.9	〃	第29次で確認、規模変更 西面廻、廻柱間 1.8 m	
3969	3 × 3	E 1°S	5.7	5.0	1.9	2.0	〃	北面廻、廻柱間 1.0 m	
3970	5 × 2	E 6°S	10.7	4.2	2.14	2.1	〃		
3971	3 × 2	E 6°S	6.4	4.0	2.13	2.0	〃		
3977	3 × 2	E 0°	5.6	3.8	1.86	1.9	〃		
3978	3 × 2	E 1°N	6.0	3.8	2.0	1.9	〃		
3965	4	E 1°S	8.4		2.1		〃	塀、S B 3969に揃う	

第61次調査 (6 A F F - H - I - D)

4032	5 × 2	E 4°N	12.0	4.9	2.4	2.45	新築未 —平安初	
4039	(4)×2	E 3°N	—	4.8	2.4	2.4	〃	
4041	(4)×2	E 4°N	—	4.9	2.4	2.45	〃	
4045	2 × 2	N 1°W	4.2	3.4	2.1	1.7	〃	純柱建物
4070	4 × 2	N 4°W	6.6	3.9	1.65	1.95	〃	
4077	(3)×2	E 4°N	—	4.8	2.4	2.4	〃	S B 4079より新しい
4078	(3)×2	E 4°N	—	4.6	2.4	2.3	〃	
4079	(2)×2	E 5°N	—	4.2	2.0	2.1	〃	
4093	(4)×2	E 4°N	—	4.8	2.4	2.4	〃	S B 4095より新しい
4095	(3)×2	E 5°N	—	5.0	2.4	2.5	〃	
3240	(4)×2	E 4°N	—	5.1	2.33	2.55	平安前	第51次調査で確認 棟方向、柱間寸法変更
4031	3 × 2	E 5°N	5.9	3.9	1.97	1.95	〃	
4033	4 × 2	E 6°N	6.7	3.6	1.68	1.8	〃	
4034	(4)×2	E 7°N	—	3.5	1.7	1.75	〃	
4094	(3)×2	E 4°N	—	4.3	2.3	2.15	〃	
4084	3 × 2	N 2°W	5.6	4.2	1.87	2.1	〃	
4090	(5)×2	E 2°N	—	4.4	1.98	2.1	〃	
4051	(4)×2	E 2°N	—	3.2	1.7	1.6	〃	

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		
4069	- ×(2)	E 3°N	-	3.9	-	1.95	平安前	
4074	4 × 2	E 2°N	6.8	3.4	1.7	1.7	"	
4085	3 × 2	N 2°E	5.8	3.7	1.93	1.85	"	S B 4084より新しい
4089	(5) × 2	E 2°N	-	4.5	2.1	2.25	"	
4091	(3) × 2	E 2°N	-	3.6	1.95	1.8	"	
4096	(3)	N 0°	-	-	2.0	-	"	S B 4085の目かくし跡か?
4075	3 × 2	E 2°S	5.4	4.0	1.8	2.0	平安中	
4083	3 × 2	N 2°E	5.4	3.8	1.8	1.9	"	
4092	(3) × 2	E 2°S	-	3.6	1.9	1.8	"	
4040	(5) × 2	E 1°S	-	3.7	1.95	1.85	"	
3238	(3) × 2	E 3°N	-	3.8	1.8	1.9	平安後	第51次調査で確認
3239	(4) × 2	E 4°N	-	4.3	1.97	2.15	"	、時期変更
4042	3 × 2	N 6°W	6.9	4.3	2.3	2.15	"	
4043	3 × 2	N 3°W	5.3	3.8	1.77	1.9	"	
4044	3 × 2	N 7°W	6.0	3.8	2.0	1.9	"	
3241	3 × 2	E 3°N	6.4	4.2	2.13	2.1	平安末	第51次調査で確認 建物規模変更

第62次調査 (6 A G I - J + K)

4120	(3) × 2	E 4°N	-	4.8	2.4	2.4	奈良後	SB4121より古い 建て替え
4121	"	E 4°N	-	4.8	2.4	2.4	"	
4137	3 × 2	E 4°N	6.0	3.8	2.0	1.9	"	
4138	(2) × 2	E 4°N	-	3.8	2.2	1.9	"	
4139	- × 2	E 2°N	-	3.8	-	2.2	"	S B 4138より新しい
4165	(2) × 2	E 5°N	-	4.4	2.2	2.2	"	
4110	2 × 2	E 4°N	3.6	3.4	1.8	1.7	平安初	
4124	3 × 2	E 4°N	5.4	4.0	1.8	2.0	"	
4140	- × 2	E 2°N	-	4.8	-	2.4	"	S B 4138・4139より新しい
4125	3 × 2	N 9°W	6.3	3.8	2.1	1.9	平安前 I	
4126	(3) × 2	E 3°N	-	4.0	-	2.0	"	
4141	3 × 2	N 3°W	5.7	4.0	1.9	2.0	"	
4146	- × 2	E 2°N	-	4.0	-	2.0	"	
4147	- × 2	E 2°N	-	4.4	-	2.2	"	
4066	(5) × 2	E 2°N	-	4.6	2.3	2.3	"	第31 - 7次調査で確認
42	(2) × -	E 4°N	-	-	2.0	-	平安前 II	
4143	3 × (2)	N 2°W	4.8	(3.6)	1.6	(1.8)	"	
4144	- × 2	E 4°N	-	3.8	-	1.9	"	
4145	- × (2)	E 4°N	-	-	-	2.2	"	
4160	(3) × 2	E 3°N	-	4.4	2.2	2.2	"	
4161	(3) × 2	E 3°N	-	4.4	2.2	2.2	"	S B 4160より古い
4111	3 × -	N 4°W	5.7	-	1.9	-	平安後	

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		
4112	3×-	N 6°W	5.7	—	1.9	—	平安後	
4113	—×2	E 5°N	—	4.4	—	2.2	"	
4122	—×2	E 3°N	—	3.8	—	1.9	"	
4131	(3)×2	E 3°N	—	4.2	1.8	2.1	"	
4132	(3)×2	E 6°N	—	3.6	1.9	1.8	"	
4154	(3)×2	E 5°N	—	4.6	2.0	(2.3)	"	
4156	(2)×2	E 2°N	—	4.6	2.0	(2.3)	"	
4157	(3)×2	E 5°N	—	4.4	2.2	2.2	"	

第63次調査(6 A F G - M · N)

2355	2×2	E 1°S	3.6	3.2	1.8	1.6	平安初	第41次調査で確認
2361	3×2	N 4°W	6.2	4.14	2.07	2.07	"	"
4180	(3)×2	N 0°	—	3.8	1.6	1.9	"	梁間不揃い
4181	(2)×2	N 1°W	—	4.14	2.0	2.07	"	
4183	3×2	E 3°N	6.6	4.2	2.2	2.1	"	
4186	5×2	E 3°N	11.84	5.0	2.37	2.5	"	
4187	5×2	E 4°N	12.3	5.0	2.46	2.5	"	
4193	(5)×2	E 0°	—	3.4	1.9	1.7	"	
4206	3×2	N 5°E	5.3	3.2	1.77	1.6	"	
4207	3×2	E 2°S	6.0	3.55	2.0	1.77	"	
4185	3×2	N 1°W	5.4	3.8	1.8	1.9	平安前 I	
4208	3×2	E 3°S	6.21	3.55	2.07	1.78	"	
4209	(3)×2	E 3°N	—	3.6	1.7	1.8	"	
4212	(2)×2	E 2°N	—	3.8	2.0	1.9	"	
4202	(4)	E 1°S			2.0	"	塙	
4188	3×2	E 3°S	5.33	3.55	1.78	1.78	平安前 II	
4190	3×(2)	N 1°W	5.6	—	1.86	2.0	"	
4191	(2)×2	E 1°N	—	4.14	2.0	2.07	"	
4194	3×2	E 2°S	6.3	3.8	2.1	1.9	"	S K 4244より古い
4195	3×2	E 3°S	5.8	3.6	1.93	1.8	"	S K 4244より新しい
4196	3×2	E 3°S	5.7	4.3	1.9	2.15	"	
4199	3×2	E 0°	5.5	4.0	1.83	2.0	"	
4203	3×2	E 4°N	5.7	3.9	1.9	1.95	"	
4204	3×2	E 3°S	5.5	3.6	1.83	1.8	"	S B 4196より新しい
4184	3×2	E 7°N	6.22	4.14	2.07	2.07	平安前	
4198	5×2	E 2°N	9.5	3.8	1.9	1.9	平- 中	
4182	(2)×2	N 0°	—	3.8	2.0	1.9	平安後 I	
4189	3×2	N 5°W	6.0	3.8	2.0	1.9	"	
4192	(3)×2	E 1°N	—	4.2	1.8	2.1	"	
4197	5×2	E 1°N	9.2	3.9	1.84	1.95	"	

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		
4201	3 × 2	E 2°N	5.3	3.4	1.76	1.7	平安後 I	
4205	3 × 2	N 2°E	5.2	3.8	1.73	1.9	〃	
4210	3 × 2	E 4°N	6.0	3.7	2.0	1.35	不 明	
4225	2 × 2	N 2°W	4.6	3.4	1.86	1.7	〃	

第58-1次 (6 A F K-C-D)

4261	3	N 4°E	6.0		2.0		平安前	塙
4264	3	E 1°N	6.0		2.0		〃	〃
3871	3 × 2	N 3°W	6.3	4.5	2.1	2.25	平安前 I	第53-15次調査で確認 棟方向変更
3872	3 × 2	N 3°W	6.6	4.4	2.2	2.2	〃	〃
4255	3 × 2	N 3°W	5.4	4.1	1.8	2.05	平安後	
4256	5 × 2	N 2°W	9.0	3.8	1.8	1.9	平安後 I	
4260	(3)×-	N 3°W	-	-	1.8	-	不 明	

第58-4次 (6 A B L-A)

4280	2 × -	N 1°E	-	-	2.55	-	飛 鳥	
4281	(3)	N 1°E	-		2.4		〃	塙
4282	(2)	N 1°E	-		2.4		〃	〃
4284	(3)×(2)	E 14°N	-	-	1.6	1.6	不 明	

第58-5次 (6 A D Q-Q)

4286	(2)×-	N 1°E	-	-	2.2	-	平安後	
------	-------	-------	---	---	-----	---	-----	--

第58-6次 (6 A D R-V)

4295	(4)× 2	E 9°S	-	3.7	2.0	1.85	平安前	桁行柱間東端のみ 1.6m
------	--------	-------	---	-----	-----	------	-----	---------------

第58-7次 (6 A G S-G)

4298	(3)× 2	E 3°N	-	3.9	1.8	1.95	鎌倉以前	
------	--------	-------	---	-----	-----	------	------	--

## 豎穴住居一覧表

S B	規 模 (m)	長軸方向	深さ(m)	柱 穴	カマド	時 期	備 考
-----	---------	------	-------	-----	-----	-----	-----

### 第59次調査 (6 A C J-I)

3899	-	不明	10		東 壁	奈良中	
3900	5.4×4.0	E 14°S	40			"	
3901	-	不明	10			"	S B 3915より古い
3915	4.2×3.1	E 10°S	40			"	
3920	3.5×3.5	N 12°W	30		北 壁	"	火災住居
3921	3.0× -	N 12°W	20			"	
3938	3.4×3.4	E 5°S	20		北 壁	"	
3939	-	E 8°S	10			"	
3940	3.6×3.0	E 12°S	10			"	
3946	- ×2.8	N 27°W	40			"	

### 第62次調査 (6 A G I-J-K)

4135	5.4× -	N 5°W	20			奈良中	
------	--------	-------	----	--	--	-----	--

### 第58-4次調査 (6 A B L-A)

4283	3.6× -	E 26°N	20			弥生中	馬溝あり
------	--------	--------	----	--	--	-----	------

## 斎宮跡発掘次数一覧表

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
1	45	試掘	13-4	51	楽殿2916~2917(松井)
2	46	古里A地区	13-5	"	御館2974-1(川本)
3	"	B地区	13-6	"	中垣内375-1(南)
4	47	C地区	13-7	"	東裏328(小川)
5	48	D地区	13-8	"	西加座2771-1(細井繁久)
6-1	"	Aトレンチ	13-9	"	2773(細井国太郎)
6-2	"	Bトレンチ	13-10	"	東裏362-1(児島)
6-3	"	Cトレンチ	13-11	"	西加座2681-1(浮田)
6-4	"	Dトレンチ	13-12	"	2721-3, 2724-2(森川)
6-5	"	Eトレンチ	13-13	"	東前沖2506-2(宮下)
7	49	古里E地区	14-1	52	2Eトレンチ
8-1	"	Fトレンチ	14-2	"	2Fトレンチ
8-2	"	Gトレンチ	14-3	"	2Gトレンチ
8-3	"	Hトレンチ	14-4	"	2Hトレンチ
8-4	"	Iトレンチ	14-5	"	2Iトレンチ
8-5	"	Jトレンチ	15	"	斎宮小学校
8-6	"	Kトレンチ	16-1	"	竹川町道A
8-7	"	Lトレンチ	16-2	"	"B
8-8	"	Mトレンチ	16-3	"	"C
8-9	"	Nトレンチ	16-4	"	"D
8-10	"	Oトレンチ	16-5	"	"E
8-11	"	Pトレンチ	16-6	"	"F
9-1	50	Qトレンチ	17-1	"	竹神社社務所
9-2	"	Rトレンチ	17-2	"	竹神社防火用水
9-3	"	Sトレンチ	17-3	"	西加座2721-6(西沢)
9-4	"	Tトレンチ	17-4	"	楽殿2894-1(中川)
9-5	"	Uトレンチ	17-5	"	2895-1(西口)
9-6	"	Vトレンチ	17-6	"	出在家3237-3(吉川)
9-7	"	Wトレンチ	17-7	"	3237-1(里中)
9-8	"	Xトレンチ	17-8	"	楽殿2894-1(西村)
9-9	"	Yトレンチ	17-9	"	東海造機
9-10	"	Zトレンチ	18	53	6AEL-E・I(下巻)
10	"	広域園道路	19	"	6AEN-M-N-O(御館)
11-1	"	西加座2661-1(山中)	20	"	6AE0-1-J(御館)
11-2	"	2681-1(山名)	21-1	"	6AGN-B(鐵治山、中山)
11-3	"	東前沖2483-2(前田)	21-2	"	6AFI-D(西加座2711-2, 2717-4施設)
11-4	"	下園2926-9(吉木)	21-3	"	6AFD-D(西前沖2649-1大西)
12-1	51	2Aトレンチ	21-4	"	6AFH-F(西加座2678, 2679-3施設)
12-2	"	2Bトレンチ	21-5	"	6AGD-K(東前沖、渡瀬)
12-3	"	2Cトレンチ	21-6	"	6ACA-T(古里3269-2、中西)
12-4	"	2Dトレンチ	21-7	"	6AFE-F(東前沖2631-1、鈴木)
13-1	"	東加座2436-7(浜口)	21-8	"	6AEG-A(樂殿2909-3、大西)
13-2	"	2436-4(中村)	21-9	"	6AED-R(森林3218-3、宇田)
13-3	"	古里3283(村上)	22-1	"	6AGU

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
22-2	53	6AGU	37-5	56	6AFC-G (西前沖2604-7、中村)
22-3	"	6AGW	37-6	"	6ABD-A (古里588-2、北蔽)
23	54	6AEL-B (下闇)	37-7	"	6AEC-M (古里2861-2、斎王公民館)
24	"	6AGF-D (西加座)	37-8	"	6ADR-P (木賀山28-8、13、14、富山)
25-1	"	6ADP-K (牛糞3029-1、三重土地ホーム)	37-9	"	6AGK-E (東加座2355-1、竹内)
25-2	"	6ACA-Y (古里3270、豊田)	37-10	"	6AED-O (楽院3217-1、渡辺)
25-3	"	6ADD-F (諏津3139-3、池田)	37-11	"	6ADN-O (内山3043-3、斎宮駅)
25-4	"	6AER-H (牛糞3014、牛場公民館)	37-12	"	6AFH-J (西加座2681-1、3、4、洪谷)
25-5	"	6ACN-H (諏治山2392、丸山)	37-13	"	6AGK-F (東加座2385-3、2386-3、竹内)
25-6	"	6AFH-A (西加座2675-5、谷口)	38 *	"	6ACD-S (猿山)
25-7	"	6AEK-V (下闇2926-10、奥田)	39	"	6ABD-R・S・T (古里)
25-8	"	6AFC-D (西前沖2604-5、山本)	40	"	6ACH-L・M (東加座)
25-9	"	6ACN-C (庄原3387-1、北出)	41	"	6AGJ-J他 (諏宮地内)
25-10	"	6AEV-A (鈴池339-1、木島)	42-1	57	6AEI-D-F (樂院)
25-11	"	6ACF-B (東家364-1、沢)	42-2	"	6AEK-A・B (樂院)
25-12	"	6AEE-Y (樂院2892-3、山本)	43-1	"	6ADC-C (出在家3235-2、水田)
25-13	"	6AFJ-E (西加座2766-1、山内)	43-2	"	6ADT-B (木賀山308-1、山本)
26-1	"	6AFR (中西)	43-3	"	6ACP-T (南庭241-1、辻)
26-2	"	6AEX~6ACQ (鈴池、木賀山、南裏)	43-4	"	6ADS-D (牛糞123-3、西山)
26-3	"	6AEV-W-X (鈴池)	43-5	"	6ADE-D (諏津3220-3、豊野)
26-4	"	6ACR (木賀山・南裏)	43-6	"	6ACE (東前沖、町道鶴溝)
27	"	6ACG-S-T (東裏)	43-7	"	6ABD-F (古里588-6、今西)
28	"	6AEO-D (柳原)	43-8	"	6ADQ-H (牛糞3025-2、大西)
29	"	6AFI, 6AFL, 6AFK, 5AFM, 6AGJ	44	"	6AFI-A・B (諏治山2759-1、他)
30	55	6ABJM-M・X・W (中垣内)	45	"	6AEG-P・Q (楽院2904-2、他)
31-1	"	6ADO-M (内山3038-13、若見)	46	"	6AGN-C・D (諏治山2737-1、他)
31-2	"	6ACP-I (南庭227-2、鈴木)	47	"	6ADJ-D・G他 (西加座、御籠、宮之原、上園)
31-3	"	6ABD-A (古里588-4、北蔽)	48-1	58	6ACM-M (庄原3385、諏宮小)
31-4	"	6ADQ-T (牛糞3018-2、百五筋行)	48-2	"	6ADP-Q (牛糞3033-1・2、吉田)
31-5	"	6ACC-G (鈴池338-3、水谷)	48-3	"	6ABL-M (中垣内34-5、西川)
31-6	"	6ABO-X (古里576-1、池田)	48-4	"	6AGL-B (東前沖2480、倉田)
31-7	"	6AGI-L (東加座2427-1、竹内)	48-5	"	6AGD~6AFE (東前沖、町道鶴溝)
31-8	"	6ACN-G (庄原3388-1、5、8、9、佐)	48-6	"	6AGC-A (西前沖3550-1、今西)
31-9	"	6AGD-L (北原2487-1、中川)	48-7	"	6ADT-H (木賀山307、森西)
31-10	"	6ADM-O (内山3043-3、諏宮駅)	48-8	"	6ACL-E・F・G (東裏334-15、他)
31-11	"	6ADT-I (木賀山304-2、産野)	48-9	"	6AEV-J (鈴池341-1、乾)
31-12	"	6ADT-J (木賀山304-7、宇田)	48-10	"	6AGT (牛糞、町道鶴溝)
32	"	6ACE-D・E・F (諏宮)	48-11	"	6ADP-E (諏治山2351-1, 2352-1, 楠原)
33	"	6ADE-C・D他 (諏津)	48-12	"	6AFC-H (西前沖2604-8・9、清水)
34	"	6AFK-F・G・H (西加座)	48-13	"	6ACM-O (東裏、諏宮小)
35	"	6APE他 (西前沖)	48-14	"	6AET (牛糞、町道鶴溝)
36	56	6ABI-F (中垣内)	49	"	6ADI-D・U・V・W・X (上園3083、他)
37-1	"	6AFC-M (西前沖2604、日本鞋木)	50	"	6ACH-H (東裏294、297、山本)
37-2	"	6ADQ-R (牛糞3021-2、野田)	51	"	6AFF-D (西加座2663-1・4, 2664, 墓下)
37-3	"	6AFC-F (西前沖2604-6、押田)	52	"	6AGF-D (西加座2703、他)
37-4	"	6AFC-M (西前沖2604、日本鞋木)	53-1	59	6ACM-P (東裏284、体育館)

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
53-2	59	6ACA-M (古里3280-2、中西)	56	59	6ACH-S (東裏289-1、他)
53-3	"	6ABE (古里573-2、永納)	57	"	6AGF-H-I (東加座2441、他)
53-4	"	6ACL-S (東裏271-1、田所)	58-1	60	6AFK-C-D (西加座2721-1、鈴木)
53-5	"	6ACR (木葉山97-5、田中)	58-2	"	6AFH-N (西加座2681-8、三村)
53-6	"	6AGO (道治山、町道鶴浦)	58-3	"	6ACM-N (東裏3385-2、産宮小)
53-7	"	6ADD-U (藻林3147-3、野呂)	58-4	"	6ABL-A (中垣内4731-1、小家)
53-8	"	6ACE-O (東前沖2470-2、上田)	58-5	"	6ADQ-Q (牛集、町道鶴浦)
53-9	"	6ACS-O (木葉山95-2、浅尾)	58-6	"	6ADR-V (木葉山131-3、西山)
53-10	"	6ACA-R (古里3267-1、西川)	58-7	"	6AGS-G (中西611、山路)
53-11	"	6ADR-W (木葉山131-7、西村)	58-8	"	6ABM-A (中垣内430-3他、近鉄)
53-12	"	6ABL-K (中垣内464-2、武)	59	"	6ACJ-I (庄頭3379-1他)
53-13	"	6ADQ-L (牛集3022、辻)	60	"	6AGJ-B-D-G (東加座2450-1他)
53-14	"	6ACM-O (東裏287-3、体育館)	61	"	6AFF-H-I-D (西加座2663-1他)
53-15	"	6AFK-C-D (西加座2721-1、鈴木)	62	"	6AGI-J-K (東加座2425、他)
54	"	6AFE-N (西前沖2630、他)	63	"	6AFG-M-N (西加座2659-1、他)
55	"	6AEN-P (御原、御船2785-1、他)			

### 三重県遺跡標示一覧表

時代		種別と地 区					
0		A 国 都 衛		K 北 勢	T 伊 勢	城	
1	先 繩 文	B 伊 勢	寺	L 中 勢	U 志摩熊野	砦	
2	繩 文	C 志摩熊野		M 南 勢	V 伊 賀	館	
3	弥 生	D 伊 賀	院	N 志 摩	W 記念物		
4	古 墳	E 北 勢		O 熊 野	X 文 通		
5	飛 鳥	F 中 勢	集	P 伊 賀	Y		
6	奈 良	G 南 勢	落	Q 伊 勢	Z そ の 他		
7	平 安	H 志 摩	址	R 志摩熊野			
8	鎌 食	I 熊 野		S 伊 賀			
9	室 町 以 降	J 伊 賀					

高官跡地区表示



# 図版



第61次調査全景（北から）



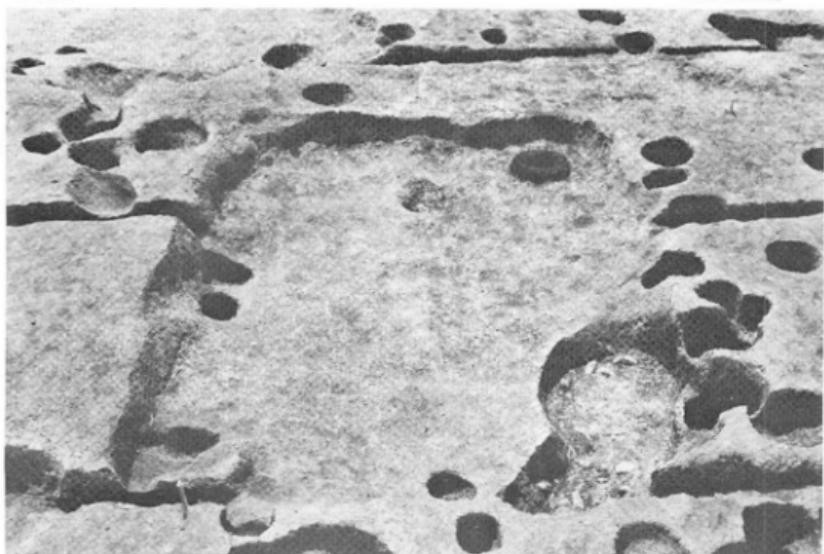
第63次調査全景（東から）



全 景



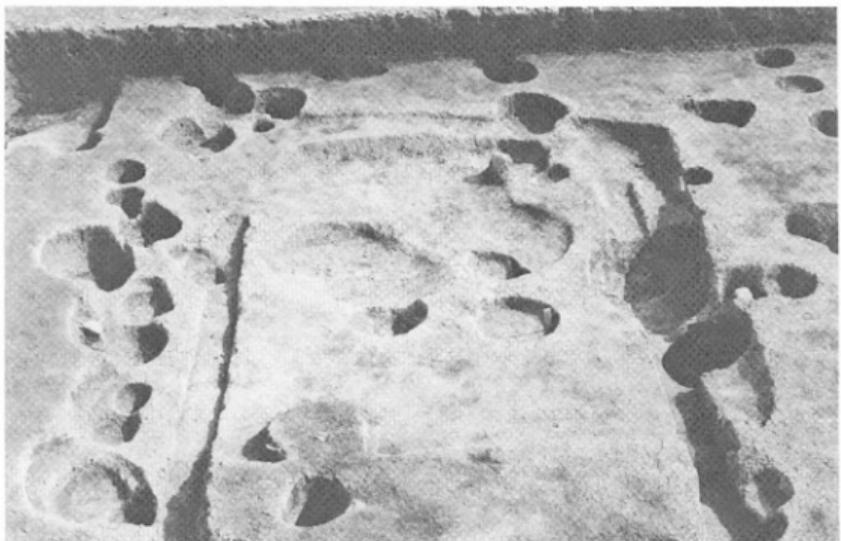
S D 3890 (西から)



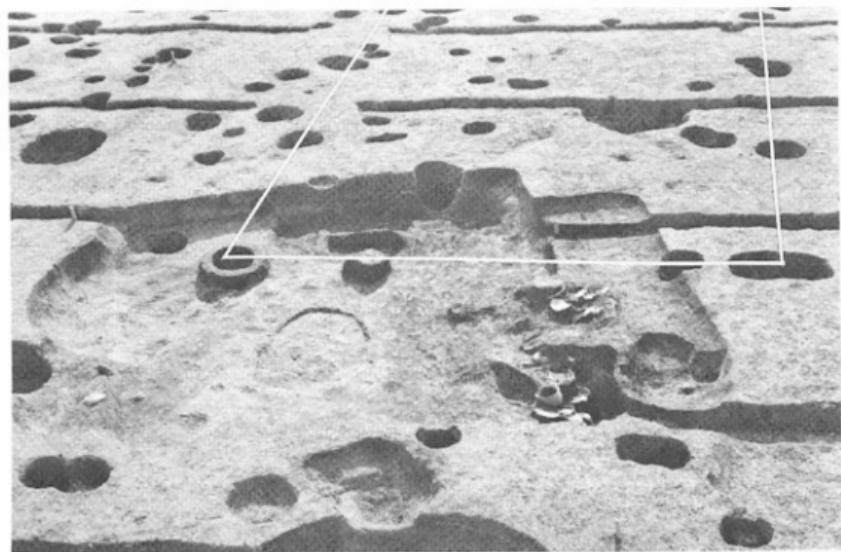
SB3915 (東から)



SB3900 (東から)



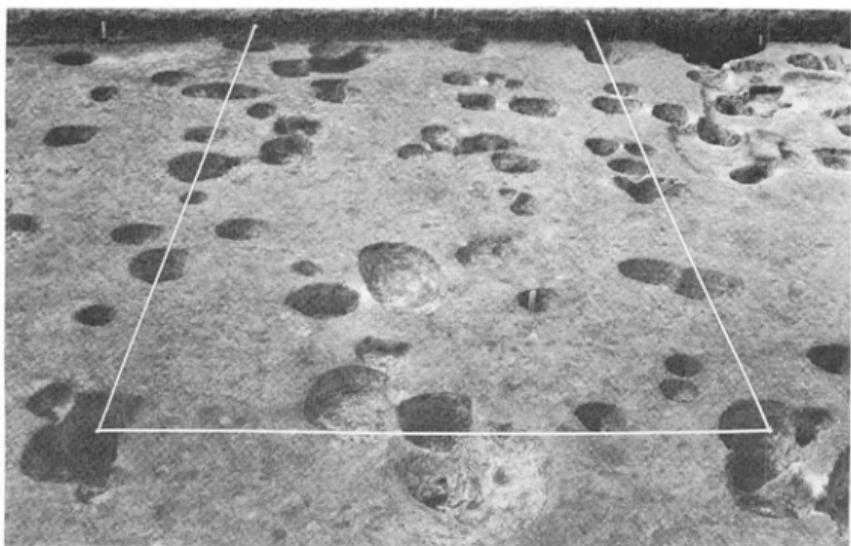
S B 3938 (北から)



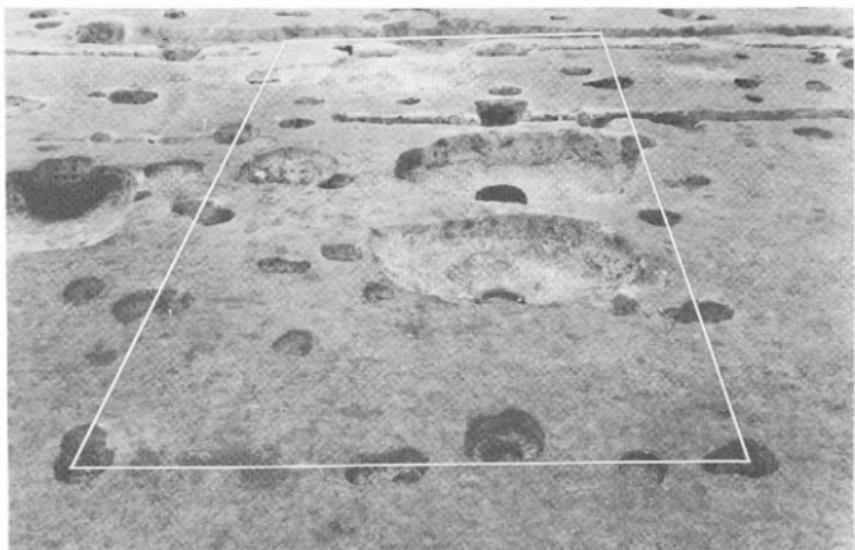
S B 3920・S B 3916 (東から)



S B3940・S B3934 (西から)



S B3932 (北から)



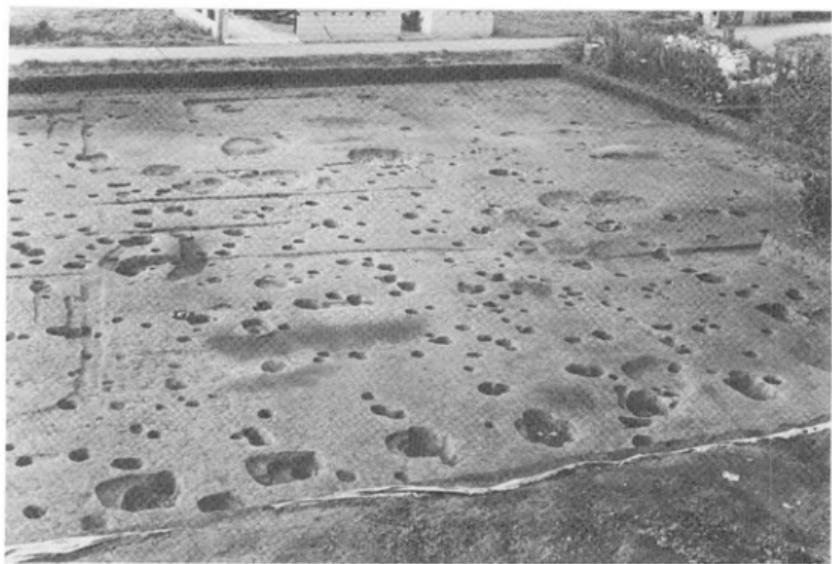
S B 3925 (東から)



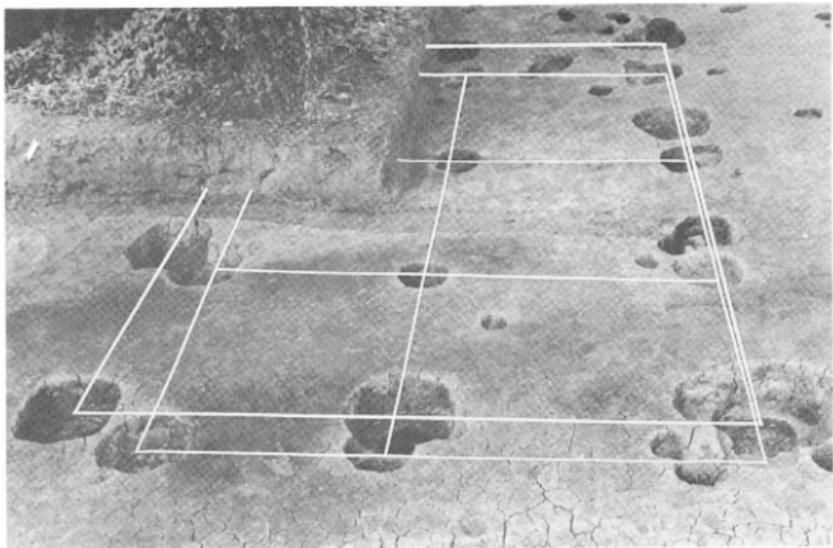
S B 3930 (西から)



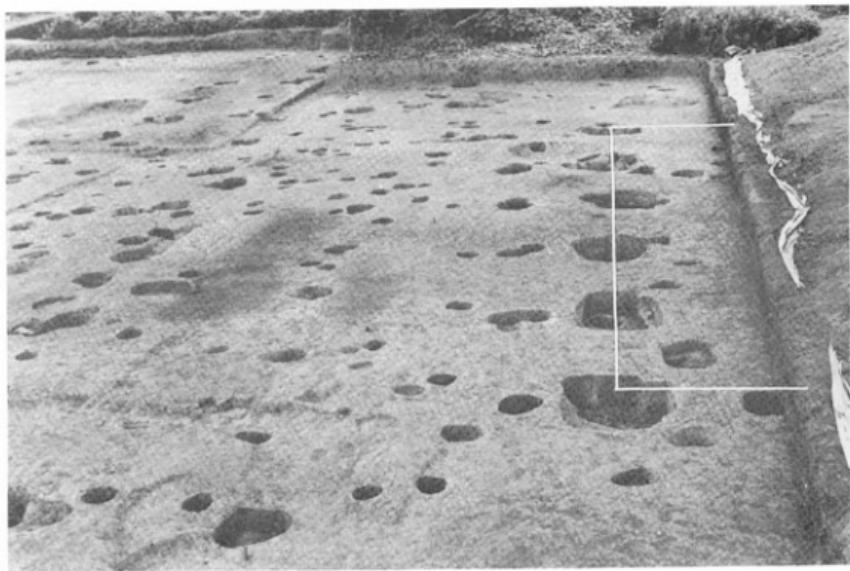
全 景 (西から)



調査区西半部 (北東から)

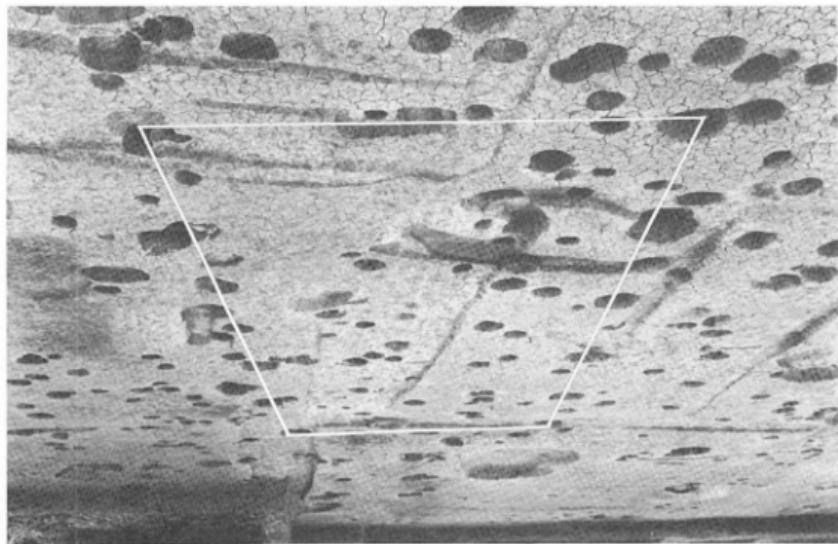


S B3963・S B3964（南から）

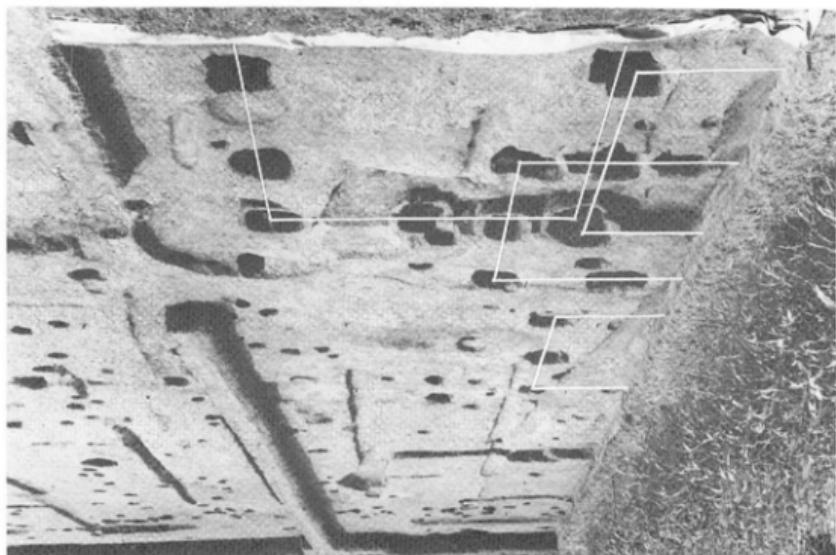


S B3961（東から）

SB1468 (東方)



SB3985~SB3988 (北方)

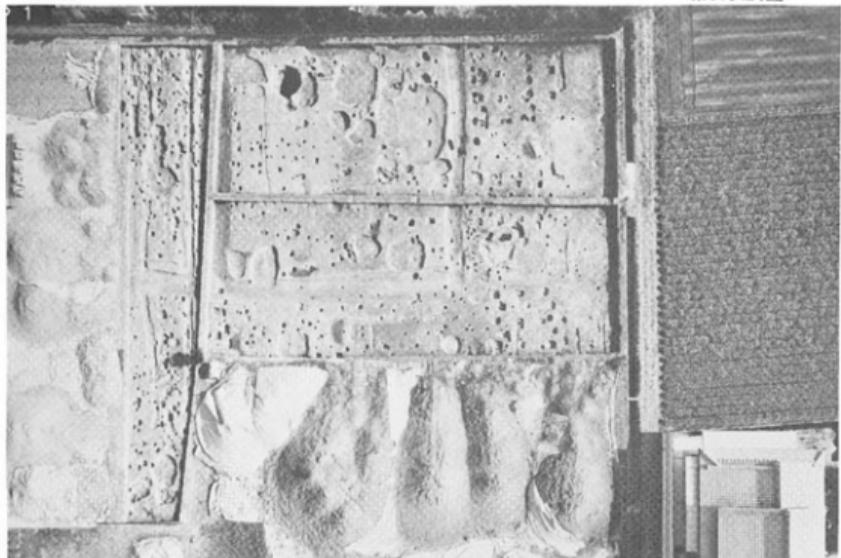




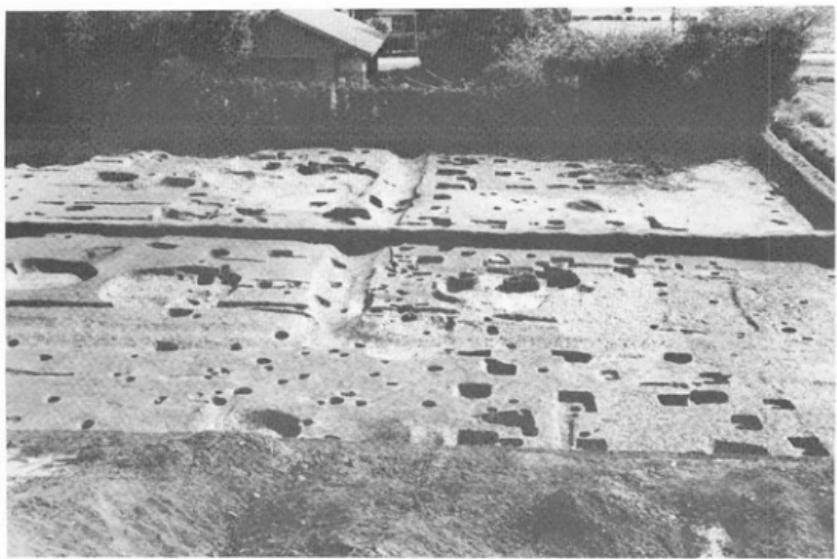
S B 3977 (北から)



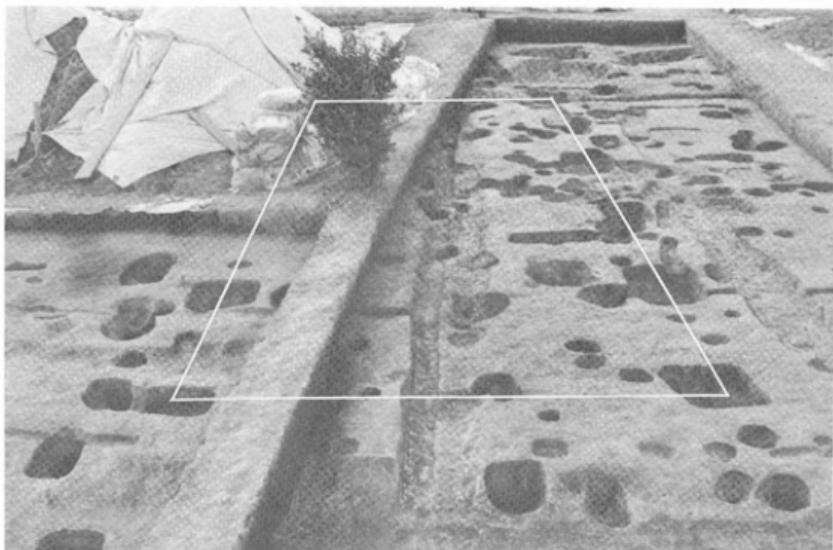
S D 3991 · S D 1462 (北から)



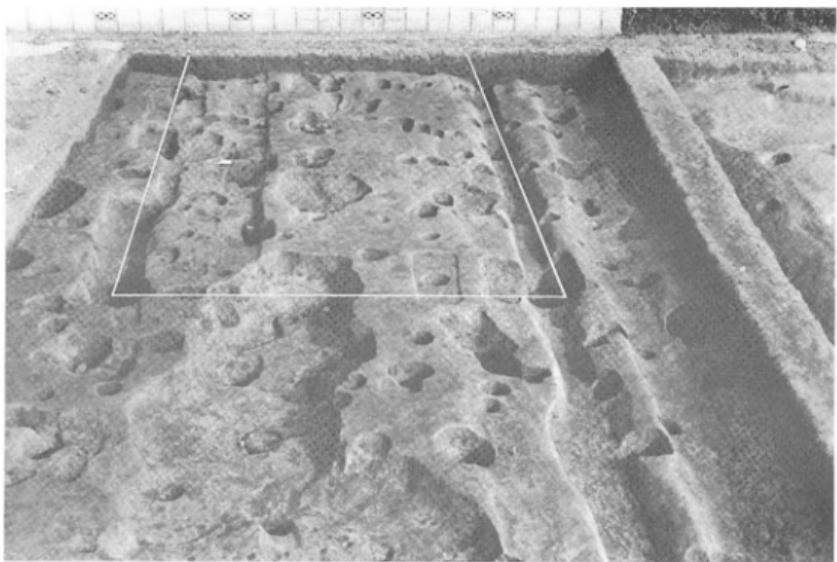
全 景



調査区南半部（西から）



SB4032 (東から)



SB4032 (西から)

P L 13

第61次調査



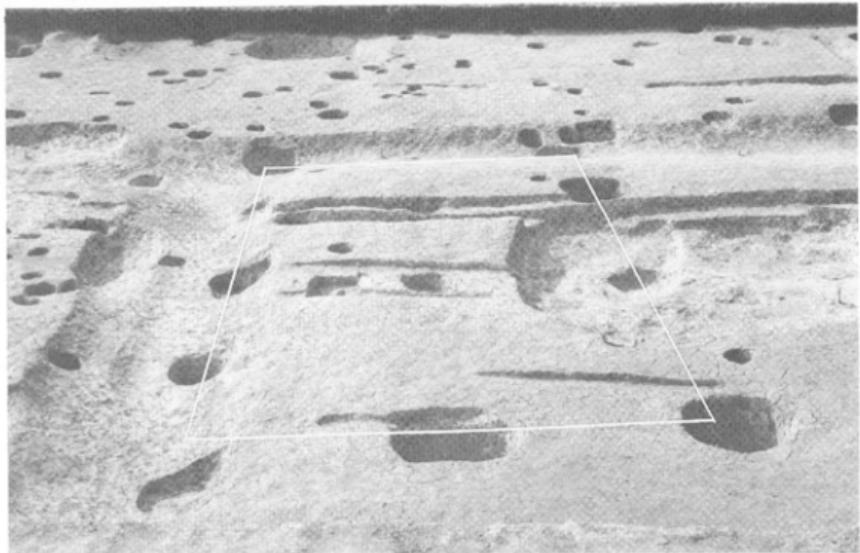
S B 4075・S B 4077 (北から)



S B 4039・S B 4095 (北から)

第61次調査

P L 14



S B 4074 (東から)



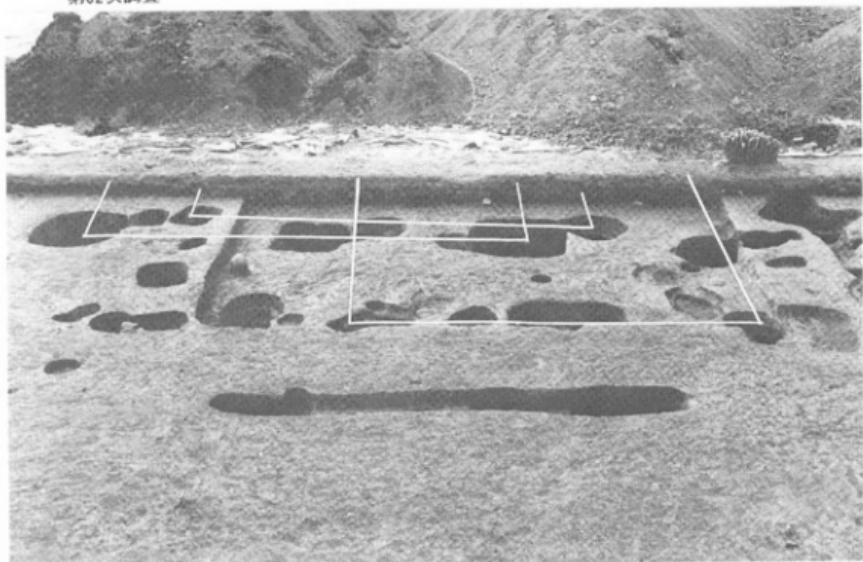
S B 4085 · S B 4084 (北から)



全 景



全 景（北から）



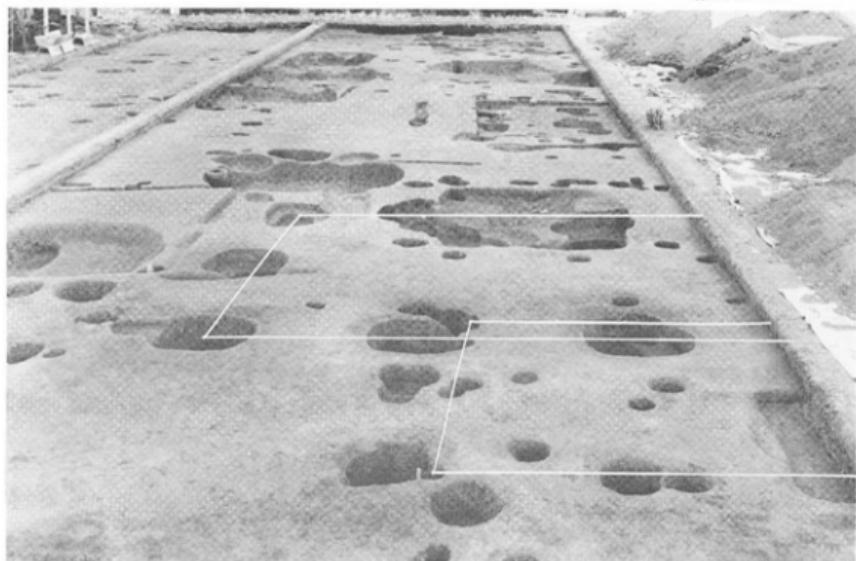
S B 4135 - S B 4138～S B 4140 (東から)



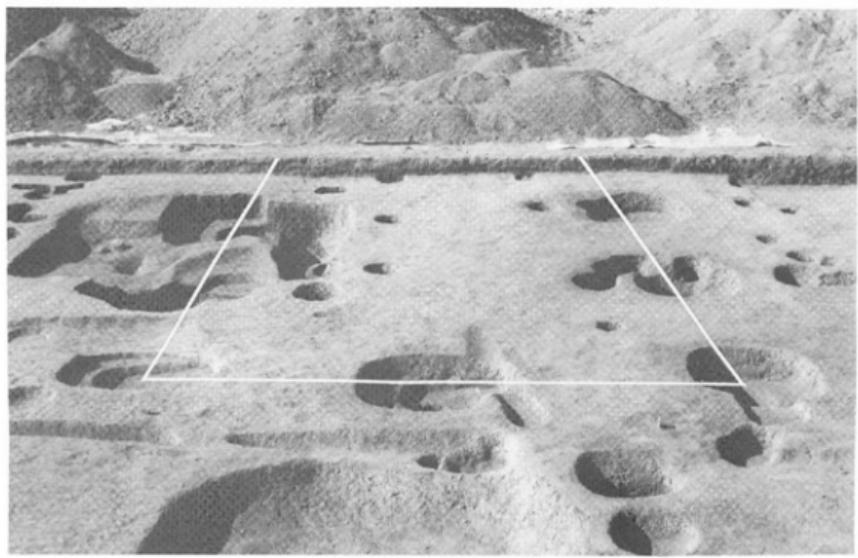
S E 4155 (西から)

P L 17

第62次調査



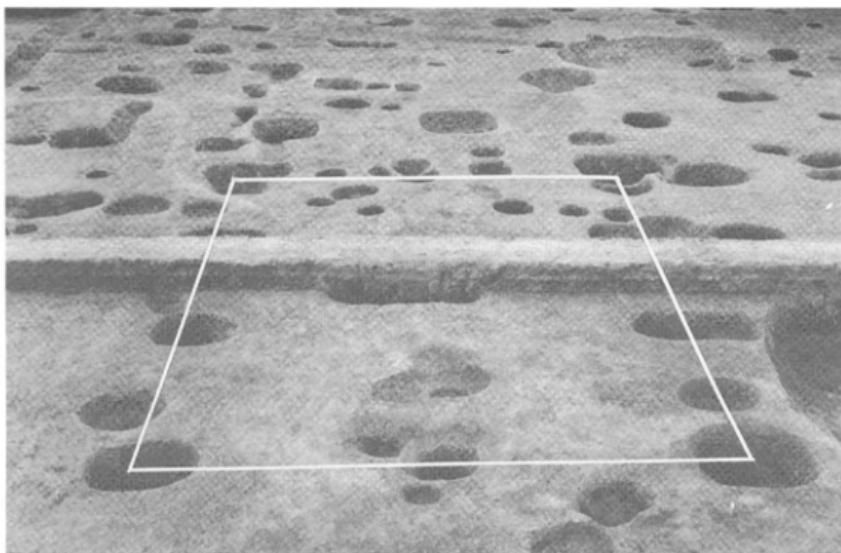
S B4122・S B4120・S B4121 (北から)



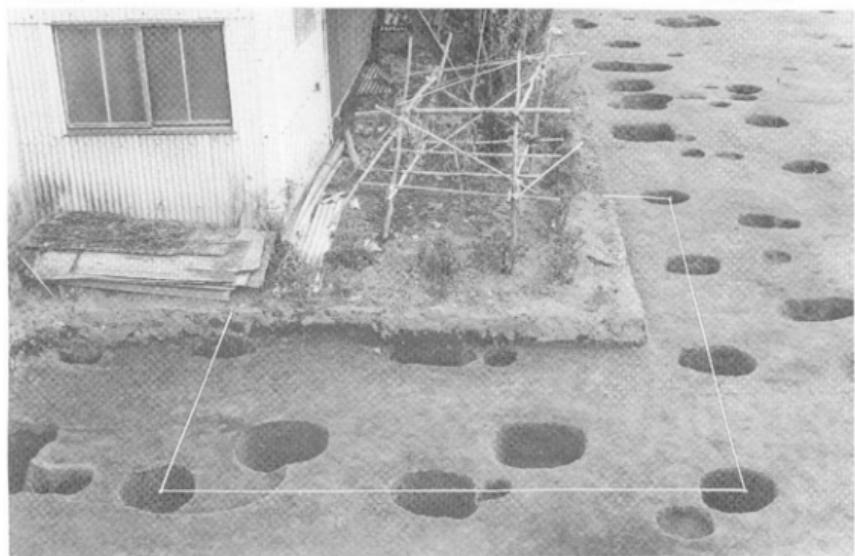
S B4120・S B4121 (東から)



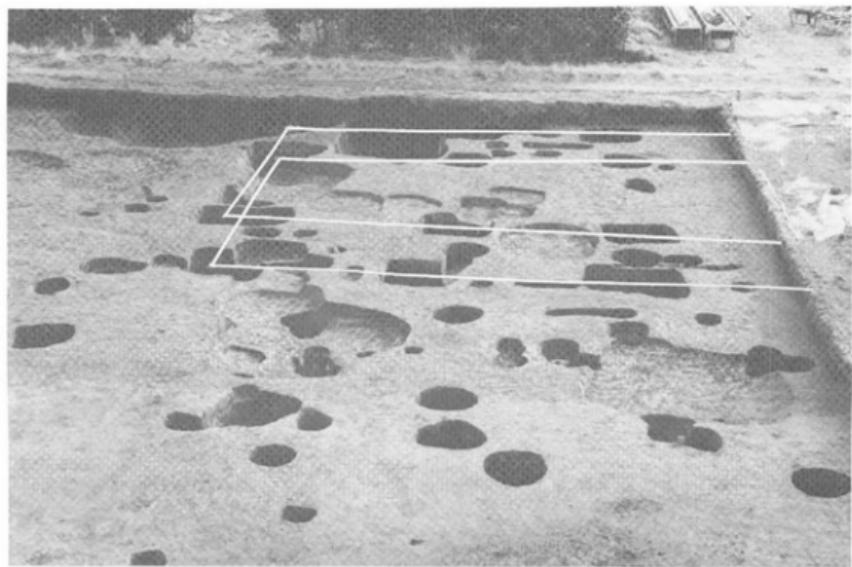
S B4137・S K4148～S K4152 (北から)



S B4124 (西から)



SB4141 (北から)



SB4160・SB4161 (北から)



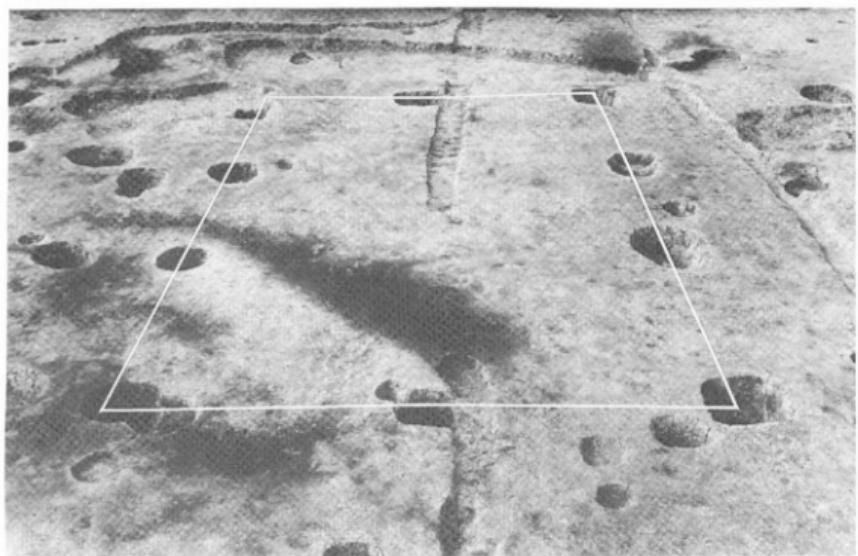
全 景



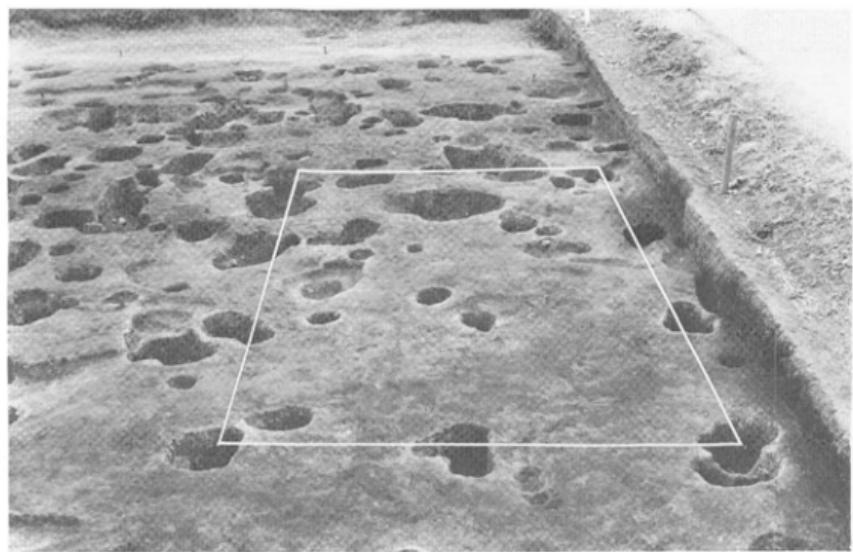
全 景（東から）

P L21

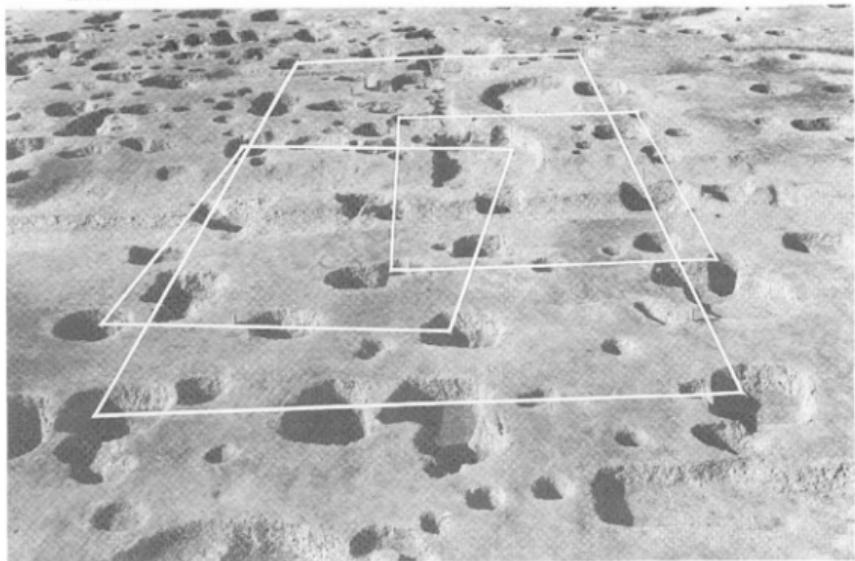
第63次調査



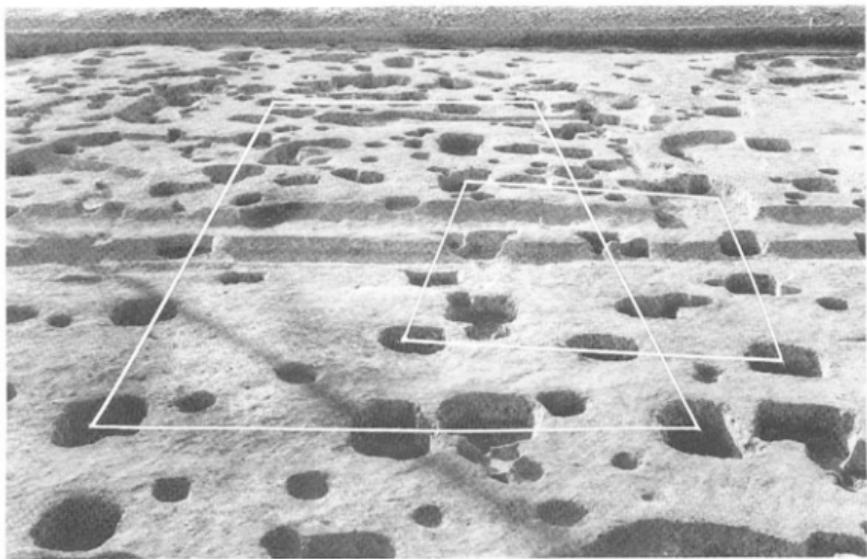
S B4183 (東から)



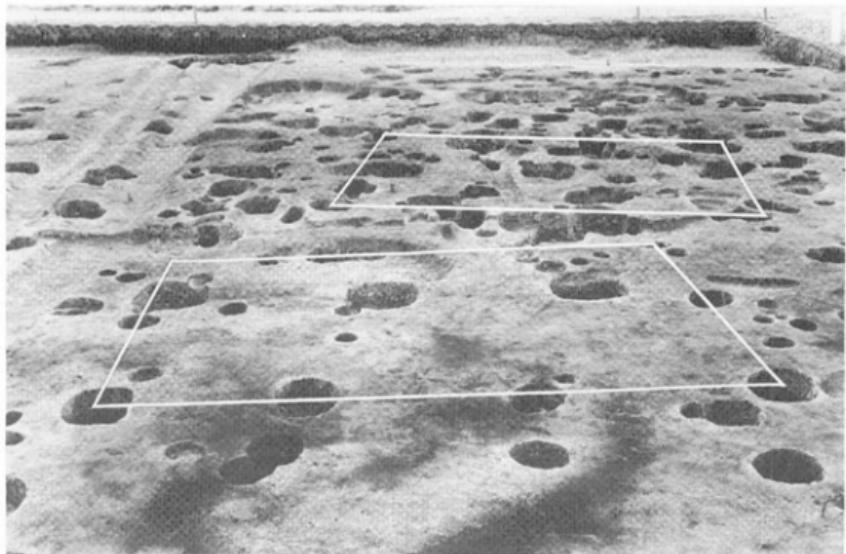
S B4189 (北から)



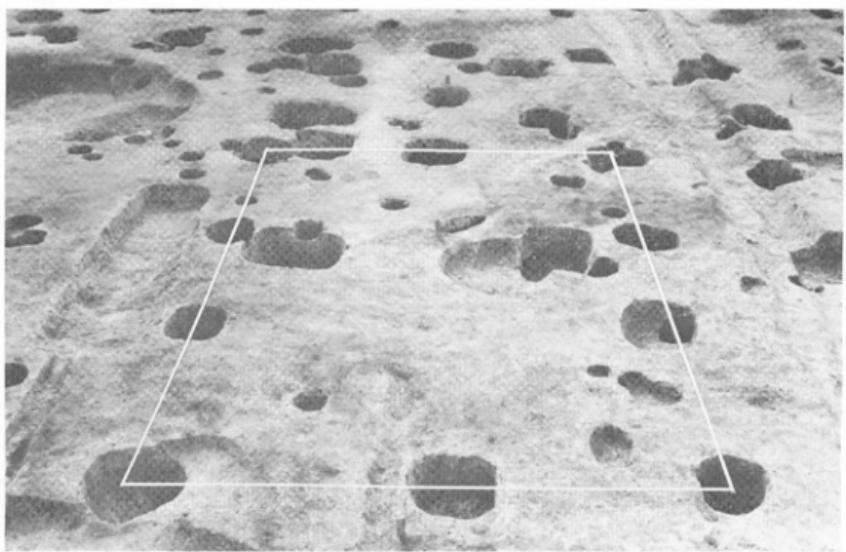
S B4186・S B4188・S B4201 (東から)



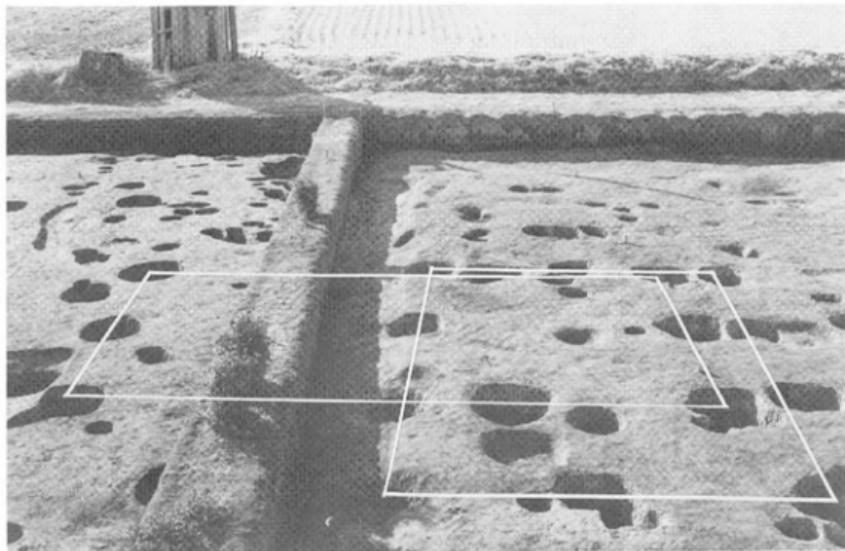
S B4187・S B4188 (東から)



SB 4184・SB 4199 (北から)



SB 4185 (北から)



S B 4206・S B 4207 (北から)



S E 4250 (西から)

P L 25

第58次調査



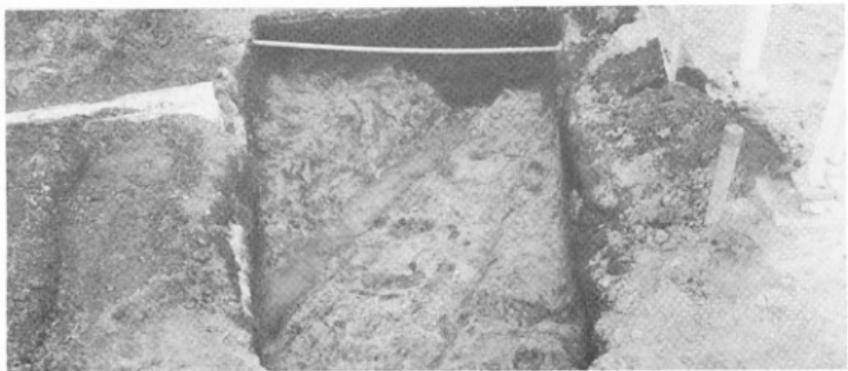
第58-1次調査（南から）



第58-2次調査（北から）



第58-3次調査A地点（北から）



第58-3次調査R地点（南から）



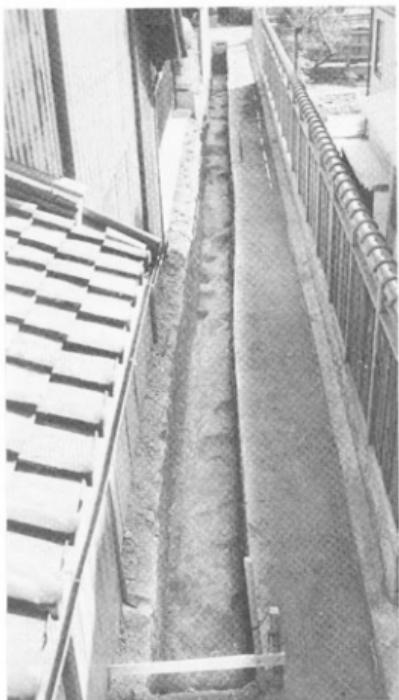
第58-4次調査（東から）



第58-4次調査（北から）

第58次調査

P L 28



第58-5次調査（北から）



第58-5次調査（北から）



第58-6次調査（北から）



第58-7次調査（北から）



第58-8次調査（東から）

---

---

三重県斎宮跡調査事務所年報1985

## 史 跡 斎 宮 跡

——発掘調査概報——

昭和61年3月31日

編集発行 三重県斎宮跡調査事務所

印 刷 (株)伊勢出版

---

本書は、三重県教育委員会の許可を得て斎宮研究会  
が増刷したものである。

